

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄								備考
計画の区分	学部の設置								
フリガナ	ガッコウホウジン ノートルダムセイシンガクエン								
設置者	学校法人 ノートルダム清心学園								
フリガナ	ノートルダムセイシンジョシダイガク								
大学の名称	ノートルダム清心女子大学 (Notre Dame Seishin University)								
大学本部の位置	岡山県岡山市北区伊福町2丁目16番9号								
大学の目的	<p>本学は、キリスト教精神に基づくリベラル・アーツ・カレッジとして、女子学生に広い教養を施し、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させ、倫理性と国際性をもちリーダーシップを発揮し、社会・地域に貢献できる誠実で有能な人材を育成することを目的とする。</p>								
新設学部等の目的	<p>グローバル化が進み、多様な価値観が共存する現代、ローカルにもグローバルにも異文化の相互理解と他者との協働が重要となっている。国内外社会の平和かつ安定的発展のために必要な諸理論と実際を学ぶとともに、日本文化を深く理解し、自らのアイデンティティを確立したうえで、対外発信する能力の涵養も不可欠である。</p> <p>国際文化学部国際文化学科では、加えて、本学の教育理念によるリベラルアーツを基盤に、実用的な語学力を身につけ、さらには基礎的なデータ利用のリテラシーによる文理横断的な視座を身につけることも可能とし、ローカルにもグローバルにも持続的な発展に貢献する人材を育成する。</p>								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	国際文化学部 【 Faculty of Global Studies 】 国際文化学科 【 Department of Global Studies 】 計	年	人	年次人	人	学士（国際文化学） 【 Bachelor of Global Studies 】	令和6年4月 第1年次	岡山市北区伊福町2丁目16番9号	
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	情報デザイン学部 情報デザイン学科 (90) (令和5年3月認可申請)								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	国際文化学部 国際文化学科	講義	演習	実験・実習	計	124 単位			
教員の組織概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等
		教授	准教授	講師	助教	計	助手		
	新設	人	人	人	人	人	人	人	
	国際文化学部 国際文化学科	7 (4)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	11 (8)	0 (0)	126 (94)	
	情報デザイン学部 情報デザイン学科	9 (8)	3 (3)	1 (1)	2 (2)	15 (14)	0 (0)	112 (81)	
	計	16 (12)	5 (5)	3 (3)	2 (2)	26 (22)	0 (0)	— (—)	
	既設	6 (6)	5 (5)	1 (1)	0 (0)	12 (12)	0 (0)	107 (107)	
	文学部 英語英文学科	5 (6)	2 (2)	2 (2)	0 (0)	9 (10)	0 (0)	107 (107)	
	文学部 日本語日文学科	4 (4)	4 (4)	1 (2)	0 (0)	9 (10)	0 (0)	107 (107)	
	文学部 現代社会学科	5 (5)	4 (5)	0 (0)	1 (1)	10 (11)	0 (0)	112 (112)	
人間生活学部 人間生活学科	7 (6)	7 (11)	3 (4)	0 (0)	17 (21)	0 (0)	125 (125)		
人間生活学部 児童学科	4 (4)	5 (7)	1 (1)	0 (0)	10 (12)	4 (4)	108 (108)		
人間生活学部 食品栄養学科	1 (2)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	2 (3)	0 (0)	0 (0)		
キリスト教文化研究所	0 (0)	4 (4)	1 (1)	0 (0)	5 (5)	0 (0)	0 (0)		
英語教育センター	1 (1)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	0 (0)		
国際交流センター	33 (34)	31 (38)	10 (12)	1 (1)	75 (85)	4 (4)	— (—)		
計	49 (46)	36 (43)	13 (15)	3 (3)	101 (107)	4 (4)	— (—)		
合計									

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		49 (58)	19 (19)	68 (77)					
	技 術 職 員		1 (1)	0 (0)	1 (1)					
	図 書 館 専 門 職 員		3 (3)	0 (0)	3 (3)					
	そ の 他 の 職 員		2 (3)	0 (0)	2 (3)					
	計		55 (65)	19 (19)	74 (84)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
	校 舎 敷 地	32,538 m ²	0 m ²	0 m ²	32,538 m ²	校舎敷地1,021m ² は 借地 運動場用地3,548m ² はノートルダム清心 女子大学附属小学校 との共用(収容定員 360名、運動場面積 基準3,548m ²)				
	運 動 場 用 地	7,484 m ²	0 m ²	3,548 m ²	11,032 m ²					
	小 計	40,022 m ²	0 m ²	3,548 m ²	43,570 m ²					
	そ の 他	31,248 m ²	0 m ²	0 m ²	31,248 m ²					
合 計	71,270 m ²	0 m ²	3,548 m ²	74,818 m ²						
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		40,729 m ² (40,729 m ²)	0 m ² (0 m ²)	0 m ² (0 m ²)	40,729 m ² (40,729 m ²)	大学全体				
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設					
	55 室	7 室	21 室	4 室 (補助職員 3 人)	2 室 (補助職員 2 人)	大学全体				
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称		室 数						
		国際文化学部 国際文化学科		11 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕 種	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点			
	国際文化学部 国際文化学科	377,182 [87,047] (374,406 [86,654])	2,936 [441] (2,916 [432])	7,563 [5,982] (7,557 [5,976])	9,361 (9,361)	0 (0 [0])	0 (0 [0])	学部単位での特定 不能なため、大学 全体の数		
	計	377,182 [87,047] (374,406 [86,654])	2,936 [441] (2,916 [432])	7,563 [5,982] (7,557 [5,976])	9,361 (9,361)	0 (0 [0])	0 (0 [0])			
図書館	面積	閲覧座席数	取 納 可 能 冊 数							
		3,172 m ²	379 席	32,3750 冊				大学全体		
体育館	面積	体育館以外のスポーツ施設の概要								
	6,061 m ²	水泳プール		テニスコート						
経 費 積 立 方 法 概 要	経費の見積り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	
		教員1人当り研究費等		550千円	550千円	550千円	550千円	-千円	-千円	大学全体 図書費には電子 ジャーナル・デー タベースの整備費 (運用コストを含 む)を含む
		共同研究費等		1,610千円	3,220千円	4,830千円	6,440千円	-千円	-千円	
		図書購入費	1,934千円	3,729千円	3,729千円	2,832千円	1,934千円	-千円	-千円	
	設備購入費	85,097千円	12,698千円	8,851千円	1,798千円	1,798千円	-千円	-千円		
	学生1人当り 納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
	1,225千円	1,025千円	1,025千円	1,025千円	-千円	-千円				
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入 等							

既設大学等の状況	大学の名称	ノートルダム清心女子大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
		年	人	年次人	人		倍			
	文学部						0.85			
	英語英文学科	4	90	—	350	学士 (英語英文学)	0.80	昭和24年度	岡山県岡山市北区 伊福町2丁目16番9号	令和3年度 入学定員増 (10人)
	日本語日文学科	4	70	—	270	学士 (日本語日文学)	0.95	昭和27年度		令和3年度 入学定員増 (10人)
	現代社会学科	4	70	—	270	学士 (現代社会学)	0.81	平成15年度		令和3年度 入学定員増 (10人)
	人間生活学部						0.98			
	人間生活学科	4	80	—	310	学士 (人間生活学)	1.05	昭和24年度	岡山県岡山市北区 伊福町2丁目16番9号	令和3年度 入学定員増 (10人)
	児童学科	4	130	—	510	学士 (児童学)	0.90	昭和39年度		令和3年度 入学定員増 (10人)
食品栄養学科	4	80	—	320	学士 (食品栄養学)	1.04	昭和40年度			
大学の名称	ノートルダム清心女子大学大学院									
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地		
	年	人	年次人	人		倍				
文学研究科										
博士前期・修士課程						0.39				
日本語日文学専攻	2	3	—	9	修士 (文学)	0.25	平成7年度	岡山県岡山市北区 伊福町2丁目16番9号	※令和5年度 入学定員減 (△3人)	
英語英米文学専攻	2	3	—	7	修士 (文学)	0.62	平成7年度		※令和5年度 入学定員減 (△1人)	
社会文化学専攻	2	3	—	7	修士 (文学)	0.37	平成19年度		※令和5年度 入学定員減 (△1人)	
博士後期課程						0.00				
英語英米文学専攻	3	2	—	2	博士 (文学)	0.00	令和5年度			
日本語日文学専攻	3	2	—	6	博士 (文学)	0.00	平成9年度			
人間生活学研究科										
修士課程						0.32				
人間発達学専攻	2	11	—	22	修士 (学術)	0.22	平成7年度	岡山県岡山市北区 伊福町2丁目16番9号		
食品栄養学専攻	2	3	—	6	修士 (学術)	1.00	平成7年度			
人間生活学専攻	2	6	—	12	修士 (学術)	0.16	平成9年度			
博士後期課程						0.00				
人間複合科学専攻	3	3	—	9	博士 (学術)	0.00	平成12年度			
附属施設の概要	<p>名称：ノートルダム清心女子大学附属小学校 目的：教育の理論および実際に関する研究や教職に関わる実践的な指導力を育成するための施設 所在地：岡山県岡山市北区伊福町2丁目16番9号 設置年月：昭和42年4月 規模等：土地面積3,364㎡ 建物面積：3,645㎡</p> <p>名称：ノートルダム清心女子大学附属幼稚園 目的：教育の理論および実際に関する研究や教職に関わる実践的な指導力を育成するための施設 所在地：岡山県岡山市北区伊福町2丁目16番9号 設置年月：昭和40年4月 規模等：土地面積2,740㎡ 建物面積：1,426㎡</p>									

学校法人ノートルダム清心学園 設置認可に関わる組織の移行表

令和5年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和6年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
ノートルダム清心女子大学				ノートルダム清心女子大学				
文学部				文学部				
英語英文学科	90	—	360	英語英文学科	90	—	360	
日本語日文学科	70	—	280	日本語日文学科	70	—	280	
現代社会学科	70	—	280	現代社会学科	70	—	280	
人間生活学部				人間生活学部				
人間生活学科	80	—	320	人間生活学科	80	—	320	
児童学科	130	—	520	児童学科	130	—	520	
食品栄養学科	80	—	320	食品栄養学科	80	—	320	
計	520	—	2080	国際文化学部				学部の設置(認可申請)
				国際文化学科	100	—	400	学部の設置(認可申請)
				情報デザイン学部				
				情報デザイン学科	90	—	360	
				計	710	—	2840	
ノートルダム清心女子大学大学院				ノートルダム清心女子大学大学院				
文学研究科				文学研究科				
日本語日文学専攻(M)	3	—	6	日本語日文学専攻(M)	3	—	6	
英語英米文学専攻(M)	3	—	6	英語英米文学専攻(M)	3	—	6	
社会文化学専攻(M)	3	—	6	社会文化学専攻(M)	3	—	6	
日本語日文学専攻(D)	2	—	6	日本語日文学専攻(D)	2	—	6	
英語英米文学専攻(D)	2	—	6	英語英米文学専攻(D)	2	—	6	
人間生活学研究科				人間生活学研究科				
人間発達学専攻(M)	11	—	22	人間発達学専攻(M)	11	—	22	
食品栄養学専攻(M)	3	—	6	食品栄養学専攻(M)	3	—	6	
人間生活学専攻(M)	6	—	12	人間生活学専攻(M)	6	—	12	
人間複合科学専攻(D)	3	—	9	人間複合科学専攻(D)	3	—	9	
計	36	—	79	計	36	—	79	

教育課程等の概要																
(国際文化学部 国際文化学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
キリスト教科目	人間論	1前	2			○								兼3	オムニバス	
	キリスト教学Ⅰ	1・2・3・4後		2		○								兼1		
	キリスト教学Ⅱ	2・3・4前		2		○								兼1		
	キリスト教学Ⅲ	1・2・3・4後		2		○								兼4	オムニバス ※演習	
	キリスト教学Ⅳ	1・2・3・4後		2		○								兼1	※演習	
	キリスト教学Ⅴ	1・2・3・4後		2		○								兼4	オムニバス ※演習	
	キリスト教学Ⅵ	1・2・3・4前		2		○								兼3	オムニバス ※演習	
	キリスト教学Ⅶ	2・3・4前		2		○								兼1	※演習	
	キリスト教学Ⅷ	2・3・4後		2		○								兼1		
	キリスト教学Ⅸ	1・2・3・4後		2		○								兼1		
	キリスト教学Ⅹ	2・3・4後		2		○								兼1		
	キリスト教学ⅩⅠ	1・2・3・4後		2		○								兼1		
	キリスト教学ⅩⅡ	2・3・4前		2		○								兼1		
	キリスト教学ⅩⅢ	2・3・4前		2		○								兼1		
	キリスト教学ⅩⅣ	2・3・4前		2		○								兼1	※演習	
	キリスト教学ⅩⅤ	2・3・4後		2		○								兼1	※演習	
	キリスト教学ⅩⅥ	2・3・4前		2		○								兼1		
小計(17科目)	—	—	2	32	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼9		
全学共通科目	教養科目	哲学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		哲学Ⅱ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		倫理学Ⅰ	2・3・4前		2		○								兼1	
		倫理学Ⅱ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		文学A	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		文学B	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		文学C	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		文学D	1・2・3・4前		2		○								兼2	集中 オムニバス
		芸術A	1・2・3・4前		2		○								兼1	集中
		芸術B	1・2・3・4前		2		○								兼1	集中
		芸術C	1・2・3・4前		2		○								兼2	集中 オムニバス
		歴史学A	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		歴史学B	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		歴史学C	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		日本国憲法Ⅰ	1・2・3・4前・後		2		○								兼1	
		日本国憲法Ⅱ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		法律学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		法律学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		社会学	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		心理学Ⅰ(心理学概論)	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		心理学Ⅱ(臨床心理学概論)	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		心理学Ⅲ(健康・医療心理学)	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		情報学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		情報学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		化学Ⅰ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		化学Ⅱ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		生物学Ⅰ	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		生物学Ⅱ	1・2・3・4前		2		○								兼3	オムニバス
		科学史	1・2・3・4後		2		○								兼1	
		医学Ⅰ(人体の構造と機能及び疾病)	1・2・3・4前		2		○								兼1	
		医学Ⅱ	1・2・3・4後		2		○								兼1	
小計(31科目)	—	—	0	62	0	—	—	—	0	0	0	0	0	兼30		
外国語科目	英語ⅠA	1前		1			○							兼7	集中	
	英語ⅠB	1前		1			○							兼4		
	英語ⅡA	1後		1			○							兼7	集中	
	英語ⅡB	1後		1	1		○							兼4		
	英語ⅢA	2前		1			○							兼4		
	英語ⅢB	2前		1	1		○							兼3		
	英語ⅣA	2後		1			○							兼4		
	英語ⅣB	2後		1			○							兼3		
	特別演習英語A	1・2・3・4前		1			○							兼1		
	特別演習英語B	1・2・3・4後		1			○							兼1		
	特別演習英語C	1・2・3・4前・後		1			○							兼1		
	特別演習英語D	1・2・3・4前		1			○							兼1		
	特別演習英語E	1・2・3・4後		1			○							兼1		
	特別演習英語F	1・2・3・4前		1			○							兼1		
	特別演習英語G	1・2・3・4後		1			○							兼1		
	海外英語演習A	1・2・3・4前		2			○							兼1	集中	
	海外英語演習B	1・2・3・4前		2			○							兼1	集中	
ドイツ語ⅠA	1前		1			○							兼1			
ドイツ語ⅠB	1前		1			○							兼1			

全学共通科目	外国語科目	ドイツ語ⅡA	1後	1		○									兼1	
		ドイツ語ⅡB	1後	1		○									兼1	
		ドイツ語ⅢA	2前	1		○									兼1	
		ドイツ語ⅢB	2前	1		○									兼1	
		フランス語ⅠA	1前	1		○									兼1	
		フランス語ⅠB	1前	1		○									兼1	
		フランス語ⅡA	1後	1		○									兼1	
		フランス語ⅡB	1後	1		○									兼1	
		フランス語ⅢA	2前	1		○									兼1	
		フランス語ⅢB	2前	1		○									兼1	
		中国語ⅠA	1前	1		○									兼2	
		中国語ⅠB	1前	1		○									兼1	
		中国語ⅡA	1後	1		○									兼2	
		中国語ⅡB	1後	1		○									兼1	
		中国語ⅢA	2前	1		○									兼1	
		中国語ⅢB	2前	1		○									兼1	
		コリア語ⅠA	1前	1		○									兼1	
		コリア語ⅠB	1前	1		○									兼1	
		コリア語ⅡA	1後	1		○									兼1	
		コリア語ⅡB	1後	1		○									兼1	
		コリア語ⅢA	2前	1		○									兼1	
		コリア語ⅢB	2後	1		○									兼1	
		特別演習中国語Ⅰ	1・2・3・4前	1		○									兼1	
		特別演習中国語Ⅱ	1・2・3・4後	1		○									兼1	
	特別演習日本語Ⅱ	1・2・3・4後	1		○									兼1		
	小計(44科目)	—	4	42	0	—			0	0	0	0	0	0	兼23	
	健康科目	心と体の健康論	1前・後	2		○									兼3	オムニバス
		体育実技Ⅰ	1前・後	1			○								兼1	
		体育実技Ⅱ	2・3・4前・後	1			○								兼1	
		体育実技Ⅲ	2・3・4前・後	1			○								兼1	
	小計(4科目)	—	2	3	0	—			0	0	0	0	0	0	兼5	
	自立力育成科目	A群	わたしたちの社会と経済	1・2・3・4前	2		○								兼1	
			わたしたちの社会と政治	1・2・3・4前	2		○								兼1	
			わたしたちの社会と法	1・2・3・4後	2		○								兼1	
わたしたちの社会と科学			1・2・3・4前	2		○								兼1		
ことばと社会			1・2・3・4前	2		○								兼1	集中	
インクルーシブを考える			1・2・3・4後	2		○								兼1		
キャリアデザイン基礎			1・2後	2			○							兼1		
キャリアデザイン発展			2・3前	2		○								兼1	※演習	
小計(8科目)		—	0	16	0	—			0	0	0	0	0	兼8		
B群		ボランティア実践A	1・2・3・4前	2		○									兼1	※実習
		ボランティア実践B	1・2・3・4後	2		○									兼1	※実習
		日本語表現A	1・2・3・4前	2		○									兼1	
		日本語表現B	1・2・3・4前	2		○									兼1	
		日本語表現C	1・2・3・4前	2		○									兼1	
		日本語表現D	1・2・3・4前	2		○									兼2	オムニバス ※演習
		日本語表現E	1・2・3・4後	2		○									兼2	オムニバス ※演習
		「いのち」と「くらし」の倫理	1・2・3・4後	2		○									兼1	※演習
		ディスカッションから社会を考える	1・2・3・4前	2		○									兼1	
		女性の自立を考える	1・2・3・4前	2		○									兼1	隔年
		共生と文化を考える	1・2・3・4後	2		○									兼1	
	自立力育成ゼミⅠ	1・2・3・4前・後	2			○								兼1		
自立力育成ゼミⅡ	2・3・4通	2			○								兼1			
自立力育成ゼミⅢ	2・3・4前	2			○								兼1			
自立力育成ゼミⅣ	1・2・3・4後	2			○								兼1			
自立力育成ゼミⅤ	1・2・3・4前・後	2			○								兼1	※講義		
自立力育成ゼミⅥ	1・2・3・4後	2			○								兼2	共同 ※実習		
自立力育成ゼミⅦ	1・2・3・4後	2			○								兼1			
自立力育成ゼミⅧ	1・2・3・4後	2			○								兼1	※講義		
小計(19科目)	—	0	38	0	—			0	0	0	0	0	0	兼16		
科目情報	情報メディア演習	1・2・3・4前・後	2		○									兼4	※演習	
	小計(1科目)	—	0	2	0	—			0	0	0	0	0	兼4		

基礎科目	専門基礎科目	基礎演習 グローバル社会論基礎 多文化共生論基礎 Intensive English 導入演習 表象文化論基礎	1前 1前 1前 1後 1後	2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○		3 3 2 1 3 2	2 1 1 2 1	2 1 1 2				兼2 兼1	オムニバス オムニバス・共同(一部) 集中 オムニバス
	情報系基礎科目	ICTリテラシ 統計学基礎	1前 1後	2 2			○ ○								兼3 兼1	共同
		小計(8科目)	—	16	0	0	—		7	2	2	0	0	兼7		
コア科目	グローバル社会系科目	国際法 国際関係論 平和学 国際経済法 国際社会学	2前 2前 2後 3前 3前	2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○		1 1 1 1 1							
	多文化共生系科目	グローバル化と人の移動 多文化共生論 文化人類学 言語文化論 華僑華人論 ジェンダーと平等・差異 多文化共生政策	2前 2前 2前 2後 2後 3後 2後	2 2 2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		1 1 1 1 1		1			兼1 兼1	集中	
	表象文化系科目	岡山学 身体表象論 日本文化論 メディア論 日本近代美術史 宗教人類学 日英比較文学史 文学と芸術	1前 2前 2前 2後 2後 3前 3前 3前	2 2 2 2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		1 1 1 1	1				兼1 兼1 兼1	集中 ※演習 集中	
専攻科目	グローバルスタディーズ科目	近現代の日本 近現代の中国 近現代の欧米 近現代の韓国朝鮮 近現代の東南アジア アジア経済史 国際地域情報Ⅰ 国際地域情報Ⅱ 国際地域情報Ⅲ 国際地域情報Ⅳ 国際地域情報Ⅴ 国際地域情報Ⅵ 国際地域情報Ⅶ 国際地域情報Ⅷ 国際地域情報Ⅸ	1前 1前 1前 1後 1後 2前 2後 3前 2前 2後 2前 2後 2前 2後 2後	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1				兼1 兼1 兼1 兼1	オムニバス
		国内外研修プログラム 国際交流現場体験プログラム	2前 3前	2 1			○ ○		3						兼1	※講義 集中・3クラス ※講義 集中
		Studies of Globalization Studies of Multiculturalism Global History Cultural Representation Studies International Law Japanese Culture Language and Culture Studies International Relations Economic History Okayama Studies	1後 1後 2前 2前 2後 2後 3前 3前 3後 3後	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		3 2 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1					兼1	オムニバス オムニバス・共同(一部) 隔年 オムニバス 隔年 隔年 隔年 隔年 オムニバス/隔年
		Practical English English Presentation Project Based English 英語学概説 総合インドネシア語Ⅰ 総合インドネシア語Ⅱ 総合スワヒリ語Ⅰ 総合スワヒリ語Ⅱ 総合ベトナム語Ⅰ 総合ベトナム語Ⅱ 総合ポルトガル語Ⅰ 総合ポルトガル語Ⅱ 実践中国語Ⅰ 実践中国語Ⅱ	1後 2前 2後 2前 2後 3前 2後 3前 2後 3前 2後 3前 2後 3前 2後 3前	2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2			○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○		1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1				兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1	※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義 ※講義	
		小計(61科目)	—	0	121	0	—		7	2	2	0	0	兼14		

学 科 目	専 攻 科 目	卒業研究	3前	2				○		7	2	2						
		研究演習Ⅰ	3後	2				○		7	2	2						
		研究演習Ⅱ	4通	4				○		7	2	2						
		卒業研究	4通	4				○		7	2	2						
		小計(3科目)	—	8	0	0		—		7	2	2	0	0				
		社 会 情 報 系 科 目	情報数学Ⅱ	1前		2		○										兼1
			情報数学Ⅲ	1後		2		○										兼1
			プログラミング入門Ⅰ	1前		2			○									兼2
			プログラミング入門Ⅱ	1前		2			○									兼2
			プログラミング演習	1後		2			○									兼3
			統計学Ⅱ	2前		2			○									兼1
			地理情報システム	2後		2			○									兼1
			データハンドリング	2前		2			○									兼1
	マイクロ経済学		2前		2			○									兼1	
	企業データ論		3前		2			○									兼1	
	マーケティング概論		3後		2			○									兼1	
	計量経済分析		3後		2			○									兼1	
	小計(12科目)	—	0	24	0		—		0	0	0	0	0				兼9	
講 義 文 化 研 究 所 開	キリスト教思想特講Ⅰ	2・3・4前		2			○										兼1	
	キリスト教思想特講Ⅱ	2・3・4後		2			○										兼1	
	キリスト教文化特講Ⅰ	2・3・4前		2			○										兼1	
	キリスト教文化特講Ⅱ	2・3・4後		2			○										兼1	
	キリスト教文学特講Ⅰ	2・3・4前		2			○										兼1	
	キリスト教文学特講Ⅱ	2・3・4後		2			○										兼1	
	キリスト教文学演習Ⅰ	3・4前		2				○									兼1	
	キリスト教文学演習Ⅱ	3・4後		2				○									兼1	
	小計(8科目)	—	0	16	0		—		0	0	0	0	0				兼2	
教 職 に 関 す る 科 目	教職基礎	1後		2			○										兼1	
	教育原理	2後		2			○										兼1	
	教育心理学	2前		2			○										兼1	
	発達心理学	2前		2			○										兼1	
	学校経営論	3前		2			○										兼1	
	特別支援教育基礎論	1後		2			○										兼1	
	教育課程論	2前		2			○										兼1	
	英語科教育法A	2後		2			○										兼1	
	英語科教育法B	3前		2			○										兼1	
	英語科指導法演習A	3後		2				○									兼1	
	英語科指導法演習B	3後		2				○									兼1	
	道徳教育の理論と方法	2後		2				○									兼1	
	総合的な学習の時間及び特別活動の指導法	2後		2				○									兼2	
	教育方法論(情報通信技術を活用した教育の理論及び方法を含む。)	3前		2				○									兼1	
	生徒指導及び進路指導・キャリア教育の理論と方法	3後		2				○									兼1	
	教育相談	3後		2				○									兼1	
	中等教育実習事前事後指導	4通		1				○									兼5	
	中等教育実習Ⅰ	4通		4					○								兼5	
	中等教育実習Ⅱ	4通		2					○								兼5	
	教職実践演習(中・高)	4後		2					○								兼5	
	介護等体験の理論	2後		1				○									兼1	
	介護等体験の実践	3通		1					○								兼1	
	教職特講Ⅰ	3後		2				○									兼1	
	教職特講Ⅱ	4前		2				○									兼1	
	教職特講Ⅲ	4後		2				○									兼1	
	小計(25科目)	—	0	49	0		—		0	0	0	0	0				兼16	
目 学 論 校 図 書 館 に 関 す る 科 書	学校経営と学校図書館	2・3・4前			2		○										兼1	
	学校図書館メディアの構成	2・3・4前			2		○										兼1	
	学習指導と学校図書館	2・3・4前			2		○										兼1	
	読書と豊かな人間性	2・3・4後			2		○										兼1	
	情報メディアの活用	2・3・4後			2		○										兼1	
	小計(5科目)	—	0	0	10		—		0	0	0	0	0				兼4	
図 書 館 に 関 す る 科 目	図書館概論	1前			2		○										兼1	
	図書館制度・経営論	3前			2		○										兼1	
	図書館情報技術論	2後			2		○										兼1	
	図書館サービス概論	2後			2		○										兼1	
	情報サービス論	3前			2		○										兼1	
	児童サービス論	1前			2		○										兼1	
	情報サービス演習Ⅰ	3前			1			○									兼1	
	情報サービス演習Ⅱ	3後			1			○									兼1	
	図書館情報資源概論	1前			2		○										兼1	
	情報資源組織論	2前			2		○										兼1	
	情報資源組織演習Ⅰ	2前			1			○									兼1	
	情報資源組織演習Ⅱ	2後			1			○									兼1	
	図書館サービス特論	3後			2		○										兼1	
	図書・図書館史	1後			2		○										兼1	
	図書館施設論	3後			2		○										兼1	
	小計(15科目)	—	0	0	26		—		0	0	0	0	0				兼3	

博物館に関する科目	生涯学習概論	1前			2	○										兼1	集中 共同 ※講義
	博物館概論	1前			2	○										兼1	
	博物館経営論	2後			2	○										兼1	
	博物館資料論	2前			2	○										兼1	
	博物館資料保存論	2後			2	○										兼1	
	博物館展示論	2前			2	○										兼1	
	博物館教育論	2前			2	○										兼1	
	博物館情報・メディア論	2前			2	○										兼1	
	博物館実習	3通			3											兼2	
小計(9科目)	—	0	0	19	—			0	0	0	0	0	0	0	兼6		
日本語教員養成課程に関する科目	日本語教授法ⅠA	2前			2	○										兼1	※演習
	日本語教授法ⅠB	2後			2	○										兼1	※演習
	日本語教授法ⅡA	3前			2	○										兼1	※演習
	日本語教授法ⅡB	3後			2	○										兼1	※演習
	日本語教育実習事前事後指導Ⅰ	4前			2		○									兼1	
	日本語教育実習事前事後指導Ⅱ	4後			1		○									兼1	
	日本語教育実習	4後			1		○									兼1	集中
小計(7科目)	—	0	0	12	—			0	0	0	0	0	0	0	兼2		
合計(277科目)	—	32	367	31	—			8	1	2	0	0	0	0	兼126		
学位又は称号	学士(国際文化学)	学位又は学科の分野				文学関係											
卒業要件及び履修方法						授業期間等											
○以下の単位修得を充たし、全学共通科目から30単位以上、学科科目から78単位以上を修得し、合計124単位以上を修得するものとする。						1学年の学期区分						2期					
【全学共通科目】(30単位以上) ・キリスト教科目「人間論」を2単位を必修科目とする。 ・「キリスト教学Ⅰ～Ⅵ」の中から4単位を選択必修とする。 ・教養科目を4単位を選択必修とする。 ・外国語科目の「英語ⅠA」・「英語ⅠB」・「英語ⅡA」・「英語ⅢA」の4単位を必修とする。 ・その他の外国語科目から原則として1か国語を6単位必修とする。 ・健康科目の「心と体の健康論」2単位を必修とする。 ・「体育実技Ⅰ」「体育実技Ⅱ」「体育実技Ⅲ」の中から1単位を選択必修とする。 ・自立力育成科目A群から2単位を選択必修とする。 ・自立力育成科目B群から2単位を選択必修とする。																	
【学科科目】(基礎科目から16単位、専攻科目から62単位以上を修得) ・基礎科目においては専門基礎科目を12単位必修、情報系基礎科目「ICTリテラシ」「統計学基礎」4単位を必修とする。 ・専攻科目においては、 グローバル社会系科目から4単位を選択必修とする。 多文化共生系科目の中から4単位を選択必修とする。 表象文化系科目の中から4単位を選択必修とする。 グローバルスタディーズ科目から「近現代の日本」「近現代の中国」「近現代の欧米」「近現代の韓国朝鮮」「近現代の東南アジア」「アジア経済史」から4単位を選択必修とする。「国際地域情報Ⅰ～Ⅸ」から6単位を選択必修とする。合計10単位を選択必修とする。 英語展開科目の中から6単位を選択必修とする。 実践外国語科目から4単位を選択必修とする。そのうち2単位を「Practical English」「English Presentation」「英語学概説」から選択必修とする。 「研究演習Ⅰ」と「研究演習Ⅱ」は計4単位を必修とする。 「卒業研究」は4単位を必修とする。 社会情報系科目のうち「情報数学Ⅱ」「情報数学Ⅲ」「プログラミング入門Ⅰ」「プログラミング入門Ⅱ」「プログラミング演習」「統計学Ⅱ」「地理情報システム」「データハンドリング」から2単位、「ミクロ経済学」「企業データ論」「マーケティング概論」「計量経済分析」から2単位を選択必修とする。																	
○履修科目の登録上限 各年次の履修登録科目の上限は、1年間49単位とする。						1学期の授業期間						15週					
						1時限の授業時間						90分					

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 キリスト教科目	人間論	<p>(概要) 本学の建学の精神の根幹にあるキリスト教の人間観を、本学の歴史や教育理念、またその基礎にある聖書とキリスト教の思想、および哲学的な人間理解を通して考察する。また、キリスト教的価値観に基づいた「生き方」について、現代における多様な社会課題に目を向けながら、自らの問題として考え、実践することを学ぶ。特別講義では、本学の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会の創立者聖ジュリー・ピリアートの目指した教育の精神と、それに基づく修道女会の社会貢献活動の現在について学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(33 崎川 修/7回) 人間として生きることの意義について学ぶ①人間論で何を学ぶか②人間とは何か③ライフサイクルの中の人間④かかわりと成熟⑤いのちを見つめる・特別講義2回</p> <p>(43 山根道公/4回) イエス・キリストのメッセージを学ぶ①イエスの生き方に学ぶ②神に結ばれる愛の福音③あわれみと隣人愛④アガペーの愛を生きる</p> <p>(62 岡田紅理子/4回) キリスト教の人間生活を学ぶ①キリスト教を学ぶ意義、②聖書の基本理解、③旧約聖書における神と人間、④新約聖書におけるキリストの福音</p>	オムニバス方式
	キリスト教学Ⅰ	死にたいと思うほどの人生の挫折の中で聖書に出会い、生きる希望の光を見出し、それを作品に表わした人たちがいる。本授業ではそうした作品を導入とし、新約聖書と遠藤周作『イエスの生涯』をテキストにして、新約聖書の福音書を中心にイエスの生涯と教えについて学び、闇の中にいる人間に希望の光を与えるイエスの福音（喜びの知らせ）とはどのような精神、価値観をもつものかを考察することで、そうしたキリスト教的精神、価値観が、現代社会にあつてどのような意味をもつか、理解し、さらに自分自身の問題とどのような関わりをもつか、主体的に考える力を身につけることを目的とする。また、そうした理解に必要なキリスト教の基礎知識を修得する。	
	キリスト教学Ⅱ	キリスト教は、社会のなかで社会とともに歩んできた。しかし、その道のりは決して平坦とはいえ、国家権力と緊密な関係を保っていた時代もあった。その後、植民地・帝国主義時代や世界大戦を経た時代の変革期を迎え、カトリック教会は信仰の視点に立って、人間社会に対する自らの使命を考察してきた。本科目のねらいは、キリスト教の倫理的立場に親しんでいくことにある。講義では、1891年に公布された回勅（教皇の公文書）『レールム・ノヴァム』以降に出されたカトリック教会の公文書を参照しながら、現代社会の生命、環境、社会にかかわる諸問題を考察していく。	
	キリスト教学Ⅲ	<p>(概要) 本講義では、主にクリスマスを中心として、キリスト教の典礼や宗教文化とその意義について多面的に学ぶ。とくに本学のクリスマスミサおよびアドヴェント（待降節）関連行事の準備と実施を通じて、ミサを中心としたカトリックの祈りの文化についての理解を深める。また祈りの場をつくるための実践的な課題に主体的に向き合い、他者と協働してそれらを解決するプロセスを通じて、本学の建学の精神を主体的、協働的に体得することを目指す。また、特別講義では、恵まれない子どもたちにクリスマスプレゼントを届ける活動を行なっているNPO法人の活動について学び、クリスマスの意義を生きた社会的実践のうちに理解することを促す。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(33 崎川 修/10回) ①オリエンテーション②飾り付け指導③点灯式の実施④ミサリハーサル⑤クリスマスミサの実施⑥まとめ・特別講義2回</p> <p>(42 山下美紀/2回) ①愛と祈りを生きた女性②本学の伝統と祈りの文化</p> <p>(43 山根道公/1回) クリスマスの歴史と意義</p> <p>(62 岡田紅理子/2回) ①キリスト教の暦と典礼②ミサと祈りの文化</p>	オムニバス方式 講義26時間 演習4時間
	キリスト教学Ⅳ	本授業は、聖書の講読を通じてキリスト教の精神と文化的伝統についての理解を深めることを目的とする。旧約聖書と新約聖書の成り立ち、両書の関連などを確認したうえで、聖書を読んでいく。その際、それぞれの箇所が、伝統的にどのように解釈されてきたかに注意を払い、また、現代社会のどのような問題に込められているかを考えていく。また、文学、美術、音楽において、聖書のできごとやことばがどのように表現されてきたかにも注目する。	講義26時間 演習4時間

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目	キリスト教科目	キリスト教学V (概要) 同じ宗教・教派といえども、国・地域によって信仰の実践や表現のありようはさまざまであり、それが顕著にあらわれるのは、宗教の祝祭日においてである。本科目では、キリスト教信仰の根幹にある、イエス・キリストの復活という出来事を記念するイースター（復活祭）に特に注目する。特別講義（4回）を含むアジア、中東、ラテンアメリカにおける事例報告とグループ・ディスカッションにより、その土地の文化、社会、歴史状況のなかで育まれてきた多様な宗教実践への理解を深める。また、イースターエッグの製作を通して「イエス・キリストの復活」に見出されてきた意義を体験的に考察できるようになることを目指す。 (オムニバス方式／全15回) (62 岡田紅理子／8回) 多宗教社会における宗教行事、カトリック教会暦、「復活」の意味、アジアの事例から、カトリック教会の歴史と祝祭日の実践を理解する。 (31 小林修典／4回) 文学と美術にあらわれるキリスト教の伝統について、クリスマスとイースターの祝祭日および聖母崇拜に関連した事例を学ぶ。 (12 津田 葵／1回) 本学におけるキリスト教関連行事の歴史とその意義に関する講義。 (28 片山 裕之／2回) イースターエッグの製作の指導と、学生が作ったイースターエッグの総評を行う。	オムニバス方式 講義26時間 演習4時間
		キリスト教学VI (概要) 本授業のテーマは、「グローバル社会における教育と社会活動ーカトリック教会の奉仕の現実」である。カトリック教会がグローバル化の時代の社会の現実的な問題にどのように取り組んでいるかを、事例を通じて学んでいく。とくに、教育と社会活動に注目する。国際的な奉仕活動のあり方と、その背景にあるカトリック教会の社会教説の考え方について、1) 本大学の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会の活動と、2) 岡山のカトリック教会での外国人支援という、グローバルとローカルな例を通して知る。どのような問題が存在し、それに対してどのような支援がなされているかに注目する。この学びを通じて、グローバル社会の問題にカトリック教会が果たしている役割を知るとともに、さまざまな課題に対して、私たち一人ひとりがどのように貢献できるかを考える。 (オムニバス方式／全15回) (31 小林修典／11回) カトリック教会の社会教説、ジュリー・ピリアートの宣教の精神、ナミュール・ノートルダム修道女会の活動について理解をふかめ、ディスカッション・セッションに参加して意見を述べる。 (12 津田 葵／1回) グローバル化社会におけるカトリックの社会活動について理解する。 (62 岡田紅理子／3回) 国内において外国籍者が直面する諸問題の事例を通じて、社会が「グローバル化」するなかで必要となる他者との協働のあり方を考える。	オムニバス方式 講義26時間 演習4時間
		キリスト教学VII 本授業のテーマは、「グローバル社会に生きる聖ジュリーの精神」である。本大学の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会の創立者、聖ジュリー・ピリアートの精神、すなわち、善き神の恵みに生き、人びとに奉仕する喜びに思いをいたし、グローバル社会の課題の解決に私たち一人ひとりがどのように参加できるかを考えていくことを目的とする。世界で活躍しているナミュール・ノートルダム修道女会のシスターたちによる、1) 聖ジュリーの精神と、2) グローバル社会の問題への奉仕と教育活動を通じての取り組みについての講義を、遠隔授業を通じて体験する。また、英語を生で聞くことで、国際的なコミュニケーション能力を高めるとともに、英語での講義に慣れる。	講義26時間 演習4時間
		キリスト教学VIII 福音書によると、イエスの活動は「罪人」との共食と病いの癒しの連続であったことがわかる。困難にある人々を救済の客体や憐れみの対象とするのではなく、解放の主体と捉え、共に生きることを示し続けたイエスの生き方は、今日の私たちになにを問にかけているのだろうか。本科目では、日本において「マイノリティ」を自認したり、そのように括られたりする人々の生（歴史と現状）を通じて、社会に存する抑圧や排除の問題への理解を深めていく。そして、多様な人々が同じ社会のなかで共に生きていくための方法を、イエスの活動を通じて探究する。	
		キリスト教学IX 本講義では「対話」をキーワードとして、キリスト教的な信仰と、それに基づく生き方を探究する。具体的には、福音書に描かれたイエスの生き方について、いくつかの重要な場面を取り上げて学びながら、キリスト教の根本的な教えである「隣人愛」の本質を理解することを旨とする。聖書とキリスト教についての知識を深めるとともに、日常的、臨床的な視点との往復を通じて、信仰や祈りの中に生きることのリアリティに触れ、自己の人生を「他者との対話」の内に歩いていくための道を、共に探りたい。	
		キリスト教学X キリスト教の成立と発展の中核にあるのは、イエスという人物を「神の子キリスト（救い主）」とする信仰である。本科目のねらいは、イエスという人物がなぜキリストなのか、というよりも、歴史上に実在したイエスがどのような人物であったのかについて、新約聖書諸文書や映像資料などを活用しながら探究することにある。具体的には、イエスが生きた社会、文化、政治的背景を踏まえつつ、時に皮肉やユーモアを交えたことばと行動によって宗教的政治権力や経済的抑圧に抗い、「弱い」立場にいる人々に寄り添い続けた、喜怒哀楽の感情をもったイエスの人間像に迫っていく。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
キリスト教科目	キリスト教学Ⅰ	アウグスティヌス(354-430)の生涯を通じた探究、特に後半生の司教としての働きを通じて見えてくるキリスト教の特徴的な観点とその後の西欧や日本のキリスト教思想に与えた影響をわかりやすく講義する。アウグスティヌスの思想を通じて、キリスト教の特徴的な観点を理解できるようになることを到達目標に、キリスト教との出会い、アウグスティヌス時代の教会の状況、『三位一体論』『神の国』『エンキリディオン』などを取り上げる。		
	キリスト教学Ⅱ	イエスの教えの中心は、愛である。「隣人を愛せよ」が第一の掟である。隣人とは、誰かという律法の専門家の質問に対して、イエスはよきサマリア人のたとえを話された。私にとつての隣人は誰かではなく、隣人になりなさいとの教えであった。そのことを、実際に隣人愛に生きたキリスト者の行動の軌跡をみるなかで理解する。すなわち、近代日本において先駆的になされた社会福祉実践を、人物を中心に考えていく。とくに岡山に関係した動きとカトリック福祉の動きを重視する。こうした先駆的実践を知ることによって、現代における社会福祉の源として、キリスト教の思想に基づく動きがあったことを認識する。		
	キリスト教学Ⅲ	日本の社会において、子どもたちの人間形成と教育に、キリスト教はどのようにかかわってきたのかを概観する。日本の児童文化の歩みのうちに、キリスト教精神やキリスト教的ヒューマニズムを探っていく。まず、幼児教育と児童福祉事業が、キリスト教を通じてどのように普及していったか、歴史的観点から理解する。次いで、キリスト教と児童文化との関連を、子どものための聖書物語、聖人伝、クリスマス劇、児童文学作品といった、多様なジャンルの教材の分析を通じて考察する。		
	キリスト教学Ⅳ	本授業のテーマは「日本の教育とキリスト教—自校史研究の試み」である。明治以来、時代の変遷とともに日本の教育にキリスト教がどのような役割を果たしてきたかを、具体的な資料の分析をもとに考察する。授業は次の2つのサブテーマから成る。1) 明治期から戦後の時代までの、キリスト教と日本の教育との関連についての歴史的概観。2) 具体的な例としての、ノートルダム清心女子大学の成立とその変遷(自校史)。本学の歴史に関する資料として、アーカイブ資料(例、大学および学生の発行したジャーナルなど)を分析し、教育理念、ナミュール・ノートルダム修道女会のシスターたちの役割、学生の教育体験(例、卒業論文テーマにみる学生の関心、留学など)、学生生活(行事、クラブ活動、就職など)について理解を深める。	講義26時間 演習4時間	
	キリスト教学Ⅴ	授業のテーマを「キリスト教と英語文化」とする。英語文化圏でのキリスト教の伝統文化に親しむことを目的とする。具体的には、イギリス・アイルランド、アメリカ合衆国、フィリピンを例に、それぞれの地域で、キリスト教がどのように文化の形成にかかわってきたかを考察する。各国におけるキリスト教史を概観したうえで、聖書の英語訳の成立やキリスト教信仰の文化的表象(聖歌・讃美歌、美術・文学にみるキリスト教など)を学んでいく。	講義26時間 演習4時間	
	キリスト教学Ⅵ	新約聖書の中の使徒言行録とパウロ書簡、およびそれと関連する遠藤周作『キリストの誕生』をテキストにして読み、イエスの死後、イエスを見捨てて逃げた弟子たちが、イエスをキリスト(救い主)と呼び、迫害にも怯まない信念をもった使徒となり、原始キリスト教が成立し、さらにキリスト教徒を迫害していたパウロが回心して異邦人伝道の使徒となることで、キリスト教がヘレニズム世界に広がるという歴史的展開を学ぶ。そして、弱かった弟子たちが何故に強い信念の使徒に変貌できたのかを考察する。また、パウロ書簡の言葉から、生きることの意義を追求することを学ぶ。		
全学共通科目	キリスト教科目	哲学Ⅰ	私たちが日々経験している「世界」とはそもそも何であり、「自己」とは何であるのか。本講義は、今日を生きる私たちの世界観・人間観にも深い影響を及ぼす古代西洋哲学の歴史を知るとともに、古代を生きた人びとが「世界」や「自己」を問い、考えてきたその仕方を、具体的なテキストの言葉を通して学ぶ。そしてそこから、私たち自身もまた、古代の哲学者たちに倣って、私たちが日々経験している「生」という謎を「哲学する」ことを目指す。	
		哲学Ⅱ	現代を生きる私たち人間にとって、哲学はどのような意味と役割を持ちうるのだろうか。本講義では「哲学」という思考のスタイルの特徴と、その方法を学びながら、19世紀後半から20世紀の哲学者たちの向き合った「世界」「自己」「身体」「欲望」「他者」「言葉」といった問題について考察する。具体的にはワイトゲンシュタインの言語哲学や、メルロ＝ポンティの身体論、さらには無意識をめぐる精神分析の思想などにも触れ、たんに哲学的な知識の集積に終わらない、現実と対話する真の哲学的思考の確立を目指したい。	
		倫理学Ⅰ	私たち人間は互いの人格を認め合い、また自己の人格を引き受けて生きる存在である。しかし「一人格である」ということは、つねにそれぞれの人生に与えられた「課題」であつて、それは交わりの中で形成され、成熟していくものだといえる。本講義では「人格論」の視点から倫理学の根本にある「生き方」の問題を考察し、かけがえない自己の人格性の形成について探求する。具体的には、人格の概念とその形成プロセスについて学んだうえで、キルケゴールやニーチェ、ドストエフスキーらの作品から、人生の苦悩と希望への眼差しを探る。	
		倫理学Ⅱ	本講義は、古代ギリシアから中世キリスト教に至るまでに生み出された、「徳」、「幸福」、「愛」などの倫理学の基礎的な諸概念を、それらの言葉の歴史とともに学び、いわば概念の身元をたどろうとする。そうすることで、私たち人間どうしが共に生きる日常において、欠くことのできない「倫理なるもの」への理解を深め、その今日における意義を考える。そして、そこで得られた知識を私たちの日々の生活の中に落とし込み、「倫理的に生きる」ことを学ぶ。	
		文学A	日本文学の発生から成熟に至る過程について、概ね通史的に、政治的観点、及び、文化的観点から具体的に検証する。古代(奈良～平安期)を中心に、一部、中世(鎌倉～室町期)時代にも目配りをしつつ、特に和歌と物語に焦点を絞り、文学現象の発展・深化と社会的背景との密接な関わりについて明らかにしたい。なお、作品理解の一助として、適宜、物語作品の解釈等について分担し、調査・発表を行うグループワークを課すものとする。	
教養科目	キリスト教科目	哲学Ⅰ	私たちが日々経験している「世界」とはそもそも何であり、「自己」とは何であるのか。本講義は、今日を生きる私たちの世界観・人間観にも深い影響を及ぼす古代西洋哲学の歴史を知るとともに、古代を生きた人びとが「世界」や「自己」を問い、考えてきたその仕方を、具体的なテキストの言葉を通して学ぶ。そしてそこから、私たち自身もまた、古代の哲学者たちに倣って、私たちが日々経験している「生」という謎を「哲学する」ことを目指す。	
		哲学Ⅱ	現代を生きる私たち人間にとって、哲学はどのような意味と役割を持ちうるのだろうか。本講義では「哲学」という思考のスタイルの特徴と、その方法を学びながら、19世紀後半から20世紀の哲学者たちの向き合った「世界」「自己」「身体」「欲望」「他者」「言葉」といった問題について考察する。具体的にはワイトゲンシュタインの言語哲学や、メルロ＝ポンティの身体論、さらには無意識をめぐる精神分析の思想などにも触れ、たんに哲学的な知識の集積に終わらない、現実と対話する真の哲学的思考の確立を目指したい。	
		倫理学Ⅰ	私たち人間は互いの人格を認め合い、また自己の人格を引き受けて生きる存在である。しかし「一人格である」ということは、つねにそれぞれの人生に与えられた「課題」であつて、それは交わりの中で形成され、成熟していくものだといえる。本講義では「人格論」の視点から倫理学の根本にある「生き方」の問題を考察し、かけがえない自己の人格性の形成について探求する。具体的には、人格の概念とその形成プロセスについて学んだうえで、キルケゴールやニーチェ、ドストエフスキーらの作品から、人生の苦悩と希望への眼差しを探る。	
		倫理学Ⅱ	本講義は、古代ギリシアから中世キリスト教に至るまでに生み出された、「徳」、「幸福」、「愛」などの倫理学の基礎的な諸概念を、それらの言葉の歴史とともに学び、いわば概念の身元をたどろうとする。そうすることで、私たち人間どうしが共に生きる日常において、欠くことのできない「倫理なるもの」への理解を深め、その今日における意義を考える。そして、そこで得られた知識を私たちの日々の生活の中に落とし込み、「倫理的に生きる」ことを学ぶ。	
		文学A	日本文学の発生から成熟に至る過程について、概ね通史的に、政治的観点、及び、文化的観点から具体的に検証する。古代(奈良～平安期)を中心に、一部、中世(鎌倉～室町期)時代にも目配りをしつつ、特に和歌と物語に焦点を絞り、文学現象の発展・深化と社会的背景との密接な関わりについて明らかにしたい。なお、作品理解の一助として、適宜、物語作品の解釈等について分担し、調査・発表を行うグループワークを課すものとする。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学 共通 科目	教養 科目	文学B	現代社会において「小説」は大変メジャーかつ重要な文学ジャンルのひとつであるが、「小説」という言葉自体をよく観ると、とても不思議なイメージを持つはずである。何故「小説」には長編小説も存在するのに「小」と称するのか、また「小説」書かれたものであるのに何故「説＝語る」という動詞でジャンル名が成立しているのであろうか。実は「小説」という言葉は元来中国語であり、その意味はまさに「文字通り」であった。この授業では、その元来の意味および中国における「小説」について、成立過程と変遷、そして特徴を文体、主要モチーフ、近代化などに焦点を当てつつ説明してゆく。	
		文学C	読みあいという「物語の力」を活かしたコミュニケーションの方法を学び、国内外の児童文学作品の読み解きを行う。さらにそこで起きてくる一回ずつの内なる物語の立ち上がっていく様子をテキストを参考にしながら受け止めていく。また、自分自身でも「読みあい」を意識した物語の作成を意識して取り組んでいく。テキストからの発展として、学校現場での文学教材の取り扱い方や、翻訳作品が抱える文化の壁を越えた理解のためのいくつかの課題についても学びを深めていく。メルヘンや昔話が持つ力についても言及する。	
		文学D	(概要) 遠藤周作の『沈黙』と、イギリスのC.S.ルイスの『ナルニア国物語』を取り上げる。キリスト教思想を根底にした日英の名作を読解し、そのテーマを自分の問題意識とも結び付けて主体的に考える授業である。 (オムニバス方式／全15回) (43 山根道公／8回) 前半8回では、『沈黙』を取り上げ、その背後にある作者遠藤周作の挫折の人生と信仰体験を解説し、さらに日本キリシタン史や聖書的象徴等にも触れながら、主人公が挫折と屈辱の末に人間の苦しみの同伴者となるイエスと出会い、人生に何一つ無駄なものはないことに気づいてゆく魂のドラマを読み解く。 (88 高田ひかり／7回) 後半7回では、「ナルニア国物語」シリーズの第1作目『ライオンと魔女』を取り扱い、人間の原罪、倫理の重要性、この世に生きることに伴う苦しみや痛みを認めつつも、キリストに従って生きることの喜びと希望をルイスがいかに表現しているかを考える。	オムニバス方式
		芸術A	授業では、西洋音楽が中世以来のグレゴリオ聖歌を媒体に数百年かけて典礼・音楽両面から次第に形を変え発展していき、宗教改革以降、その媒体をコラール（プロテスタント賛美歌）に変えてなお進化し続けた様子を考察する。時限ごとの始めに、前半はグレゴリオ聖歌を1曲、後半はコラールを1曲歌い、中世のオルガスムやルネサンスのミサ曲、バロックの聖務日課や受難曲などをオリジナル楽器で鑑賞しながら、祈りのひとつとして民衆に受け入れられていった宗教音楽を味わっていく。	
		芸術B	伝統的なヨーロッパの美術においては主題の過半がキリスト教のものであるが、それらを理解するためには、キリスト教に関する知識に加え、キリスト教主題がどのように表現されるか、その様相と歴史を知る必要がある。そして、それはヨーロッパ以外すなわちアジア・アフリカ・アメリカ大陸のキリスト教美術を理解する上でも必須のものである。本講義では、その基礎を学ぶ。ここで学ぶことは、美術にとどまらず、文学、音楽、演劇、ひいてはキリスト教そのものの理解にも役立つであろう。ただし、様々な制約があるため、イエス・キリストに関する主題のみを扱うこととしたい。また、日本におけるキリスト教受容の側面として、いわゆるキリシタン美術および近代日本のキリスト教美術についても触れることとする。	
		芸術C	(概要) 日本美術史の入門講座。絵画を中心に、画題・テーマ別にさまざまな作品を取りあげ、日本の美術工芸品の表現について理解を深めることを目的とする。前半は谷川が担当し前近代の作例を、後半は森下が担当し、近代の作例を取り上げる。各講義のテーマに照らして各時代の重要作品を提示し、制作年代や作者、媒体（画面形式など）による表現の差異や多様性を講じる。あわせて展覧会の見学会を行って、主体的に美術工芸品を理解する力を身につけることを目指す。 (オムニバス方式／全15回) (80 谷川ゆき／8回) 『源氏物語』や『平家物語』など物語を描いた絵画を取りあげ、その内容や表現方法について講義する。 (81 森下麻衣子／7回) 近代、京都・大阪を中心に活躍した画家の作品を取り上げ、時代の流れを受けて変化する表現を見ていく。	オムニバス方式
		歴史学A	本授業では、特に青年や少女に注目して、近現代の日本社会を考える。その際、同時代の映像や、「風立ちぬ」「火垂るの墓」（宮崎駿監督）といった映画作品を使って、下記の授業予定一覧に掲げたテーマを論じていく。具体的には、映画作品の時代描写も手がかりに、映像や史料をもとに近代以降のつとが抱えた矛盾や葛藤に焦点を当て、そこから見える近現代日本社会の特徴を考察する。 授業では、映画や文学などで扱われる「歴史」はあくまでフィクションであることに留意しつつ、歴史学が私たちにどのような知的体力を与えてくれるかという点を意識して進めたいと思う。	
		歴史学B	近代に至るまでの東アジア世界の国際秩序のあり方を、おもに中国王朝・皇帝の視点から、漢文史料を中心に用いて講義する。 中国の皇帝の本質は「天子」であり、理念上では「天」から、「天下」のすべてを統治する権限を与えられた存在である。こうした理念は当然、現実の東アジア世界の実際とは乖離する。そうした中で歴代の中国王朝は、「華夷」思想という概念を用いながら、自らを中心とする東アジア世界の国際秩序を、さまざまな方策により構築・維持してきた。そしてそのような過程で理論化された「華夷」の概念は、周辺の朝鮮半島や日本列島等にも拡大され、それは近代以降の東アジア世界にも大きな影響を及ぼすことになるのである。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学 共通科目	教養科目	歴史学C	前半は大学の歴史学への導入として、古代都市の遺跡を材料に、古代ローマ人の社会と生活について紹介するとともに、16世紀以降の西欧を中心とした世界のグローバル化を説明する理論である「世界システム論」を紹介する。後者は最近の高校世界史の教科書にもある程度取り入れられている歴史の新しい見方である。後半は、社会史の具体例として、「性愛」と「富と貧困」のテーマを取り上げる。社会史とは、過去の社会の成り立ちやその時代の人たちの行動様式や思考・感情・想像世界をあつかう歴史の一分野である。	
		日本国憲法 I	テーマ「平和と人権」。近代憲法と呼ばれるためには、何よりも人権の保障がなければならない。また、日本国憲法が世界に誇れるのは平和主義である。日本国憲法を学ぶ意義は、自由で公正な社会を築くためには人はみなかけがえのない大切な存在だという人間社会の根本にあるものを学ぶことであり、民主主義の理念が統治機構にどのように反映されているか知ることである。日本国内の憲法改正論、世界を取り巻く環境の変化に対して真の情報を得て考えることが必要となってくる近年、「平和」の構築をはじめとする社会問題を考える基盤となるような最低限度の知識を身につけることを目的とする。	
		日本国憲法 II	身近な憲法問題からそれに関する憲法の基本原理及び基礎知識を学ぶ。さらに、その基本原理等に関する現代的な社会問題についてグループで取り組み、各回のテーマごとに全体で討議する。グループワーク・全体討議及び自ら調査した情報を基に学生各自がレポートを作成する。これ等の活動により、身近な問題を憲法やルールを使って問題の全体像の把握、多面的な分析及び体系的論理的な思考による自らの意見の形成の仕方を修得する。また、異なる価値観に基づく意見を尊重する態度及び価値観の多様化した社会における議論の仕方を修得する。	
		法学 I	法学 I では、日本国憲法、行政法、民法の財産法を学ぶ。なかでも日常生活と深いかわりのある民法の財産法を中心に学ぶ。憲法については、日本国憲法の基本原理や日本の統治機構、基本的人権の保障の在り方を理解する。行政法については、行政法とはなにか、法律による行政とは何か、行政救済法の概略について理解する。民法については、民法第1編総則、第2編物権、第3編債権について、その内容を理解し、財産法上の重要な論点を考察する。さらに、具体的事例を検討することにより、社会生活における民法（財産法）の作用や役割について学び、今後の社会生活に資することを目的とする。	
		法学 II	民法の家族法、刑法を学ぶ。民法のうち、第4編親族、第5編相続について、その内容を解説し、家族法上の重要な論点を個別的に考察する。さらに、具体的事例を検討することにより、社会生活における民法（家族法）の作用や役割について理解し、今後の夫婦、親子、家族、親族の在り方を考察する。刑法については、刑法の基本原理やしくみを理解した上で、具体的に、どのような行為が罪として定められ、どのような刑罰をかされるのかについて学ぶ。	
		社会学	本講義では、私たちの身近で起きている具体的な現象や社会問題を事例として取り上げ、それらを社会学の知見と結びつけて考えることにより、社会学の基礎的な理論や知識を修得することをめざす。社会的なもの見方、考え方を学ぶことで、今まで自分では気づいていなかったこと、「あたりまえ」と思っていたことが、別の見え方をしてくるといふ社会学のおもしろさ・難しさを、少しでも感じ取ってもらいたい。	
		心理学 I (心理学概論)	人の心理学的理解、日常生活と心の健康、人の成長・発達と心理、心理的支援の方法と実際などの学習を通して、心理学の概要を理解する。具体的には、心理学の基礎として、心理学の歴史、欲求・動機づけと行動、感情・情動、ストレス・適応、感覚・知覚・認知、学習・記憶・思考、心と脳、知能、創造性、人格・性格、集団を取り上げる。発達心理学の観点からは、乳幼児期、幼児期、児童期、思春期・青年期、成人期、高齢期を取り上げる。また、臨床心理学の観点からは、心理検査の概要、心理療法（カウンセリング）・コンサルテーション・ソーシャルワーク、来談者中心療法・精神分析・行動療法・ピアカウンセリング、およびそれらの実践例を取り上げる。	
		心理学 II (臨床心理学概論)	この授業では、臨床心理学の基礎を概説する。カウンセリング、教育、保育などの場で、人と人が出会い、ともに成長していくための心理学である。臨床心理学の基礎を幅広く扱うが、中でも大事にしたいことは、「相互性の観点」と「物語」である。カウンセラー自身も、相手と出会って成長していること。教えた内容そのものよりも、自由に語り合った夢の方に意味があること。子どもたちと出会った実例など、映像なども使用しながら、心について考えていく。	
		心理学 III (健康・医療心理学)	身体の病気や不調の背景には心理的、社会的な要因が相互に関係している。授業では、健康の維持増進、病気の予防のための心理学の基礎および実践の知識を理解する。健康に関する心の仕組みや働き、ストレスやパーソナリティと健康との関係について学ぶ。また、心理テスト等を実施し、自ら体験しながら、自己を知り、自らの健康をよりよくコントロールできるようにする。生活や行動を振り返り、知識を得ることは自分自身のよりよく生きるための健康づくりにもつながる。さらに、心の健康教育としてストレスマネジメントについて理論やスキルを習得する。	
		情報学 I	本講義では、日常生活においても必要とされる情報技術の基本と、課題解決のための効果的な情報収集、情報の整理、分析方法を学ぶ。社会においては情報通信技術の発達と普及により大量のデータが利用可能となっているが、これらを効率よく処理し、新たな知見を得ることができるように、各種の手法を学習し、それらを実際に使用していくことで、実践可能な知識と技術を身につける。インターネット上では、多くのオープンデータが提供されていることから、これらを積極的に利用する。また、その成果をレポート・論文やプレゼンテーションによって表現するための方法を学ぶ。	
		情報学 II	本講義では、課題解決のための効果的な情報収集、情報の整理、分析方法をより効率的に処理していくための手法を学ぶ。現代社会では大量のデータが利用可能となっているが、こうしたデータの処理を行うためにはコンピュータにプログラミングする知識と技術が不可欠となる。こうしたプログラミング技術の基礎を学習し、それらを実際に使用していくことで、実践可能な知識と技術を身につける。インターネット上では多くのオープンデータが提供されていることから、これらをプログラミングによって利用する方法も学ぶ。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学 共通科目	教養科目	化学Ⅰ	私たちの身の回りに存在するものは全て化学物質で構成されており、その性質の多くは化学を理解することで説明できる。例えばなぜその服の色は赤に見えるのか、なぜその医薬品は頭痛に効くのか、などである。本講義では、まず化学の基礎を理解した上で、身の回りの様々な現象を化学の知識で説明できるようになることを目的とする。講義では、学生-講師間の対話を様々なツールを用いて行い、学生が受け身にならず積極的に情報発信を行うことを促す。	
		化学Ⅱ	化学の分野である「生化学」は、生命現象のしくみを理解する学問である。したがって「人は、食べ物からどうやってエネルギーを得ているのか？」など、理系の人のみならず、文系の人にとっても、健康な毎日を過ごすためにとっても大切なことである。暮らしに身近な糖質、脂肪酸やアミノ酸、タンパク質、ビタミンと補酵素、ヌクレオチド・核酸(DNA、RNA)の構造やはたらきを学び、上手に栄養を摂取して健康に生きるための基礎知識を学習する。この授業は「生化学」の入門講義として行う。	
		生物学Ⅰ	本授業は、ヒトを中心に身体の仕組みと成り立ちについて理解したうえで身近な病気について自分自身で判別できるように学ぶことで生命系全体を深く理解し、健康的な生活を継続的に実行するための知識を修得することを目的としている。ヒトを含む生物の活動を総合的に理解するために人体を構成する各要素に分解して個々の機能について講義し、さらに、その機能がそのような仕組みで発現しているかを解説する。各器官・組織の機能とその連携による生命現象のメカニズムの習得により、個体レベルの人体における恒常性の維持機構を理解して説明できるように到達することが目標である。	
		生物学Ⅱ	(概要) 生物学は、自然科学における最重要な学問領域となりつつある。それは、生命科学や生物多様性など我々を取り巻く諸問題が、「生命」の本質に直結しているからである。したがって、生物学の基礎的な知識を修得しておくことは、現代社会で生きていく上で必須である。そこで本講義では、「ヒト」の生物学、そしてヒトの生命を支える「食品」の生物学、そしてヒトをはじめとする生物全般が生きている「生態系」に焦点を当て、それらの基本的知識をび、「生命とは何か」について科学的に説明できることを目的とする。 (オムニバス方式/全15回) (30 小林謙一/7回) 本講義では、「内と外」という考え方を軸に、生物学に対する理解を深めていく。具体的には、細胞内の構造、遺伝子や生殖と発生に関することから、体内の諸器官とそのはたらきについて概説する。 (60 吉金 優/4回) 食品の多くは生物であり、ヒトの生命を支える「食」とは生物そのものを有難くいただくことである。なぜ、ヒトはなぜ食事をする必要があるのか？なぜ、生物には食べる・食べられる関係が成立するのかなど、「食品」を生物学的視点から解説する。 (37 長濱統彦/4回) 身近な自然環境における生物多様性を理解するうえで、菌類の存在を無視することはできない。特に森林環境における代表的な菌類グループの一つである「きのこ」にフォーカスし、その多様性や生態的な役割から「生態系とはなにか」を考えていく。	オムニバス方式
		科学史	科学史では一、科学と宗教のかかわり、二、科学と現代社会のかかわり、ならびに三、科学の方法論的特質(実証主義)について学ぶ。一として、近代の科学革命を促した宗教の影響・進化論とキリスト教世界観の問題をとりあげ、現実の科学史は科学と宗教の対立史観で捉えられないことを解説する。二として、科学者として現代に生きることで・核物理と科学の倫理を扱い、学生諸君とともに現代科学のあるべき姿を考える。三として、実験・観測の方法論的問題に関連して、ケプラー・ガリレオ・ニュートンによる数的処理の実例等を紹介しつつ、現代科学のトピックも取り上げながら科学的精神の独自性を浮き彫りにする。	
		医学Ⅰ(人体の構造と機能及び疾病)	高齢者の増加が社会問題となって久しい。少子化も相まって総人口に占める高齢者の割合はますます上昇している。その年齢では心身の健康を保つことが難しくなり、いくつかの病気を併せ持つことが多くなる。そうした中で社会福祉士を目指す学生は、医療職との連携を深め、多職種協働を目指すために医学に関する基本的知識を身に付けることが必要である。この授業では、そうした知識が身に付くような授業を行う。また一般の学生にとっても、基本的な人体の構造や機能、病気の仕組み、その診断や治療法、障害を持った人の福祉、および、リハビリテーション等について、基本的な知識を身に付けることができる。	
	医学Ⅱ	大学生に身近なテーマを取り上げ、生命や医療にまつわる倫理的課題について、自らの頭で論理的に考える能力が身につくような講義とする。また、超高齢社会を迎えたわが国において、日常生活を営む上で何らかの援助を必要とする人たちは増加してきている。家族の介護力が低下した現在、医療的ニーズに応えながら生活面のケアを提供する「医療福祉」分野への期待は高まっているが、一方で、医療福祉の現場で起きる複雑でデリケートな問題の数々、特に倫理的ディレンマの解決に単一の回答を見いだすことは困難である。そこで、医療職と福祉職の職能的背景の違いも踏まえつつ、チーム・アプローチの中で、その解決試案を探るべく力を養えるような授業を行う。		
	外国語科目	英語ⅠA	本授業は、様々なトピックや状況において、英語のコミュニケーション能力を養うことを目的とする。文法、語彙、コミュニケーション戦略に焦点をあてながら、各自のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングスキルを向上させることを目指す。個人学習やペア学習、小グループでの活動に取り組み、定期的に課題を提出する。また、英語のGraded Readers等の多読活動も取り入れ、語彙数や冊数などのガイドラインを設定して、目標達成を目指す。	
		英語ⅠB	4技能を総合的に育成するための活動を通して、CEFR A2-B1【NDSUCan-doリストA2.2.2-B1.1.2】レベルを到達目標とする。TOEICの出題形式に慣れ、各自が設定する目標スコアを達成するための問題演習を必要に応じて解説を加えながら行う。また、コミュニケーションの基礎をなす文法事項を理解するとともに、さまざまなテキストタイプの英文を扱いながら言語活動を通して思考力を育成する。なお、TOEICや英検等は英語力を測定するための外部指標として位置づけ、TOEICスコア(500~550)・英検(2級)を目安とする。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学 共通科目	外国語科目	英語ⅡA	本授業は、前期に引き続き、様々なトピックや状況において、英語のコミュニケーション能力を養うことを目的とする。文法、語彙、コミュニケーション戦略に焦点をあてながら、各自のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングスキルを向上させることを目指す。個人学習やペア学習、小グループでの活動に取り組み、定期的に課題を提出する。また、英語のGraded Readers等の多読活動も取り入れ、語彙数や冊数などのガイドラインを設定して、目標達成を目指す。	
		英語ⅡB	4技能を総合的に育成するための活動を通して、CEFR A2-B1【NDSUCan-doリストA2.2.2-B1.1.2】レベルを到達目標とする。TOEICの出題形式に慣れ、各自が設定する目標スコアを達成するための問題演習を必要に応じて解説を加えながら行う。また、コミュニケーションの基礎をなす文法事項を理解するとともに、さまざまなテキストタイプの英文を扱いながら言語活動を通して思考力を育成する。なお、TOEICや英検等は英語力を測定するための外部指標として位置づけ、TOEICスコア(500~550)・英検(2級)を目安とする。	
		英語ⅢA	本授業は、各自が専攻するコースや将来のキャリアや職場環境に関連したトピックや状況において、英語のコミュニケーション能力を向上させることを目的とする。文法、語彙、コミュニケーション戦略に焦点をあてながら、各自のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングスキルを上達させることを目指す。個人学習やペア学習、小グループでの活動に取り組み、定期的に課題を提出する。また、英語のGraded Readers等の多読活動も取り入れ、語彙数や冊数などのガイドラインを設定して、目標達成を目指す。	
		英語ⅢB	4技能を総合的に育成するための活動を通して、CEFR B1・【NDSUCan-doリストB1.2.2-B2.1.2】レベルを到達目標とする。TOEICの出題形式に慣れ、各自が設定する目標スコアを達成するための問題演習を必要に応じて解説を加えながら行う。また、コミュニケーションの基礎をなす文法事項を理解するとともに、さまざまなテキストタイプの英文を扱いながら言語活動を通して思考力を育成する。なお、TOEICや英検等は英語力を測定するための外部指標として位置づけ、TOEICスコア(600)・英検(2級~準1級)を目安とする。	
		英語ⅣA	このコースは、学生の専門や将来のキャリア、職場環境に関連したトピックや状況において、学生の英語コミュニケーション能力を向上させることを目的としている。これは、文法や語彙、コミュニケーション戦略に焦点を当て、学生のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングスキルを開発することによって、達成される。学生は、クラス内外で個人、ペア、小グループでの活動に取り組み、定期的な課題をこなしていく。授業での学習をさらに補強するため、多読にも取り組む。	
		英語ⅣB	4技能を総合的に育成するための活動を通して、【NDSUCan-doリストB1.2.2-B2.1.2】レベルを到達目標とする。TOEICの出題形式に慣れ、各自が設定する目標スコアを達成するための問題演習を必要に応じて解説を加えながら行う。また、コミュニケーションの基礎をなす文法事項を理解するとともに、さまざまなテキストタイプの英文を扱いながら言語活動を通して思考力を育成する。なお、TOEICや英検等は英語力を測定するための外部指標として位置づけ、TOEICスコア(600)・英検(2級~準1級)を目安とする。	
		特別演習英語A	本授業は、TOEFLテスト(iBT/ITP)の出題形式に即した問題演習を通して出題形式に慣れるとともに、4技能を統合した言語活動を通して、総合的な英語運用能力の伸長を目指すことを目的とする。授業では、Reading, Listeningの問題演習だけでなく、Independent Speaking, Independent Writingの基礎的な技法を修得することを目的とする。CEFR B2【NDSUCan-do B2.2.2】(英検準1級)レベルを到達目標とする。	
		特別演習英語B	本授業は、TOEIC L&Rテストの出題形式に即した問題演習を通して出題形式に慣れるとともに、4技能を統合した言語活動を通して、TOEICで求められる英語力だけでなく、総合的な英語運用能力の伸長を目指すことを目的とする。特に「聞くこと」と「書くこと」を統合した言語活動ディクトグロス(dictogloss)を継続的に実施し、リスニング力の向上だけでなく、ライティング力の向上も目指す。CEFR B2【NDSUCan-do リストB2.2.2】(TOEIC L&Rスコア:700・英検準1級)レベルを到達目標とする。	
		特別演習英語C	本演習では最初に音読という活動の持つ科学的な側面を解説して、音読に関する理論面の理解を深める。音読は誰でも英語学習の初期段階から行っているため、ほぼ無意識に行っている場合が多い。音読という活動が、英語の規則を学習者の頭の中に内在化させて、いつでも英語が口について出てくるようになるためのトレーニングであることを理解させる。その後、様々な音読トレーニングを通して、意味のまとまり(チャンク)を捉えて英文を理解しながら音読する実践的運用能力を育成する。	
		特別演習英語D	このコースは、「Basic English Writing A」と位置づける授業で、今まで英語のライティングを学んでこなかった学生のために、文とパラグラフの構成に焦点をあてながら、英語のライティングの基礎を学ぶことを目的とする。様々なスタイルの短いライティングの課題をこなしていくことにより、洗練された語彙や文法構造を駆使して、結合力のあるパラグラフを書くことを目指す。このコースは、特に試験準備のためのものではないが、英検のライティングセクションやTOEFL、IELTSのようなライティングの要素を含む試験にも関連するものである。留学を考えていたり、将来英語を使う仕事に就きたいと考えたりしている学生には特に有益である。	
特別演習英語E	このコースは、特別英語演習Dに引き続き、「Basic English Writing B」と位置づける授業で、英作文の基本を学ぶことを目的とする。エッセイレベルのライティングとパラグラフの作成に重点をおき、語彙と文法構成に磨きをかける。このコースは、特に試験準備のためのものではないが、英検のライティングセクションやTOEFL、IELTSのようなライティングの要素を含む試験にも関連するものである。留学を考えていたり、将来英語を使う仕事に就きたいと考えたりしている学生には特に有益である。			
特別演習英語F	このコースは、異文化コミュニケーション入門と位置づける授業で、文化やそれがコミュニケーションに与える影響についての基本的なことを紹介する。同時に、アカデミックなトピックに関する英語のスピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの練習も行う。また、留学や海外で生活をする際に、海外での授業や生活がどのようなものであるかという情報も提供する。学生は、個人、ペア、小グループでアクティビティに取り組み、定期的に課題を提出する。			

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学 共通科目	外国語科目	特別演習英語G	本授業は、TOEIC&Rテストの出題形式に即した問題演習を通して出題形式に慣れるとともに、4技能を統合した言語活動を通して、TOEICで求められる英語力だけでなく、総合的な英語運用能力の伸長を目指すことを目的とする。特に「聞くこと」と「書くこと」を統合した言語活動ディクトグロス(dictogloss)を継続的に実施し、リスニング力の向上だけでなく、ライティング力の向上も目指す。CEFRB2【NDSUCan-doリストB2.2.2】(TOEIC&Rスコア:700・英検準1級)レベルを到達目標とする。	
		海外英語演習A	本演習では、本学での事前学習を経てビクトリア大学が主催する英語研修に参加する。英語の授業やその他の社会・文化的活動を通して英語力の向上・習得を図り、日本の文化を伝える力を養うとともに、カナダの文化・習慣や伝統についても理解を深める。ホームステイをし、現地での直接体験を通じてその国の生きた言葉を学んでいく。事前学習はワークショップ形式で行い、ホームステイや現地の授業・活動における心得や日本とカナダの文化・習慣・伝統について学ぶ。また、旅の準備と危機管理についての研修も行う。詳細は初回の事前学習で説明する。新型コロナウイルス感染症対策等により、オンライン研修に切り換える場合もある。	
		海外英語演習B	本演習は、協定校が夏季休暇中に実施する夏季研修である。近年は受け入れ先の大学との日程調整が難しい、との理由等で行われていないが、状況が整えば実施する予定である。本学での事前学習を経て受け入れ先の大学が主催する英語研修に参加する。英語の授業やその他の社会・文化的活動を通して英語力の向上・習得を図り、日本の文化を伝える力を養うとともに、外国の文化・習慣や伝統についても理解を深める。現地での直接体験を通じてその国の生きた言葉を学んでいく。事前学習はワークショップ形式で行い、現地の授業・活動における心得や日本と受け入れ先の大学の文化・習慣・伝統について学ぶ。また、旅の準備と危機管理についての研修も行う。詳細は初回の事前学習で説明する。	
		ドイツ語ⅠA	ドイツ語のアルファベットの発音と単語の発音の仕方を身につける。初級文法として現在時制における規則・不規則に変化する動詞について学ぶ。また、そうして変化した動詞を文中の「どの位置」に配置するのかを学び、ドイツ語の文の基礎的な作り方を習得する。その上で、そこに助動詞や接続詞が加わることによって生じるドイツ語に特徴的な文の構造を知ることとする。名詞の性と格、そしてそれを表すために必要な冠詞の変化、また人称代名詞の格変化を学ぶ。加えて、その変化の要因となる動詞や前置詞の「格支配」を知ること、平易な文章の読み解き方を習得する。以上とともに、簡単なドイツ語の会話表現やドイツ語圏の文化についても知ることを目的とする。	
		ドイツ語ⅠB	はじめは挨拶、自己紹介から行う。みなさんにとって未知の外国語、ドイツ語の世界を少しずつ、確実に、そして楽しく学んでゆく授業である。「読む・話す・聞く・書く」の4つの「ドイツ語力」をバランス良く身につけていく。アルファベット、つづりと発音の原則を学んだ後、ドイツ語文法の項目を一つ一つ身につける。また、学んだ学習事項が用いられた日常会話に触れたり、練習問題で実際に手を動かしたりして学習したことを確かめていく。	
		ドイツ語ⅡA	既に学習している冠詞の変化を土台とし、ドイツ語の名詞の性・数・格の変化に関する仕組みについて、さらに詳しく学習する。加えて、関係代名詞によって生み出されるドイツ語らしい重層的な文構造についての知識を知り、それをもとにした文章の読み解き方を習得する。過去時制における動詞の変化の仕方について学び、日常について完了形を用いた簡単な文を作ることができるようにすることを目的とする。さらに、能動や受動といった「態」、要求や間接、非現実を表す「法」についても学ぶ。引き続き基本的な会話表現の習得、及びドイツ語圏の文化について知ることも目指す。	
		ドイツ語ⅡB	第1期の内容も復習しながら徐々に表現力を身につける。「ドイツ語基礎固め」の授業である。「読む・話す・聞く・書く」の4つの「ドイツ語力」を学んでいく。引き続き、ドイツ語文法の項目を一つ一つ身につけていく。学んだ学習事項が用いられた日常会話に触れたり、練習問題で実際に手を動かしたりして学習したことを確かめていく。ドイツの社会や文化に関する情報も、折に触れて提供していく。発声練習に積極的に参加することが望まれる。	
		ドイツ語ⅢA	中級教科書に掲載されているテキストを、初級文法(3基本形、完了形、形容詞、受動態、接続詞、関係代名詞、分離動詞・非分離動詞)を復習しながら精読することが基本となる。その上で、中級程度の比較的長い文章を読み解くには、文章の「どこ」に注目すれば良いのかを学ぶ。さらに、それを手がかりとし、重層的に構築されているドイツ語の文を「解きほぐす」ことができるようになることを目的とする。また、より正確な単語の発音を確認し、それを実際に口にすることができるようになる一方で、正確に聴き取る力も身につけていくことを目標とする。	
		ドイツ語ⅢB	ドイツ語ⅠB、ドイツ語ⅡBではドイツ語初級の学習項目について一通り学んだ。それを踏まえて、この授業では、平易なドイツ語で書かれたさまざまなテキストを読んでいく。ドイツ語初級の学習項目は、ドイツ語文法の品詞ごとに並んでいたが、ドイツ文を読むうえで、それらをどのように活用していけばよいか、について重点を置いて購読を進める。また、初級ドイツ語では教わらなかったが、ドイツ文を読みこなすために必要な学習項目も、折に触れて紹介する。	
		フランス語ⅠA	このコースは、フランス語の全くの初心者を対象としている。フランス語の書き言葉と話し言葉に慣れ、簡単なやり取りで自分自身や大切な人について話せるようになることを目的としている。このため、授業では発音、イントネーション、話し言葉の聞き取りを体系的に学ぶ。また、フランス語の基本的な構文を身につけるために、スペルや文法的な特徴も扱う。本学は、自分がどこに住んでいるか、アルバイトをしているかどうか、科目や家族についてなど、様々なテーマを扱う予定である。また、フランスにおけるコミュニケーションの文化や会話のスタイルについても情報を提供していく。	
		フランス語ⅠB	フランス語文法、読解、文化、コミュニケーションの4つの要素を組み合わせた初級フランス語文法読本の教科書を使用して、これらを有機的に学習する授業である。フランス語の発音、基本的な文法知識の習得、簡単な文章の聞き取りや読解、練習問題への取り組み、日常会話の練習等により、フランス語の基本的な運用能力を身につけることを目指す。あわせてフランスの歴史や建築、音楽や美術等、文化の香りに触れ、異文化理解に努めてもらう。	

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
全学共通科目	外国語科目	フランス語Ⅱ A	このコースは、すでにフランス語のⅠを受講した初心者を対象としている。口頭表現のワークでは、フランス語で自分についての基本的な情報を提供するだけでなく、対談相手に質問をして、つまり、たとえ簡潔で単純なものであっても、やりとりに参加するのに必要なスキルを身につけることを目的としている。そして、書き言葉の作業は、口頭表現に対応するものである。このように、学生は新しい動詞の活用とレッスンのテーマに沿ったカテゴリーの語彙を体系的に学習する。本学は、クラブ活動、習慣、経験や過去のことについてなど、様々なテーマを扱う。授業で使用するダイアログには、フランス語のコミュニケーション文化に関する情報を学ぶことが出来る予定である。	
		フランス語Ⅱ B	フランス語文法、読解、文化、コミュニケーションの4つの要素を組み合わせた初級フランス語文法読本の教科書を使用して、これらを有機的に学習する。また、日常生活やフランス文化に関する資料を選び、聞き取り、文法の練習などの様々な練習問題にも取り組む。そして、フランス語の発音、基本的文法知識の習得、簡単な文章の聞き取りや読解、日常会話の練習等により、フランス語の基本的運用能力を身につけることを目指す。あわせてフランスの歴史や建築、音楽や美術等、文化の香りに触れ、フランス語ⅠBよりさらに異文化理解に努めてもらう。	
		フランス語Ⅲ A	現代フランス社会、あるいはフランスの歴史や地理、文化について書かれた少し長めのフランス語テキストを正確に読解することをつうじて、日本とは異なる歴史的・文化的背景をもつフランス社会を知り、異文化理解を深めるいっぽう、1年次に学んだフランス語の文法やその構造についての基礎的な知識を中級的なレベルへと向上させ、あわせてテキストの音読、訳読、聞き取り、練習問題への取り組みなどによって、フランス語の総合的な能力のブラッシュアップを目指す。	
		フランス語Ⅲ B	本授業は、フランス語の初級文法を一年間学習した学生を対象として、文法知識のさらなる定着をはかるとともに、フランス人の若者が日常生活・関心事・将来の夢などについて語ったインタビュー内容を通して、フランス語の読解力・語彙力・聴覚力・会話力の向上を目的とする。授業では、毎回、教科書1課を終えるペースで進めていき、「聞く・話す・読む・書く」というフランス語運用能力を総合的に身につけていく。授業時間外でもmanaba folio で課題を提示し自主学習を行う。	
		中国語Ⅰ A	中国語の発音の基礎と基本的な文法をしっかりと学ぶ。特に「使える中国語」を目指したいので、ピンインの読み方と中国語独特の四声の習得を心がける。本文の朗読、新出単語の予習と復習、会話練習、リスニングなどを通してバランスよく中国語を学ぶ。教科書の表現を使って、中国語でお互いに簡単なコミュニケーションが図れるようになることを目標とする。また、中国語を学習すると同時に中国人の生活習慣・思考様式など中国人の生活と文化についても学ぶ。	
		中国語Ⅰ B	本授業では、中国語発音の基礎と基本的な文法を学ぶ。中国語のピンインや簡体字の仕組みを理解し、読み・書き・聞き取り・及び発音を正しく行うこと、中国語の基本的な文章の構造について理解できること、挨拶や簡単なコミュニケーションが理解できることを目指す。また、中国語を学習すると同時に中国人の生活習慣・思考様式なども学ぶ。なお、授業では発音練習・会話練習・作文練習などを行い、毎授業ごとに復習小テスト・課題等を課す。	
		中国語Ⅱ A	本授業では、前期に引き続き、中国語の発音の基礎と基本的な文法をしっかりと学ぶ。特に「使える中国語」を目指したいので、ピンインの読み方と中国語独特の四声の習得を心がける。本文の朗読、新出単語の予習と復習、会話練習、リスニングなどを通してバランスよく中国語を学ぶ。教科書の表現を使って、中国語でお互いに簡単なコミュニケーションが図れるようになることを目標とする。また、中国語を学習すると同時に中国人の生活習慣・思考様式など中国人の生活と文化についても学ぶ。	
		中国語Ⅱ B	本授業では、前期に引き続き、中国語の基礎的な文法を学ぶ。読み・書き・聞き取り・及び発音を正しく行うこと、中国語の基本的な文章の構造について理解できること、挨拶や簡単なコミュニケーションが理解できること、簡単な作文や読解能力を身につけることを目指す。また、中国語を学習すると同時に中国人の生活習慣・思考様式なども学ぶ。なお、授業では発音練習・会話練習・作文練習などを行い、毎授業ごとに復習小テスト・課題等を課す。	
		中国語Ⅲ A	中国語の基礎的な表現を復習しながら、現代中国事情を反映した簡明な文章を読み、さらに明快な基本的会話に基づく練習によって、読解力と会話の能力を高めていく。一年生の時に習得した知識を基にして、自己表現を中心に、より高度な中国語表現の力の養成を目指す。もっとも中国の文化・社会を理解し、中国人と交流する中国語の正しい発音及び中国語のしくみ全体について基礎を理解する。異文化について学ぶ。中国語圏の人々と少し難しいコミュニケーションに必要な表現力・語彙力の習得を目指す。	
		中国語Ⅲ B	1年生の時に学んだ中国語の基礎的な文法事項の復習とともに中級で習う少し複雑な文法事項も併せて学んでいく。1年次と同様に、「使える中国語」を目指して、発音の練習を重視する。本文の朗読、新出単語の予習と復習、会話練習、リスニングなどを通してバランスよく中国語を学ぶ。教科書の表現を使って、中国語でお互いに簡単なコミュニケーションが図れるようになることを目標とする。また各課のトピックスに関連するリアルな中国の映像を鑑賞し、中国の様子を知るとともに、日本と中国の文化的な違いについての知識を得る。	
中国語Ⅲ B	このコースでは、韓国語で文字を正しく書き、正確に発音できるようになることを目指す。とくに、日本語にはない激音や濃音、パッチムなどの発音を習得するための練習を行う。母音と子音の発音と単語の発音の仕方を身につけるとともに、簡単な韓国語会話表現や韓国の文化についても知ることを目的とする。初級レベルの文法や文型を身に付け、それらを用いて会話や作文ができるようになることを目指す。質問のしかたや答え方など会話のパターンを身に付けたり、自己紹介や時間を訪ねたりする時の表現を学ぶ。			
韓国語Ⅰ A				

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 外国語科目	コリア語ⅠB	ハングルをしっかりと読み書きできるようにするために、最初にハングルの子音と母音を覚え、何度も練習して正確に発音できるようにする。また、簡単な会話表現や文型も学び、自分の言いたいことを話すことができるようにする土台を作っていく。繰り返し声に出して練習することで、ハングルの正確な発音と読み書きはもちろん、助詞と名詞、基本動詞、形容詞などを学び、簡単な文章を作ったり、韓国人と会話ができるようになることを目指す。質問のしかたや会話のパターンを身に付け、基本的な情報のやり取りができるようにする。	
	コリア語ⅡA	前期に引き続き、発音練習に加えて日常会話でよく使う基本文法を理解することができるようにする。特に発音に関しては、文章の中での不規則な変化について学習する。自分の名前、年齢や誕生日、好きなものなどについて簡単な会話と作文ができるように学習を行う。スマートフォンやパソコンでハングルを入力する練習を行い、辞書を用いて簡単な文章を作ったり訳したりできるようにすることを目標にする。様々な分野の資料を用いて語彙力と表現力を向上させるとともに、簡単な敬語表現を学習する。	
	コリア語ⅡB	前期に引き続き、ハングルを正しく読めるように練習する。また、基本的な文法学習に加え、短い文章や会話を理解できるようにする。前期に学んだ基礎を元に会話の幅を広め、旅行や買い物に出かけた時を想定した会話も学ぶとともに多様な敬語表現を習得する。簡単な韓国語の会話を理解できるように繰り返しリスニング練習を行い、ハングル能力検定にも積極的に挑戦する。同年代の人と親しく話すときに使用する形や書きこばで使用する形を学ぶことで、文体の使い分けを習得する。	
	コリア語ⅢA	コリア語ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡBで習得した文法・語彙知識をもとに、初級から中級レベルに必要な新しい語彙や文型を学ぶ。また、会話の練習と韓国文化の理解にさらに重点を置き、コミュニケーション能力を養成することを目標とする。自分や家族の紹介、買い物、飲食店での注文など日常生活に必要な基礎的な言語を駆使でき、日課や予定、食べ物などの身近な話題の内容を理解できるように繰り返しリスニング練習を行い、ハングル能力検定にも積極的に挑戦する。同年代の人と親しく話すときに使用する形や書きこばで使用する形を学ぶことで、文体の使い分けを習得する。	
	コリア語ⅢB	コリア語ⅠA・ⅠB・ⅡA・ⅡBで習得した語彙力、読解力、表現力の向上を目指す。色々な慣用表現や諺などを学習することで、状況や場面に応じて適切に表現できるようにする。新聞記事や映像資料など様々な分野の資料を用いて、読解力と聞き取る力を向上させる。グループワークを通して会話能力を伸ばすとともに、韓国語でプレゼンテーションを行うことで、簡単な質疑応答が可能になることを目指す。また、簡単な手紙や日記を書くことができることを目標とする。	
	特別演習中国語Ⅰ	毎回の授業で、本文の朗読、新出単語の予習と復習、会話練習、リスニングなどバランスよく中国語を習う。また、中国人の生活習慣・思考様式・標準語と普通話の区別などを随時紹介する。中国の文化・社会を理解し、中国人と交流するために不可欠な中国語の基礎発音、とりわけ文法をしっかりと学習する。また、中国人の生活習慣・思考様式などを随時紹介する。中国語の正しい発音及び中国語のしくみ全体について基礎を理解する。異文化について学ぶ。簡単な挨拶、自己紹介ができる。中国語圏の人々と簡単なコミュニケーションに必要な表現力・語彙力の習得を目指す。	
	特別演習中国語Ⅱ	前期に引き続き、毎回の授業で、本文の朗読、新出単語の予習と復習、会話練習、リスニングなどバランスよく中国語を習う。また、中国人の生活習慣・思考様式・標準語と普通話の区別などを随時紹介する。中国の文化・社会を理解し、中国人と交流するために不可欠な中国語の基礎発音、とりわけ文法をしっかりと学習する。また、中国人の生活習慣・思考様式などを随時紹介する。中国語の正しい発音及び中国語のしくみ全体について基礎を理解する。異文化について学ぶ。簡単な挨拶、自己紹介ができる。中国語圏の人々と簡単なコミュニケーションに必要な表現力・語彙力の習得を目指す。	
	特別演習日本語Ⅱ	日本語で書かれた新聞記事や平易な日本語で書かれた論文などを確実に読める力を修得する。また、授業時間外に日本語に関する本を読み、その概要と感想を適切な表現を用いたレポートとして書ける力を修得する。レポートは添削の上返却するので、それを参考に再度書き直すことで、より整った表現によるレポートが書ける力を修得する。15回の授業終了後、授業の仕上げとして自由課題によるレポートを作成することで、自然な日本語でかつ適切な文体によるレポートが自力で書ける力を修得する。	

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
健康科目	心と体の健康論	<p>(概要)</p> <p>生きていくことそのものが身体活動であった時代に比べて、私たちが生きる現代社会は、運動不足や栄養過多、睡眠不足、人間関係の希薄化、ストレス増大などの様々な原因により、生活習慣病や心の病に罹りやすい社会である。体を動かし、栄養バランスを考えた食事を整え、質の良い睡眠をとるなど身体的にアクティブで健康的なライフスタイルを確立していくことは、充実した豊かな人生を送るうえでの最重要課題である。こうした考えに立ち、精神的、身体的、社会的側面から健康について考察するとともに、自己の生活を見直し、具体的な課題を捉え、その解決に向けて実践的な理解を図る。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(59 安江美保／12回)</p> <p>「健康のとらえ方」…健康の捉え方には主観性が強く関わっているが、QOL（生活の質、人生の質）の向上には、「トータルな健康を確保し、人生の質を高めるための、生活改善の積極的な努力行為を行う」という「ウエルネス」の考え方が参考となることを中心に学ぶ。</p> <p>「健康な生活・運動」…人間は身体活動が不必要な機械文明の世の中を形成してしまった結果、運動不足が原因とみなされる健康障害を引き起こすようになったことを受けて、どのように生活の中に身体活動を増やしていくことができるか、その効果を中心に学ぶ。</p> <p>(47 日下紀子／2回)</p> <p>第1回目は、心の健康とは何かをストレスに焦点をあて、セルフチェックも取り入れながら、自分にとってのストレス、ストレスコーピングを見つめ直す。第2回目は、ストレスからくる「心の痛み」、心と体のつながりとその関係、心のメカニズムについて理解をすすめていきます。自分の心と体について改めて認識ができるように取り組む。</p> <p>(30 小林謙一／1回)</p> <p>「私たちは、なぜ食べなければならないのか」という問いからスタートし、人間と食生活との関わり合い、人間は「情報」も食べている、メタボリックシンドローム、糖尿病、こころの健康に関与する物質などの内容から「食事と健康」について考察を深める。</p>	オムニバス方式	
	体育実技Ⅰ	生涯に渡って運動や身体活動に親しみ、明るく豊かな生活を送ることのできる実践力を身に付けることに向けて、本授業は「ニュースポーツ編」として誰もが取り組み易い内容の実技を行う。具体的には、ワンバウンドふらば〜るバレーボール、ドッジビー、キンボールなどを取り上げる。そして、体を動かす心地よさや楽しさを実感し、自身の体力や身体諸機能の向上をはかりながら、仲間と共に運動を楽しむ楽しみ方を学び、生活の中での実践につなげていくことができるようにする。		
	体育実技Ⅱ	生涯に渡って運動や身体活動に親しみ、明るく豊かな生活を送ることのできる実践力を身に付けることに向けて本授業は「美容と健康編」として自身の身体より良い美容と健康を求めていける内容の実技を行う。具体的には、ヨガ、易しいエアロビクス、ティラピスなどを取り上げる。そして、ゆったりとした音楽の中で体を動かしたり、リズムカルな音楽に合わせて易しい動きで律動的に動いたり、必要なところに筋力をつけたりしていくことを通して、より良い美容と健康の向上の仕方を学び、生活の中での実践につなげていくことができるようにする。		
	体育実技Ⅲ	生涯に渡って運動や身体活動に親しみ、明るく豊かな生活を送ることのできる実践力を身に付けることに向けて、本授業は「チャレンジ・スポーツ編」として様々なスポーツを楽しむ内容の実技を行う。具体的には、硬式テニス、バレーボール、バドミントン、卓球などを取り上げる。そして、仲間とともに基本的な知識や技能を習得し向上させることと、自分たちに合ったルールを工夫し一緒にプレイすることを通して、スポーツの楽しさや楽しみ方を学び、生活の中での実践につなげていくことができるようにする。		
全学共通科目	自立力育成科目 A群	わたしたちの社会と経済	本授業では日本経済を中心とした最近の経済情勢を、経済学の考え方や経済情報をもとに読み解く。主なテーマはお金、消費、物価、景気、地域経済、経済政策、財政、雇用、企業経営などである。経済時事問題を積極的に扱うことで、興味関心を持ちやすくする。一般的な経済知識を身につけることで、就職活動や将来の仕事にも役立つことも意識した授業となる。一つ一つの経済現象が、社会のシステムに影響を与えていること、逆に与えられていることを理解することを目的とする。経済的視点で、過去・現在・未来の社会を展望する力を身につける。	
		わたしたちの社会と政治	教科書を用いて政治学の基本的な概念や理論を整理しつつ、現代の日本政治が抱えているさまざまな問題について検討を試みる。具体的には、まず第二次世界大戦後の日本政治における労働問題や少子高齢化問題への取り組みを他の先進諸国のそれと比較しながら検討し、今後の日本政治の課題を明らかにした後、安全保障や伝染病対策をめぐる国際政治学の議論を学び、最後には現代の文学作品を政治学の観点から分析する。以上のような学びを通じて、現代の政治について、自ら考え、判断し、責任を担っていく自立力を育成する。	
		わたしたちの社会と法	生まれてから死ぬまで、私たちが関わる（あるいは、関わるかもしれない）さまざまな法制度をわかりやすく解説する。法学の基礎（法の機能や道徳との違い、優先順位など）、裁判員制度に関する基礎知識も学ぶ。特に裁判員制度は基礎的な知識は不要とされているものの、刑法の一般知識は最低限度必要かと思われるため、刑法の基本的な知識を修得する。また、刑法に関して、女性の人権侵害に関する条項の問題点などについて世界と日本の対比も交えながら考察していきたい。	
		わたしたちの社会と科学	SDG's (Sustainable Development Goals, 持続可能な開発目標) は、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標であり、世界的に注目されている。この目標を理解するには、我々が生きている社会と科学の関係を知ることが必須である。本講義では、SDG'sの行動指針の中から、目標2「飢餓をゼロに目標」、目標3「すべての人に健康と福祉を」、目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」、目標12「つくる責任つかう責任」に焦点を絞り、農学、工学、医学、栄養学などの科学的視点から、現在試みられている取り組みや将来への展望について理解を深めていく。この講義によって、我々の生きている社会的諸問題とその解決策について科学的に説明できるようになることを目指している。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
A群	ことばと社会	日本に暮らす外国人がどのような分野でいかなる課題を抱えながら生活をしているのか、その課題をどうすれば解決することができるのかについて主体的に学び、考える授業である。また、このテーマは、今、この瞬間も議論がなされ、動いているものであるため、常に、社会の動向に目や耳を傾け、ニュースや新聞記事も扱う。そのため、多文化化する日本社会で起きる事象や身の回りで起こっている事柄に関心を持つことが必要となる。	
	インクルーシブを考える	いろいろな人と出会い、対話しながら、インクルーシブな世界を探求していく。受講者のこれまでの体験を重ね合わせながらのインクルーシブワークショップからスタートし、こたえない学校やイェナプラン校、中小企業同好会など、一人一人を大切にしたい世界観を描きながら進んでいる我が国の様々な取組や人との交流や対話を進めていく。それらの体験と学びを重ねながら、受講者は自分の置かれた立ち位置で、自分自身の考えを形成していけることを目指す。授業の最後には、インクルーシブカフェを開催し、共生社会の形成基盤となるインクルーシブについての学びを緩やかに発信していく講義である。	
	キャリアデザイン基礎	主体的に自己の進路を選択し、また決定できる能力を身につけ、社会人として自立していくことができるよう、未来の「自分」を創っていく授業である。キャリア形成していくために必要な基礎的な考え方やそのための方法を、「自己」「企業」「社会」の三方から学ぶ。また、これまでの自分の経験や行動を通して「自分を知る」ことで、これからの自分をどうデザインしていくのか、それをどのような形で企業や社会と連携させていくのかを考える。	
	キャリアデザイン発展	国際化や技術革新の波の中で激変している社会の現実を広く知るとともに、その時代を生き抜くキャリアを支える意識・知識・行動の本質を学ぶ。答えを知るのではなく、正解のない問題に対して自分で考え、判断し、責任を持って答えを出すことの厳しさと面白さを知り、将来に渡るキャリアデザインへの仮説を形成する。授業では具体的な事例への考察を繰り返し、「キャリアを描く(デザインする)」とはどういうことか?に気づき、「キャリア」を自らの責任で描き、自立して生きるための力を強化する。授業は講義を基本とするが、実践的な学びを獲得するために、社会人としての課題解決を支えることについて伝授・演習することもある。また、社会人をゲストとして招聘し、その仕事内容や課題認識、キャリアへの考え方を直接学ぶ機会を複数回設けるほか、学生同士のディスカッションによって他者との切磋琢磨、協働によるアクティブな学習スタイルを随時組み込む。	講義22時間 演習8時間
B群	ボランティア実践A	自分たちの身の回りで行われている多様なボランティア活動は、社会の様々な課題の解決を目指して取り組まれている。この授業では、ボランティア活動の概念・歴史・社会的意義、活動する上で気を付けなければならない原則やルールなど基礎的な知識を学ぶ。また、様々な分野で実践されているボランティア活動やその活動を支援するボランティアセンター等からゲストスピーカーを招聘し、それらの活動の意義や目的について理解する。さらに、体験学習やその後の振り返り等を通して、自らの考え・価値観を言語化することで、ボランティア活動についての理解を深める。	講義16時間 実習30時間
	ボランティア実践B	ボランティア活動について、概念、歴史、社会的意義、活動上の注意など、基本的な事柄を学ぶ。ボランティア活動にはさまざまなものがある。ボランティア活動の実践者やコーディネーターの講義から多様なボランティア活動について学ぶ。そのうえで、自らが関心のある活動を探して実際に参加する。その実践を通じてボランティア活動の意義を体験的に学び考える。体験からの学びを他のメンバーと共有するとともに、地域社会の課題に対する理解を深め視野を広げる。	講義16時間 実習30時間
	日本語表現A	四季のめぐる自然を豊かに感じとる言葉、自分の人生を支える言葉、自分と他者をつなぐ言葉、そうした日本語表現の言葉の力を養うことをめざす。そのために、まず歳時記を使って自然を豊かに表現できる日本語を磨き、俳句を作る。次に、創造的な表現について学び、自分の人生を支える言葉を探り、詩やエッセイを書く。そして、自分と他者をつなぐ言葉の技術を学び、手紙を書く。さらに、論理的な文章表現の技法を学び、自分が最も他者に薦めたい本のブックレポートを書く。そうした文章表現の実作を試み、それを授業の中で発表し、評価しあうことで、文章表現力を養うことを目的とする。また、「読むと書く」をテーマに批評家、随筆家で詩人の若松英輔氏の特別講義を受ける。	
	日本語表現B	各授業時に小論文のワークショップを行う。トピックとしては「環境問題」「少子化」「男女共同参画社会」等を取り上げる。受講生はこれらのテーマについて論文を書くが、この授業の目的は、テーマについて知識を得たり、理解を深めることではない。論文を書く方法を学ぶことである。テーマはあくまでも、話題にすぎない。この授業で学ぶ論文のスタイルは、主として、社会科学の分野でのレポートや学術論文に求められるものである。したがって、随筆などの文学的文章は対象としない。客観的視点での論理的な文章の展開方法や、それにふさわしい文章表現法を学ぶ。独創的なスタイルではなく、論文としての約束事に従った文章を書く。論文の「型」の習得を目指す。	
	日本語表現C	本授業は、1)学術的な論文を正確に、批評的に読む読解すると、2)読み取った内容を要約し、文章として表現する力を身につけることを目的とする。この実践練習を通して、読解と要約の技術をみがく。要約の技術には、引用方法や、書誌情報の扱いも含まれる。また、この授業で扱う論文は、主として、社会科学の分野の学術的な論文である。文学作品を分析する論文や、随筆などの文学的文章は対象としない。	

全学共通科目

自立力育成科目

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
全学共通科目 自立力育成科目 B群	日本語表現D	<p>(概要) 日本語表現において「伝わる伝え方」を学ぶことで、「聴く(聞く)」と「伝える(話す)」、「読む」「書く」の相関性を理解し、実生活で習慣化できるコミュニケーション力の基礎を修得することを目的とする。全体の授業を通して、ペアワーク、グループワーク、発表、プレゼンテーションなどで「聴く(聞く)」「伝える」の演習を行う中で、学生自身が課題とした点や学んだ要素を日常の中で活かす習慣づくりの機会をもつ。これらを統合し、「コミュニケーション」の分野における「相手を受け取る」「要点や思いが伝わる技術」という課題点も考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(118 森田恵子/11回) 日本語表現における「伝わる伝え方」のメソッドを言語、非言語両面から学び、「聴く(聞く)」との相関性、質問の作成と効果を理解し習慣化のためのコミュニケーション力の基礎を習得。</p> <p>(114 久保田正彦/4回) 聴き手を意識した「伝わる伝え方」の構成法、「読む」「書く」を通してのキーワード化、要点や思いが伝わる技法を口頭、文章表現の違いなども実践していく。</p>	オムニバス方式 講義20時間 演習10時間
	日本語表現E	<p>(概要) 日本語表現において「伝わる伝え方」を学ぶことで、「聴く(聞く)」と「伝える(話す)」、「読む」「書く」の相関性を理解し、実生活で習慣化できるコミュニケーション力の基礎を修得することを目的とする。全体の授業を通して、ペアワーク、グループワーク、発表、プレゼンテーションなどを行う。日頃使っている言葉や敬語表現の棚卸し、幅広い書籍を通しての言葉や表現の発見、電話対応での言葉の選び方を通して、「聴く(聞く)」「伝える」の演習を繰り返す。これらを統合し、「コミュニケーション」の分野における「相手を受け取る」「要点や思いが伝わる技術」という課題点も考察する。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(118 森田恵子/11回) 日本語表現における「伝わる伝え方」を演習を通して確認し、「聴く(聞く)」「伝える」の相関性を言語化できるようにする。日常の言葉や敬語表現の棚卸し、幅広い書籍を通しての言葉や表現の発見を活かす。</p> <p>(114 久保田正彦/4回) 日本語表現の文章作成におけるリソース、構成、アピールポイントの考察、情報収集の方法と選択の仕方を演習を重ねながら「伝わる伝え方」の構築につなげる。</p>	オムニバス方式 講義20時間 演習10時間
	「いのち」と「くらし」の倫理	<p>私たちの「いのち/くらし」の成り立ちと、そこに横たわる諸問題を「ケア」の視点から見つめ、考える。医療や福祉、教育などの「専門的かわり」においてのみならず、私たちの日常的な生活の中にある「ケア」の可能性について考えながら、参加者一人一人が自分自身それを自分自身の生き方に取り入れていく道を探求する。授業はグループワークと発表を取り入れた双方向形式で進められ、他者の言葉に耳を傾け、対話を通じて問題を発見し、共に考察を深める。</p>	講義22時間 演習8時間
	ディスカッションから社会を考える	<p>サブタイトル：国連SDGs入門―「行動の10年」のためのサステナビリティの学び本科目は、国連大学SDG大学連携プラットフォーム (https://ias.unu.edu/jp/sdg-up) が開発した1・2年生向けの一般教養科目である。SDGs実践に先駆的に取り組む全国の大学が協力して授業を展開し、サステナビリティに関する広い知識を身につけるとともに、SDGsの社会的、経済的、環境的、ガバナンス的側面の有機的関連性を見る視座や自主的かつ協動的に考える力を養う。SDGsの歴史的背景と日本の現状を理解したうえで、SDGsがもたらめる変化と行動について事例から学びつつ議論することを通して、サステナビリティについて自分事として捉えることができる姿勢を涵養する。</p>	
	女性の自立を考える	<p>女性の社会的活動がますます求められる今日、持続可能なキャリアデザインについて主体的に学び、未来へと続く自らの生き方や働き方を選び取っていくことが必要となっている。そのため、本授業では、さまざまな研究領域の視点から仕事、生活、人間と社会の関わりなどについて多面的に学ぶ。そのうえで、仕事はもちろん、人生を豊かに過ごすために必要なこと、および女性の自立に向けた課題について検討する。また、各講義をふまえて、受講者がいくつかのグループに分かれ、女性の自立に関するテーマについて討論を行う。そこで明らかになったことを各グループで報告するほか、各自が本授業の成果としてレポートにまとめる。</p>	隔年
	共生と文化を考える	<p>人間は、世界のどこにいても同じように考え、暮らしているわけではない。また社会は、背景、信条・価値観、属性などが異なる多様な個人で構成されている。グローバル化に伴う人の移動が加速する昨今、自己・自集団と他者・他集団とのあいだにある「違い」や「違和感」とどう向き合いながら共生していくのが急速に模索されている。そのひとつの糸口となりうるのが、文化人類学的な思考である。本科目では、世界各地のさまざまな環境に生きる人々が、自分達や自分たち以外の物事とどのように向き合い、社会生活を営んでいるのかを多様な側面から探究する文化人類学の基礎的な考え方やものの見方を学んでいく。そして、人類と文化の多様性と普遍性、豊かさの可能性を考えていく。</p>	
	自立力育成ゼミ I	<p>このコースでは、北米の大学の典型的なレベルのゼミクラスで「西洋文明」の主要な概念を確認する。このコースでは、「西洋」という概念が生まれた3,000年前から、歴史、哲学、科学、工学、教育、社会学、芸術など、あらゆる分野からトピックを選び、その主要な概念を学ぶ。さらに、環境、経済、社会のさまざまな課題を踏まえて、「西洋」の持続可能性について考えることも要求される。また、国連の持続可能な開発目標2030(SDG)に関連したトピックを取り上げる。特に、本学の姉妹大学の活動や、「西洋」の犠牲者に正義と平等をもたらすための世界的な取り組みに注目する。学生は、授業時間外に、世界的なノートルダムネットワークの同輩や他の機関とのつながりを構築し、維持し、発展させていく。</p>	

授業科目の概要					
(国際文化学部国際文化学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
全学共通科目	自立力育成科目	B群	自立力育成ゼミⅡ	本演習では、本学での事前学習を経てCatholic University of Koreaが主催するKorea語研修に参加する。Koreanの授業やその他の社会・文化的活動を通してKorean力の向上・習得を図り、日本の文化を伝える力を養うとともに、Koreaの文化・習慣や伝統についても理解を深める。現地での直接体験を通じてその国の生きた言葉を学んでいく。また、韓国語を学びながら、他の国の学生と一緒に勉強する機会も設ける。	
			自立力育成ゼミⅢ	この授業のテーマは、「英語論文の読解と要約」である。英語で書かれた論文を正確に理解し、その内容を日本語で、批評的に要約できる能力を育むことを目指す。英語そのものの学習を目的とするのではなく、英語を情報収集のツール（道具）として使いこなす技術をみがくことを目的としている。前提となるべき語彙力を増強し、論文特有の表現方法の理解も深める。また、統計資料や図表にも注目する。このような技能を、実践的な練習を繰り返すことで身につけていく。大学院進学や留学の準備としての役割も果たす。	
			自立力育成ゼミⅣ	本授業は、「食べることは生きること」をキーワードとして、「食」を生物学的、社会的、心理的、現代社会的な側面から、理解と思考を深める。また、「食」の問題と「情報」の問題の類似点を探り、その「解決点」を模索する。これらの考え方に基づき、自ら課題を設定し、その課題に対して、情報を適切に収集・選択・整理し、プレゼンテーションやグループディスカッションを行う。その中で、集団の中で自らの意見を適切に表現できるようにする。	
			自立力育成ゼミⅤ	全国模擬国連プログラムへの準備と参加を通じて、地球志民（グローバル・シチズンシップ）と地球規模の問題について学ぶ。このプログラムでは、学生たちがさまざまな国連加盟国の代表を演じ、世界情勢における国連の役割について学ぶ。学生たちは世界的な問題について調べ、それが自分の国や世界の人々にどのような影響を与えるかを調査する。代表団は国連委員会に集まりが模擬国連世界大会（National Model United Nations）が指定した問題について議論し、草案や決議の形で解決策を提案する。会議では、これらの問題について議論し、他の代表団と交渉します。交渉力とディベート力を高めるためのサポートを行う。	演習20時間 講義10時間
			自立力育成ゼミⅥ	近くて遠い国と言われる韓国の「近さ」と「遠さ」を「わたし」という窓を通して理解していく。ソウルでの異文化交流を念頭に、毎回簡単な読む・聴く・話すトレーニングを取り入れながら、自分なりの問題意識を高めていく。現地実習終了後は、自分の目と肌で感じた韓国を伝えたい、今後あるべき日韓の関係づくりの提案を行う。なお、現地実習では、韓国の大学生とじかに交流を行い、日本で準備してきた課題や問題意識の確認と韓国の大学生の問題意識や日本に対する見方とのギャップを受け止め、新たに「自身の世界を覗く窓」を構築することを目指す。	共同 演習26時間 実習16時間
			自立力育成ゼミⅦ	全国に13ある国立のハンセン病療養所のうち、長島愛生園と邑久光明園の2つが本学が位置する岡山県にあり、ひとつの自治体に2つの国立ハンセン病療養所があるのは岡山県だけである。近年、これらに香川県の大島青松園を加えた3園を世界文化・記憶遺産として登録しようとする運動がはじまった。その目的は、90年にわたるハンセン病患者隔離政策の歴史的記憶と療養所入所者たちの生きた証を次世代に継承するとともに、かれらの名誉回復を図り、偏見差別のない未来を切り拓こうとするものである。本科目では、この運動とも通底する、今なお続くハンセン病回復者（ハンセン病の病歴者・元患者）とその家族が経験してきたさまざまな被害の実際を学ぶ。そして、かれらと支援者らによる被害に対する闘いへの想いをみつめ、ハンセン病問題が今日になにを問いかけているのか考察していく。そのため授業は、各テーマとつながりの深い視聴覚教材（映画、ドキュメンタリー）をできる限り多く視聴しながら進められる。	
			自立力育成ゼミⅧ	社会の中で生きていくうえで、人は、自分の思いを他者に伝え、他者の思いを理解するというコミュニケーションを必要とする。より良いコミュニケーションと人間関係のためには、自分が何を感じ、何を思い、何を伝えたいのか、また相手は何を感じ、何を思い、何を伝えようとしているのか、自他の心について理解することが求められる。「大切なことは、目に見えないんだよ」と星の王子さまは言いつつ、心で探さないと見えないもの、心でしか見えないもの、心とは何かについて理解を深めるため、現代社会の心に関する資料や情報を各自適切に選択し、話題提供を行う。それに基づいて自由に討論することを通して、各自が感じ、考えることを適切に表現できるように取り組んでいく。	演習20時間 講義10時間
情報科目	情報メディア演習	文書の作成やデータの整理・分析を行う際にパソコンを活用するスキルは、スマートフォンが普及した今日においても、依然として学業のみならず社会に出てからも必須の素養であると言える。この授業では、情報社会の基礎知識として、パソコンやスマートフォンなどの利用によって生じる様々なリスクを認識し、正しい対処法について学ぶ。次に、パソコンの基本操作として、キーボードのタイピングやマウス操作、ファイルやフォルダの操作について、実習を通して身に付ける。さらに、主要なオフィスソフト、すなわち、レポートや論文など、体裁を整えることが要求される文書を作成するために必要なワープロソフト（Word）、データの整理や視覚化を行うために必要な表計算ソフト（Excel）、プレゼンテーション資料の作成に必要なプレゼンテーションソフト（PowerPoint）についての実習を行い、これらを活用するために必要とされる基本的なスキルを身に付ける。	講義15時間 演習15時間		

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 目	基 礎 科 目	専 門 基 礎 科 目	基礎演習	人文社会科学系の学びに必要なアカデミックスキルを、入学後最初の半年で身につけるゼミ。図書館の使いかた、インターネットを利用した資料の検索方法、レジュメの書き方、説得的な報告の仕方、論文の書き方など、高校教育で修得しているPC技能を確認しつつ、ワードやエクセル、パワーポイントを使いこなしてプレゼンテーションを行う方法を学ぶ。	
			グローバル社会論基礎	<p>(概要) 国際社会やグローバル化を理解するために必要となる基礎的な知識や枠組みを学ぶ。国際社会を理解するための大きな枠組みとして国家を中心とした国際関係論・国際法を骨格として、国際社会がどのようにして成立し、グローバル化の時代と呼ばれる時代に至るまでの歴史を国家を超えるグローバルな視座から肉付けする。さらに、国家というマクロな主体と、移民というミクロな主体との相互作用による社会変容を取り上げ、国際関係論と多文化共生論との接点や違いを理解させる。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(3 八尾祥平／4回) 社会学の視点でグローバル化とは何か、さらには国際関係論や歴史学との接点を解説する。第1回では、グローバル化とは何か、学習の目的・意義、現在の課題など基本的な内容を紹介するとともにオムニバスによる15回の授業の内容を簡単に紹介する。第2回では、社会の近代化を、ヨーロッパから見た場合と、それ以外の地域から見た場合で比較する。具体的には近代化論と世界システム論と呼ばれる理論の間で起きた論争を紹介する。第3回では、メロンパンはヨーロッパ起源ではなく、アジアで「発明」されたモノであることから議論をはじめ、「植民地からの近代化」という新しい近代社会の捉え方を学ぶ。</p> <p>(4 土佐弘之／4回) ブル『アナーキカル・ソサイエティ』、ギルロイ『ブラック・アトランティック』、アリギ『長い21世紀』などの古典的な諸著作などを通じて世界資本主義と主権国家体系の形成・変容について多角的に検討、考察した上で、チャクラバルティ『文明の諸危機』などを扱いながら現在のグローバリゼーションの位相についての理解を深めていく。</p> <p>(6 岩瀬真央美／4回) 今日の国際社会では、経済や社会がグローバル化するとともに、犯罪も国境を越えて行われ、これらを規律する「法」の国際化が進んでいる。「21世紀の国際社会と法」をテーマとする3回の授業では、21世紀の国際社会における地球規模の課題を考えながら、国際社会のルールである国際法の基本的な枠組みと関連する国内法を学び、国際経済活動に関する国際社会の取り組みについて、ベトナムの事例を取り上げて考える。</p> <p>(10 森川まいか／3回) 東アジアが西洋近代と接触し、世界と繋がっていく歴史を学ぶ。第10回と第11回目の授業では、それぞれ近代の中国と日本の事例をみていく。中国の場合、東アジアの伝統的な国家の在り方や国際関係が解体していく中で、その影響を色濃く受けるが、それとは対照的に、日本は明治維新により「近代国家」の仲間入りを果たし、中国、台湾、朝鮮半島に展開していったことを理解する。第12回目の授業では、近代中国における租界という外国人居留地について学ぶ。ここでは上海共同租界の事例を取り上げ、租界に住む中国人・日本人・英米を中心とする外国人が、複雑な利害関係・法律関係の中で、どのように紛争を処理したか理解する。</p>	オムニバス方式

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
学 科 科 目	基 礎 科 目	専 門 基 礎 科 目	<p>(概要)</p> <p>グローバル化が進み、言語や文化背景の異なる人間との交流の機会が増えてきた。総務省によると、多文化共生は、「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されている。本コースでは、国内外の多文化共生をめぐる様々な事例を取り上げ、多様性に基づいた支え合う社会を目指すために必要な基本的な概念、基礎的知識、多角的視点、異文化理解のための方法などを幅広く学ぶ。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(担当者全員/1回)</p> <p>第1回目は、オムニバス授業を担当する教員による各専門についての紹介および学習内容についての簡単な説明を行う。</p> <p>(5 末弘美樹/4回)</p> <p>医療従事者として日本に入国・協働する外国人について4回にわたって考える。まず経済連携協定や技能実習生制度の導入の背景を理解すると共に、日本における外国人労働者の現状を知ることから始める。次に日本での就労にはどのような課題があるのかについて、具体的に把握するために、ゲストスピーカーを呼んでお話を聞きながら理解を深める予定である。第3回目では、医療福祉現場における外国人労働者との協働が持続可能になるために、日本語教育の支援などの具体例を取り上げ考える。最終日は、医療福祉現場における外国人労働者との協働が持続可能になるための解決策を一緒に探る予定である。</p> <p>(① 工藤裕子/3回)</p> <p>文化的多様性に富む東南アジアの民族や宗教、マイノリティの問題について、講義とディスカッションを行う。第6回は、民族の分布や民族ごとに異なる言語の状況を学び、文化の違いを乗り越え、どのように国民としての統合を目指しているのかを日本と比較しながら議論する。第7回は、世界宗教が受容された歴史的な過程や、その基層にある精霊信仰を理解し、人々の宗教実践の特色と宗教間の関係を考える。第8回は、少数民族や外来系住民の事例から、国家との関係や共生の課題について思考を深める。</p> <p>(11 長村裕佳子/3回)</p> <p>現在、日本には約20万人のブラジル人が暮らしている。第9回はどのような地域にブラジル人が集住し、コミュニティを形成してきたのか、ブラジル人学校の活動やエスニックビジネスについて学ぶ。第10回はなぜ日本から遠く離れたブラジルから多くの労働者が来日するのかを日本人の海外移住の歴史や1990年の入管法改正から理解する。第11回では日本に定住する家族や日本育ちの若い世代のブラジル人がどのような経験をしているのか、かれらの置かれた様々な環境を考えながら共生の課題についてディスカッションする。</p> <p>(1 陳來幸/4回)</p> <p>第12回目は多民族国家中国についての講義。少数民族との共存の歴史を抑え、現在の中国による少数民族政策の成り立ちを学ぶ。第13回目は台湾が直面する第五の移民(=外国人花嫁)の波に対する政府の政策について学ぶ。第14回目は居留地形成を契機とする日本の出入国管理政策の成立、戦後の変化を見る。第15回は進展する多文化共生が今後日本にもたらす積極的な面に目を向けさせ、ディスカッションによる議論を進める。</p>	オムニバス方式 共同(一部)	
			Intensive English	総合的に英語の4技能を伸ばすための、英語集中強化コースである。留学に求められるTOEFL・IELTS・TOEICなどの英語能力試験のスコアアップを目指すとともに、特に日本人学生が苦手とするSpeaking力を伸ばすことを目標に置いている。そのため、上級・準上級・中級(Advanced, High Intermediate, Intermediate)という習熟度別クラスに分け、必修英語科目では十分カバーしきれない部分を補いながら、目的に見合ったスキルをさらに伸ばせるよう少人数定員編成で実施する。グローバル時代に必要とされる英語のスキルをそれぞれの目的に合わせて積み上げていけるようなプログラムになっているため、このプログラムを利用して十分な英語力を十分に身につけることができると考える。	集中
			導入演習	基礎演習で学んだ基礎的なスキルを駆使して専門領域の入門レベルの新書を輪読する。輪番で概要報告を行い、テーマを設けてグループに分かれてディスカッションを行い、それを短時間で要約して報告する、ということを繰り返し、参加型のクラス運営を行う。同時時間帯に開講している他ゼミ生と交流する機会を設定し、共同で町にでてフィールド調査を行い、報告会を開くなど、人と人との関わりかたを学ぶ。	

授業科目の概要					
(国際文化学部国際文化学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
学 科 科 目	専 門 基 礎 科 目	<p>(概要)</p> <p>表象文化とは何なのか？このリレー講義では、世界各地の絵画、デザイン、写真、映像、マンガなどのビジュアルメディアをはじめ、音楽、文学、神話、祭や儀礼、通過儀礼、ファッション、芝居、建築、ミュージアム、さらには女性、階級制度などを含めた幅広い表象文化を比較し、その表現のありかたと意味を解釈するとともに、歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景とも関係づける。こうした視覚化された／されない事例を取り上げつつ、表象文化の概念と理論を説明しく。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(2 貴志俊彦／4回)</p> <p>表象文化にまつわる多様な定義と表現を理解するためには、関連する理論と近年の研究動向だけでなく、さまざまな事例を知ることが大切である。授業では、中国や韓国の都市や農村で表現されている／消滅した民衆メディアや祭祀をとりあげる。受講者はこうした視聴覚文化や身体表現の表層と深層について考えていく。いままで知らなかった文化を「知る」ことで、自らの感性を「磨く」ことが大切である。</p> <p>(7 富田裕子／4回)</p> <p>授業では英国の表象文化に焦点をあてる。古くから継承されてきた、また移民たちによって新しく持ち込まれた祭祀、中世から現在まで続いている階級制度、さらにビクトリア朝以降の女性解放運動を取り上げ、それぞれの発展過程を歴史、政治、宗教などの社会的背景と関係づけて考察する。映像を通して、今まであまり学ぶ機会がなかった英国文化を知ること、国際的な視野を広め、同時に日本文化と比較することでその特徴と独自性も学ぶように指導する。</p> <p>(9 松平勇二／4回)</p> <p>映画など、現代のエンターテインメントには、儀礼や神話などのモチーフが用いられていることが珍しくない。特に、人がある社会的段階から次の段階へ移行する際に行われる通過儀礼はその典型である。身近なエンターテインメント作品に表象されている神話的、儀礼的要素を分析し、さらにそのモチーフに関連する儀礼について、ジンバブエの祖先祭祀で行われる音楽パフォーマンスの体験を通じて学び、ワークショップ、ディスカッションも開催する。</p> <p>(70 松岡智子／3回)</p> <p>絵画の表象分析では、国境を越えて生きた画家たちのアイデンティティの模索と交差について、および写真の表象分析では、「人間の眼」と「機械の眼」との対峙と融合について、日本近現代の作品を中心に、西洋と比較し説明する。また、ミュージアムの表象分析では、フランス・パリのルーヴル美術館、ケ・ブランリー美術館、ホロコースト記念館などを事例とし、それらのコレクションと背景にある歴史、政治、文化とを関係づけて考察する。</p>	オムニバス方式		
		情報系基礎科目	ICTリテラシ	現代の情報通信技術（ICT）を活用したデジタル社会の一員として、また情報技術やデータ分析技術の専門家に求められる入門レベルのツールの使用方法を学ぶ。具体的には、コンピュータとネットワークの基礎的な知識を学び、電子メール、インターネットの検索、SNS利用などの情報行動を主体的に責任をもって実施すること。さらに、文書等を作成するために必要なワープロや表計算ソフトと簡単なデータ処理について、演習を通して修得する。	共同
			統計学基礎	本講義では、データを統計的に分析するための各種手法を講義する。まず、グラフ等によるデータの可視化、平均・分散などのデータ分析、複数のデータの間の相関関係の強さや将来予測を行うための各種手法を表計算ソフトを用いて説明する。次に、統計的問題解決のプロセスを理解し、実験と観察によるデータ収集法と統計的推定や検定の具体的な方法論を学び、その意味と意義、特徴と限界を知る。人文・社会科学の実例を豊富に用いて理解を深める。	
	専 攻 科 目	グ ロ ー バ ル 社 会 系 科 目	国際法	今日の国際社会では、経済や社会がグローバル化するとともに、犯罪も国境を越えて行われ、これらを規律する「法の国際化」が進んでいる。この「法の国際化」には、国内法の規律対象の国際化と伝統的に国際関係を規律してきた国際法の規律領域の増大・拡大の両面がある。この講義では、質疑応答や討論及び発表等を通じて、現代の人々の日常生活のあらゆる側面を規律する国際法について、関連する国内法も含めて、21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、国際法の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。	
		国際関係論	本講義では、複雑な国際政治や国際関係を認識し働きかけるための道具として、これまで培われてきた理論的視座を提供するとともに、そのような視座と関連の深い現象について取り上げ検討する。国際関係に関する多様な視点や論理を学び、また我々の日々の生活にも大きな影響を及ぼしかねない現象について認識を深めることを通じて、国際情勢についての単に情勢認識を行うことができるようになるだけでなく、自分の頭で国際政治・国際関係について考察し、個人や市民の立場からグローバルに考え、かつ自分の活動する場（ローカル）から働きかけるための知識を身につける。		

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
グローバル社会系科目	平和学	この授業では、平和学がこれまでに積み重ねてきた知に触れ、これらの問題に対するアプローチを探ることによって国際社会に生じる問題に主体的に取り組む姿勢を身につける。新しい形の暴力に対処するためにはどうすればよいのだろうか?その答えを見いだすことは容易ではない。本講では、上記のような問題関心から、現代世界の多様な暴力の原因を理解し、それらに対処する方法を模索するための素材を提供することを目的としている。まずは問題の現状を知るところから始め、原因の分析、様々な対処方法とそれに携わる人々の思想や運動を知るという順序で講義を進める。	
	国際経済学	今日の経済活動は国境を超えて行われおり、経済活動のグローバル化が進んでいることから、経済活動の国際的な相互依存関係が深化している。国際通商分野を規律するWTO法だけでなく、国際通商以外の分野においても新たな国際的な法的規制が登場している。これらの状況を踏まえて、この講義では、前半において国際経済活動を巡る国際社会の取り組みを概観する。その上で、後半において国際経済活動に関連する地球規模の課題を取り上げて、各分野の法制度を考察する。この講義全体を通して、質疑応答や討論及び発表等を行い、国際経済活動に関連する法制度について、国際法及び国内法の両側面から21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、当該法制度の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。	
	国際社会学	国際社会やグローバル化をより専門的・理論的に理解するために必要な考え方を学ぶ。まず、中級以上の国際関係論の教科書で「もうひとつの国際関係論」として取り上げられる世界システム論を講義の骨格として解説する。その上で、歴史学の最新の知見も交え、世界システム論の視座から近代史を捉えなおす。さらに、旧植民地の視点から社会を捉えなおす、ポストコロナリズムの潮流の基本的な考え方を解説したうえで、近代のアジア太平洋地域の事例を中心に紹介し、国際社会の現実をより立体的かつ包括的に捉え、より公正な国際社会のあり方を展望する。	
コア科目 多文化共生系科目	グローバル化と人の移動	人やモノ、そして、通貨や情報が国境を越えて移動するグローバル化の時代とは何かを、ミクロレベルでの人の移動に焦点を当てて解説する。まず、移民という現象を理解するための枠組みを主に社会学の知見を用いて解説した上で、グローバルな人の移動が実は近代という比較的長い時代のスパンの中で過去にも見られた現象であるという歴史的な視座を養う。こうした人の移動に関する理論と歴史を概観したうえで、移民の目的には社会がどのように映っているのかを解説し、多文化共生論を、理想論としてではなく、地に足の着いた議論をするために最も大切な視座を養う。	
	多文化共生論	本講義では、近年の多文化共生の議論や日本へ来日する外国人労働者の状況を理解しながら、いかに地域社会での共生を促進していけるかを考えていく。特に、在日ブラジル人を事例に、かれらの来日背景や日本社会での生活経験について、家族移民や女性移民の視点ごとに紹介する。また、かれらの間で形成されるエスニック・コミュニティやそのネットワークの果たす役割について考察する。一方で、日本社会側の取り組みにも目を向け、外国人の増加に伴い、各地で展開されてきた地方自治体やNPO、ボランティア団体の活動を振り返る。その上で、日本社会におけるマイノリティとはだれか、かれらを取り巻く課題は何か、多様な人々が安心して暮らすことのできる多文化共生社会の実現について議論する。	
	文化人類学	現代社会は異なる文化の人々とともに生きることが求められている。本授業では、異文化に対してどのように考え、どのように対応すれば良いか、その基本的な姿勢（自文化を基準とした理解の問題点）について学ぶことを目的とする。具体的には文化人類学が、これまで、どのように文化を調べ、どのように理解してきたかを、主に日本の事例を世界の事例と比較するなどを通じて紹介する。テーマとしては、セクシャルティ、ジェンダー、婚姻、家族、親族、宗教などを取り上げる。	
	言語文化論	本コースの目的は、言語と文化がいかに経済や企業に大きな影響を与えるか、言語と文化がいかに世界中の歴史や人々の生活を変える力を持っているかについて、様々な社会的現象を通して理解を深めると共に、グローバル時代におけるリーダーあるいは地球市民となるための基本的な知識と概念およびその方法を言語と文化の観点から学習する。本コースは、毎回の授業のために課題文を読み、クラスで行われるディスカッションのために準備しておくことが求められる。	
	華僑華人論	華僑華人社会の形成は古くは10世紀に始まる宋時代に遡るとされるが、東アジア経済が銀を通じて互いにリンクされはじめた近世に入りアジア各地に広く形成された。19世紀に入り再び海外移民のピークが訪れ、アメリカ大陸や大洋州にも向かうようになった。中国の改革開放後の昨今、再び多くの新華僑が先進国に向かっている。華僑華人問題は古くて新しい問題である。本講義では、近代以降現在にいたる日本、朝鮮半島、東南アジア各地、大洋州、アメリカ大陸など異なる地域や国家毎にマイノリティとして存在する華僑華人社会の変容過程を紹介するとともに、華僑華人ネットワークの実態を知るとともに、各地に根を生やした華僑華人がその国の制度や風土によってどのように変化したのかについて比較分析の視点を獲得し、その社会的役割を理解する。	
	ジェンダーと平等・差異	ジェンダーが私たちの生活にどのような影響を及ぼしてきたか/及ぼしているかについて、特に国際的、グローバルな現象をジェンダーの視点から考えるための方法を学ぶ。本講義では、①ジェンダー/セクシュアリティ概念の基本を学び、②国際社会におけるジェンダー課題と取り組みを知る、その上で、③日本に生きる私たちの立場性を批判的に捉えなおし、④グローバル化が加速する現代において、異なる場所、立場に生きるわたしたちが連帯(つながる)して、ジェンダーに関連する課題に取り組むための力を養うことを到達目標とする。	
	多文化共生政策	多文化共生政策の基本的な枠組みの理解を確実なものとし、その上で国際協力や国際貢献、留学生支援など、国内外の多様なレベルの第一線で多文化共生政策展開において実践的な取り組みしてきた関係者の知見を受け止め、考え、検討する。その際、NGO、NPO諸団体の関係者、多文化共生社会の実現のため活動している人々、さらに多文化共生政策の立案・施行を専門とする研究者の体験から学びとる。また英語コミュニケーションによる異文化交流を軸とする学習環境を実体験することで、多文化・多元化を教育実践や社会のさまざまな場でどのように結び付けばよいかについて、自分なりの見方・考え方を身につけることを目標とする。	

授業科目の概要					
(国際文化学部国際文化学科)					
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考		
専攻科目 学科学目	表象文化系科目 コア科目	岡山学	本授業は環境文化学の視点に立ち、生活を共にする地理的社会空間としての「地域岡山」を地域・人間・文化・社会・歴史などの各方面からの複数の視点によって構成し、専門領域に限定されない自由な観点から講義される。「地域」では文化施設・地域建築、「人間」では事件を含む人物に注目し、「文化」では教育・宗教文化・食文化・洋学、「社会」においては民俗・芸能の事象を取り上げ、さらに「歴史」ではそれらを総括的に取り上げる。授業総括者は各講義の関連性・総合性を意識して、「導入」と「総括」を担当する。講義は、ではゲストスピーカーも招聘し、随時議論の形式を用いて、「自らの理解を他者に伝える」方法を学ぶ。		
		身体表象論	20万年に及ぶ人類の歴史の中で、文字が使われるようになってからわずか数千年しかたっていない。絵画や彫像などの表象文化を除けば、情報伝達に関するコミュニケーションの大部分は身体的な表現によって担われてきたとらえられる。本講義では主にアフリカの音に関連する身体パフォーマンスによるコミュニケーション（音文化：おんぶんか）、すなわち、音楽、舞踊、儀礼、口頭伝承などを事例に表象文化について議論する。そのうえで、現代日本社会における身体表象の事例と比較し、日本における特に音を用いたコミュニケーションについて再考する。デジタル化、非接触などが進展する現代社会における身体性のあり方について各自が考察し、議論できることを目指す。なお、本講義では文字によらない（音による）コミュニケーション、パフォーマンスについて学ぶため、成績評価は文字を用いないプレゼンテーション（パフォーマンス）で評価する。		
		日本文化論	この講義では古代から昭和に至るまでの日本文化の特徴を時代別に述べる。絵画、写真、映像などのビジュアルメディアをはじめ、文学、音楽、ファッション、芝居、建築などを含む幅広い文化を取り上げ、当時の人々（特に女性）の日常生活と歴史、政治、宗教などの社会的背景との関連性を考察させる。また明治維新後来日した外国人が日本文化をどのように解釈していたかについても、事例をあげて説明する。更に日本文化が世界に及ぼした影響についても考える。		
		メディア論	授業のテーマは「戦争・メディア・ジャーナリズム」。日清戦争に始まり、アジア太平洋戦争の敗北で終わった対外戦争の時代。とりわけ満洲事変以降、日本政府や軍部・報道界・国民は、国力を総動員するために、「勝利」をうたうプロパガンダ（政治宣伝）を繰り広げた。この授業では、アジア太平洋戦争終戦までの50年余りに及ぶ時代の推移とジャーナリズムの変化とを関係づけ、あわせて当時どのような通信技術を使って、いかなる戦況ニュースが伝えられたのかについても説明していく。新聞データベースを自由自在に操作できるようになることも目標とする。	講義23時間 演習7時間	
		日本近代美術史	明治維新後、西洋をモデルとした社会のなかで、日本で美術はどのような役割を期待され、どのような様相を占めたのだろうか。本講義では、明治から第二次世界大戦頃までの我が国の洋画、日本画、彫刻、建築をはじめとして、西洋では「マイナーアート」とされた工芸や版画、さらには新しく加わったグラフィック・デザインを含めた各分野の代表的な作家および作品を紹介する。また欧米での「ジャポニズム」についても言及し、広く「アート」について考察することを目的とする。		
		宗教人類学	特定の宗教を信仰していない人でも、初詣やおみくじ、宮参り、七五三、七夕、クリスマス、ハロウィンなど、超自然的な世界や存在にかかわる行事に参加したことのある人は多いだろう。このような日常の営みを、宗教的実践ととらえる。本講義では、宗教の教義や思想よりも人々の営みに焦点を当て、宗教的諸現象あるいは宗教的実践の人類学的解釈について学ぶ。宗教人類学の基礎的な知識、分析手法を身に付け、思想、慣習、行為等を含む宗教的諸現象を自ら分析し理解する力を習得する。具体的には呪術、儀礼、シャーマニズム、宗教と政治、スピリチュアリティなどをキーワードに宗教人類学の研究成果を学ぶと同時に、インタビューやフィールドワーク等の調査に関する基礎技術を身に付ける。		
		日英比較文学史	この講義では18世紀から20世紀における英国と日本の女流文学や女性を主人公とした文学作品に焦点をあて、その起源と発展の過程を説明する。女性を主人公とした文学作品、あるいは女性によって書かれた小説、劇、エッセイ、詩などを取り上げ、各々の作品を時代、社会的、文化的背景とも関連づけ、その作品の文学的、歴史的重要性を述べる。映画化された作品については、映像を通して時代背景に対する理解を深めてもらう。更に日英の女流文学の国際比較を試み、類似点、相違点を受講生と共に考える。		
		文学と芸術	中国人は、おもしろくないことを許さない人びとであると思う。中国人が語り伝えてきた多くの奇譚は、不思議な違和感と謎に満ちている。中国の物語には物語の「文法」が、絵画には絵画の「文法」があり、それらを理解していなければ、中国の物語や絵は、正しく読むことはできない。古来、日本人が「中国的」と思い込んでいるあれこれ、実は「誤読」に満ちているのかもしれない。この授業では、中国の奇譚や絵画から、いくつかのテーマを選んで考察し、その背後にある世界観を模索してみたい。		
		グローバルスタディーズ科目	近現代の日本	古くはキリスト教の伝来、長崎貿易の時代から、外国人の渡来とそれによってもたらされた海外の文化・技術・製品は、日本の経済社会の形成に大きくかかわっていた。とりわけ、幕末開港期から明治維新以降における欧米やアジアとの本格的な接触は、日本が経済発展を進めてゆくうえで多大なインパクトを及ぼした。この授業では、海外とのヒト・モノ・カネの動きとその受容に注目しつつ、主として経済史・産業史の観点から日本の近現代を論じる。	
			近現代の中国	清末から現代に至るまでの中国近現代の歴史について広く学ぶ。中国、とりわけ近現代以降の中国は日本にとって非常に重要な一国家であり、協調や対抗を繰り返しながら、日本の歴史にも大きな影響を与えてきた。この講義では、中国が歩んできた歴史について、同時代の日本の状況を比較しながら学ぶことで、中国独自の特殊性について知り、また、アジアの一国家としての共通性についても理解を深める。さらに、過去の中国の歴史的事象を通じ、現代中国の社会・文化とその課題について理解することにも繋げる。	
近現代の欧米	この授業では、欧米の近現代の歴史を文化・社会のふたつの側面から取り上げる。第一は芸術と社会との関わりについてである。近代初頭（15,16世紀）のイタリア・ルネサンスと19世紀後半の印象派を比較しつつ、芸術とそれを巻き巻く社会との関係がどのように変化し、われわれの知る芸術の「かたち」ができてきたかを展望する。もうひとつのテーマは、生と死をめぐる諸問題である。こうした普遍的なことがらにも実は歴史がある。ヨーロッパの近現代社会が人間の生や死とどのように向き合ってきたか、さらにはそれにどう関与し、どう操作してきたか、を考察する。全体として、今あるヨーロッパ的世界が歴史的にどのようにできあがったか、その一端を理解することに努めたい。				

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 専 攻 科 目 グ ロ ー バ ル ス タ デ ィ ー ズ 科 目	近現代の韓国朝鮮	近年、K-POPや韓国映画・ドラマが、日本でも広く歓迎され、韓国に関心を持つ人も増えた。これらがなぜ輸出商品として成功したのかを理解するためには、また、各シーンやセリフを理解するには、その背景にある歴史・政治・経済・社会についての広範な知識が必要であるが、これらを高校までに学ぶ機会を持った人は多くない。この授業では、近現代の韓国朝鮮について、歴史・政治・経済・社会などの諸分野からの多様なアプローチを試み、人々の日常生活や、日本とのつながりを意識しながら、全般的な講義を行う。	
	近現代の東南アジア	近年、急速な成長を続けている東南アジアは、現在11の国民国家から構成され、民族や文化、宗教などの面で多様性に富む地域である。授業では、各国の基本的な知識を得た後に、国民国家の本質やその成り立ちを考察する。また、現状の問題を多角的に取り上げ、地域の政治、経済、文化を歴史な視点を踏まえて検討し、東南アジアのダイナミズムへの理解を目指す。近年の社会問題についても検討し、日本を含む国際社会との関係を視野に入れながら東南アジアの過去、現在、未来を考える。	
	アジア経済史	(概要) 東、東南、南アジア地域の経済史を、地域の横断的なまとまりや連関を考えながら概観する。欧米との接触によりアジアがどのように変容していったのか、工業化の進展や植民地化の問題について、多面的な視点から講義する。人の移動やモノの連鎖などに着目し、長期的かつ広域的な視点でアジア社会の特徴を学び、現代のアジアの人々の暮らしや経済活動についても理解を深める。 (オムニバス方式/全15回) (1 陳來幸/8回) グローバル化の始まりから20世紀初頭までの日本・中国を中心とした東アジアの経済史を講義する。銀の産出と流通、ボメラントの「大分岐論」とアジア、日中社会構造比較、杉原薫の「アジア間貿易」論、G.W. スキナーの市場論と中国経済の発展サイクル、などの主要理論を紹介しながら、アジア経済史に関わる論争発展の足跡をたどり、時系列に講義する。 (① 工藤裕子/7回) 近代以降のアジア各地域の経済史を、現代とのつながりを考えながら特定のテーマに焦点を当てて講義する。第9回と第10回は、アジア域内で人の移動が生じたプッシュ、プル要因と、移動により拡大した商人や労働者の活動領域、その後の人口動態に与えた影響を見る。第11回から第15回については、生活に欠かせない様々なモノを通して、アジアにおける生産や流通、消費が近代以降にどのように変化したのかを学び、世界におけるアジア経済の位置づけを考える。	オムニバス方式
	国際地域情報Ⅰ	この講義では英国社会と現代の英国事情について詳しく説明する。英国の学校並びに大学教育、スポーツ、メディア、文学、食文化、階級制度、王室、年金、医療制度、政治、経済、移民の歴史など幅広いテーマを取り上げる。また英国について書かれた本、新聞・雑誌の記事や映像を使って、英国社会が現在抱えている家族、女性（特に働く女性）、移民、人種差別、宗教、社会福祉制度に関する様々な問題についても述べ、その解決策を受講生と共に考察していきたい。更に日本社会が現在抱えている問題との国際比較も試みるつもりだ。	
	国際地域情報Ⅱ	書物による技術や制度の伝来、ヒトの流入もさることながら、日本が世界と本格的にかかわるようになったのはモノの交易からであろう。近代日本の輸出品は、第一次産品としての性格が強い銅・石炭・茶を除くと、絹製品・綿製品などの繊維製品を基軸としつつ、マッチをはじめとする多様な消費雑貨が総体として大きな位置を占めていた。そのことは同時に、これらの製造業の発展にとって海外市場がきわめて重要であったことを示している。この授業では、経済史・産業史の観点から、近代日本がたどったグローバルな展開に着目する。それを通じて、モノを介して世界とつながることの意味を学生とともに考えたい。	
	国際地域情報Ⅲ	この授業では、戦後から現代にいたる「北東アジア」地域について関心を持てるように、2つのパートに分けて進めます。ひとつは、北東アジア研究をリードする世界の大学、研究機関、資料館、博物館などの「調査研究組織」について比較する。もうひとつは、私たちを取り巻く「北東アジア情勢」について、おもに紛争や対立を促したトピックについて説明する。授業ではパソコンなどの情報機器の持ち込みを必須とし、ウェブサイト上の関連情報を収集するノウハウや、データベース利用の方法など、履修者の情報スキルを高めることもめざす。	
	国際地域情報Ⅳ	人々が社会生活を円滑に行うためには、そこに生きる人々の価値観に基づいて形成されるルール（社会規範）の存在が欠かせない。社会規範の一つである法もまた、それが妥当する社会の価値観に基づいて制定されている。日越両国関係が深まる中で、ベトナムの社会や社会と法との関係を知ることは、ベトナムやベトナムの人々を理解する上で重要である。この講義では、質疑応答や討論及び発表等を通じて、ベトナムの社会と法について、担当教員・他の学生とともに考えながら、日本やカンボジアなどとの異同にも触れながら、ベトナム社会及びベトナム法の基本的な特徴を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。	
	国際地域情報Ⅴ	東南アジアで最も人口の多いインドネシアに焦点を当て、多様性に富む社会がいかに成立したのか、人々はどのように生活しているのか理解を深める。前半は近世から現代に至るまでの歴史を日本との交流を交えて考える。後半は、開発や環境、都市化、国民統合、紛争などの現在の問題や課題について現状を分析し、その背景や原因について情報を整理することで、グローバルな思考力や課題発見、社会問題の解決に取り組む力を養う。また、授業内では、地域文化に関して調べた内容を発表し、情報の収集と分析の力を養う。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
グローバルスタディーズ科目	国際地域情報Ⅵ	この授業では、中国社会の特徴を掘り下げ、長いスパンで中国文化や中国社会、中国系人を理解する視点を獲得する。とりわけ日本・日本人との関係は重要である。似て非なる日中の文化の違い、相互に競いあい、学び合った近現代の両国を、とくに「人」の視点から学ぶ。別科目「華僑華人論」では各地に散在する華僑華人社会を多文化共生（制度の違い）という視点から考えるが、この授業では中国社会や中国人に底通する意識に注目し、社会の特徴を見る。そこでキーワードとなるのが「繋がること＝ネットワーク」である。	
	国際地域情報Ⅶ	南米に位置するブラジルは、ポルトガルからの独立後、ヨーロッパ人移民や日本人移民などの様々な移民を受け入れながら、多様な民族の構成によって国民が形成されてきた国である。本講義では、社会、経済の発展の過程からブラジルの成り立ちを振り返り、国家のモデルや国民形成の仕組みについて考えていく。その上で、近年のブラジルにみられる社会現象や課題、それに関する社会政策を具体的に取り挙げながら、現代社会の様々な問題について議論する。	
	国際地域情報Ⅷ	貧困、紛争、干ばつなど、アフリカには負のイメージが付きまとうことが多い。一方でサバンナを駆ける野生動物の群れや、熱帯雨林の類人猿など、豊かな自然が目目されることもある。グローバル化が深化しつつある今日、世界とアフリカ、日本とアフリカはどのようにつながり、どのように影響しあっているのか。本講義では、アフリカの自然環境、歴史、経済、文化（言語、宗教）についての基礎知識を学ぶ。特に植民地主義に注目しその原因と今日に至るまでの影響について、理解を深める。アフリカに関するメディアや文献からの情報収集を収集し、それを批判的に検討することで情報分析する力を身に付けることを目指す。	
	国際地域情報Ⅸ	この講義では、近代社会が大量の人とモノだけでなく、富や情報が国境を越えて移動した時代であることに焦点をあてる。とりわけ、アジア太平洋地域を行き来したさまざまな文物に着目し、近代化というものがこれまで理解されてきたような、欧米から世界へ広がったという図式ではなく、移動により西欧とそれ以外の地域が接触することで生じてきたという近年の学界的潮流を理解し、さらにはこうした事例を自ら調査し、報告するための力を養う。本講義を通じて、移動を生きた人びとの視点から国際社会を理解し、より公正な国際社会のあり方を議論できることを目指す。	
専攻科目 体験実習科目	国内外研修プログラム	<p>海外の大学やNGO、企業等の訪問や現地学生との交流や協働等を通して、グローバルな視点で考え、各地域の社会の課題を発見し、その解決に向けて主体的に取り組む力を修得する。また、現地での調査や交流を通じてコミュニケーション力を高め、リーダーシップや他者との協調・協働により目的を遂行する力を体得する。</p> <p>【ベトナム研修】 ホーチミンにて戦争証跡博物館、歴史博物館、第五区チャイナタウンでは廟や市場を視察し、日本人商工会議所を訪問して日本企業や日本人の進出状況に関する講義を受け、ホーチミン法科大学では現地大学生と交流会を持ち、ダナンから世界遺産の町ホイアンに向かい、日本橋や中国人町、日本人墓、現地博物館を見学し、さらに交易港として栄えた中部、阮朝の都フエに向かい、遺跡の見学を通じてベトナムの歴史を学ぶ。</p> <p>【台湾研修】 台北市にて国立台湾博物館、故宮博物館、二二八国家紀念館参観、旧居留地迪化街、龍山寺などを参観、協定校である輔仁大学学生との交流会を実施し、ともに夜市を散策し、淡水方面では淡江大学から紅毛城、基督長老教会淡水教会を訪ねる。国内便飛行機で対岸厦門のそばの金門島に向かい、冷戦時代の遺跡と伝統的宗族社会のあり様を学び、さらに新竹客家コミュニティを経由して中部に向かい、眷村や外国人花嫁をサポートするNGO等を訪問して多文化共生の実態を学ぶ。</p> <p>【沖縄研修】 沖縄にて沖縄県立博物館・美術館、沖縄県平和祈念資料館、沖縄市戦後文化資料展示館・ヒストリートなどを参観する。これと同時に、琉球大学・沖縄国際大学学生との交流会を実施する。また、八重山諸島に向い、石垣市立八重山博物館・石垣市唐人墓や竹富島を訪問し、沖縄の歴史・文化の豊かな多元性、そして、沖縄が国際社会の変化の影響を強く受けつつも、島ごとに異なる言語や文化を持つ、極めてグローバルな社会であることを深く理解することを目指す。こうした理解や視座を養ったうえで、八重山地域の台湾系コミュニティである琉球華僑総会八重山分会等を訪問し、グローバルな沖縄社会における多文化共生の実態を学ぶ。</p>	実習60時間 講義10時間
	国際交流現場体験プログラム	在留外国人数は、法務省「在留外国人統計」によると、令和3（2021）年末現在で全国総数約280万人、岡山県内約3万人となっている。本授業では、国際交流の現場体験を通して、日本と外国との交流の実態や岡山県内における在留外国人の生活全般に係わる習慣や認識、行動の違い、そこに起因する問題点を浮き彫りにすることで、文化の多様性と相対性を体現し、望ましい国際交流や多文化共生の在り方を探る。国際交流の現場体験は、5日間のインターンシップを希望により国際交流に係る自治体の担当部署、NGO・国際医療ボランティア組織、海外事業展開企業、技能実習生の就業する企業、インバウンドの宿泊・サービス業のいずれかで行う。インターンシップの前に全般的な導入、その後国際交流現場体験発表会と総括が行われる。	実習35時間 講義10時間

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
学科 科目	専攻 科目	英語 展開 科目	<p>Studies of Globalization</p> <p>(概要) 人やモノ、そして、通貨や情報が国境を越えて移動するグローバル化の時代とは何かを、ミクロレベルでの人の移動に焦点を当てて解説する。まず、移民という現象を理解するための枠組みを主に社会学の知見を用いて解説した上で、グローバルな人の移動が実は近代という比較的長い時代のスパンの中で過去にも見られた現象であるという歴史的な視座を養う。こうした人の移動に関する理論と歴史を概観したうえで、移民の目には社会がどのように映っているのかを解説し、多文化共生論を、理想論としてではなく、地に足の着いた議論をするために最も大切な視座を養う。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(3 八尾祥平／4回) 社会学を背骨として、ローカルな事例を英語でグローバルに発信するための基礎力を養うために英文文献を読み込む。初回の講義では、講義の背景にあるグローバル化と社会の変容について取り上げ、講義全体の内容紹介や講義の進め方を説明する。第2回の講義では、そもそも近代社会とは何かを解説する。第3回の講義では、地域社会の事例をグローバルな枠組みの中で捉えなおし、ローカルな視座だけではなかなか気づかれない事例の意義を知るための手法を解説する。</p> <p>(4 土佐弘之／4回) 英文文献の読解力を高めるために、世界資本主義と主権国家体系の形成・変容過程について書かれた古典的な著作を読んでいく。それと同時に、現在のグローバル化と社会がもたらしている諸危機を端的に伝えているドキュメンタリー映画などを見聞きしながらメモをとるなどして英語のヒアリング力を高めると同時に、現在の世界システムの位相についての理解を深めていく。</p> <p>(6 岩瀬真央美／4回) 経済がグローバル化し、社会の多様化が進行する中で、社会を規律する「法」のあり方も変化している。この3回の授業では、国際社会のルールである国際法について、その歴史と変遷をたどりながら、国際法の基本的な考え方を学ぶとともに、国際経済活動とこれに伴う紛争処理制度に焦点を当て、グローバル化の中で国際社会が直面する地球規模の課題に対処するための国際法のあり方について考える。</p> <p>(10 森川まいか／3回) 東アジアを中心とする歴史学の立場から、グローバル化がもたらした社会の変化について理解する。第10回目の授業では、清末以降、西洋的な近代国家を目指す中国が、社会や国家体制の改革を進める中で、様々な変化や矛盾を経験したことを学ぶ。第11回目の授業では、近代日本について、中国の事例と比較しながら、その特殊な点について理解した上で、ディスカッションを行う。第12回目の授業では、上海共同租界という場を取り上げ、国籍を異にする外国人らがどのように共存を図ったかを学ぶことで、グローバル化による社会変化の一例を理解し、それへの対処法について模索する。</p>	オムニバス方式

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 専 攻 科 目 英 語 展 開 科 目	Studies of Multiculturalism	<p>(概要) グローバル化が進み、多様な価値観の共存が求められる時代に入った。異文化理解のみならず協働が求められる社会になった。本コースでは、国内外の多文化共生をめぐる様々な事例に、日本、東南アジア諸国、ブラジル、中国、台湾などを取り上げ、多様性に基づいた支え合う社会を目指すために必要な基本的な概念、基礎的知識、多角的視座、異文化理解のための方法などを幅広く学ぶ。そして日本社会における多文化共生の今後の在り方について一緒に考える。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(全担当教員/1回) 第1回目は、オムニバス授業を担当する教員(全員)による各専門についての紹介および学習内容についての簡単な説明を行う。</p> <p>(5 末弘美樹/4回) 4回の授業を通して、多民族国家アメリカを例に取り上げ、その歴史的背景から現在の状況について、映像を利用しながら学ぶとともに、今後の日本における多文化共生について考える。まず第1回目では、アメリカが多民族国家になっていった背景を理解する。第2回目から3回目の授業では、多民族国家の現状と多文化共生の取組みについて具体例を取り上げながら理解する。最後に、アメリカの多文化共生の在り方から学んだ内容を土台に、日本社会の多文化共生の今後について一緒に考えたい。</p> <p>(① 工藤裕子/3回) 東南アジアを事例に、多民族、多宗教の国々における共生のあり方と課題について講義とディスカッションを行う。第6回では、東南アジア諸国の国民統合に至る過程を歴史的な背景から学び、各国の民族政策や言語政策について議論する。第7回では、東南アジアにおける宗教信仰の特徴を理解し、宗教に関する過去の紛争と現状を見る。第8回は、少数民族や外来系住民に対する多文化主義と同化主義の事例から、今後の日本社会における多文化共生についてディスカッションを行う。</p> <p>(11 長村裕佳子/3回) 現在、日本には多くの南米人が暮らしている。第9回はどのような地域に南米出身の人々が集住し、どのようなコミュニティを形成してきたのかを学ぶ。第10回はなぜ日本から遠く離れたブラジルやペルー、ボリビアから多くの労働者が来日するのかを日本人の海外移住の歴史や1990年の入管法改正から理解する。第11回では日本に定住する南米人の家族や日本育ちの若い世代がどのような経験をしているのか、かれらの置かれた環境やかれらのアイデンティティを考えながら共生の課題についてディスカッションする。</p> <p>(1 陳來幸/4回) 第12回目は文明による統合の視点から多民族国家中国について学ぶ。第13回目は日台間の被災地交流から見えてくる両国の外国人花嫁政策について学ぶ。第14回目は、日本における民族・文化の融合の実態について学ぶとともに、戦後の外国人コミュニティと昨今のいわゆる「ニューカマー」との違いを学ぶ。第15回目では日米ビジネスの比較から見えてくるマイノリティのエンパワメント効果を指摘し、ディスカッションによる議論を進める。</p>	オムニバス方式 共同 (一部)
	Global History	<p>現代の社会は、モノ・ヒト・カネ・情報などがさまざまな形で結びついている。そのような地球規模でグローバルに結びついた世界は、どのように生まれ、どのように変容してきたのか。この講義は国際的な視野の涵養を目的とし、ローカルな地域や国の枠組みを越えて張りめぐらされていくさまざまなネットワークなどについて、大航海時代以降の日本を含むアジア、アフリカ、欧米各地域の歴史をゲストスピーカーによる具体的な題材の紹介も交えながら解説する。グローバル化の様相を長期的な視点から学ぶとともに、今日のグローバル化した世界を複眼的に捉える視点を養う。</p>	隔年

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 目 専 攻 科 目 英 語 展 開 科 目	Cultural Representation Studies	(概要) 表象文化とは何でしょうか？この英語によるリレー講義の前半では、絵画、デザイン、写真、映像などのビジュアルメディアをはじめ、年中行事、祭、慶弔の儀式、建築、装いなどを含む幅広い英国の表象文化を取り上げ、その表現のありかたと意味を解釈するとともに、歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景と関係づけて説明する。リレー講義の後半では、他者や自己は誰によってどのように表象されるのか。異文化を経験した者による他者の表象を分析し、その表現のありかたと歴史、政治、宗教などの社会・文化的背景の関係を理解する。表象文化論の基礎知識を身につけたうえで、自ら課題意識をもって表象文化について調査、学習し、発表する能力を身につける。講義の1コマは休日等を利用して博物館でフィールドワークを実施する(第13回講義終了後の週末に予定。詳細は授業内で連絡する)。 (オムニバス方式/全15回) (7 富田裕子/7回) 英国はこれまでに3人もの女性首相を輩出し、エリザベス女王も君主として70年間在位するなど、英国女性の活躍は目を見張るものがある。そのため英国では女性史研究も盛んで、表象を積極的に用いた研究も進んでいる。こういった状況をふまえて、この授業の前半では、近年の英国における女性史研究の動向を論じ、表象を使った研究事例として、女性参政権運動に焦点をあて、その表現のありかたを歴史、政治などの社会的背景と関連づけて考察する。第5回目からは、英国の年中行事、ファッション、英国貴族などの事項も取り上げ、英国が長年に亘り培ってきた独特の文化、継承されてきた文化遺産について、画像を通して受講生に理解してもらおうことを目標とする。わかりやすい英語を使った講義を行い、英語によるディスカッションも取り入れる予定だ。 (9 松平勇二/8回) 大航海時代以降、グローバル化が急速に進展し、人々はそれまでは直接接触することのなかった人々や文化に触れることとなった。著しく外見の異なる人々や、未知の文化に出会ったとき、人々はどのようにそれらを理解し、文化の違いを乗り越えてきたのか。あるいは文化の違いは乗り越えられないのか。第9回では異文化を分析し理解するための学問として発達してきた文化人類学の研究誌について紹介する。文化人類学の成果は異文化理解に貢献してきた一方で、その文化を記述し表現する側のステレオタイプを拭い去ることはできない。大航海時代以降、探検家や宣教師、研究者、芸術家などがどのように他者を表象してきたか(第10回)。文化人類学が挑戦してきた民族誌(第11回)、民族誌映画(第12回)、展示(第13、14回)などの分析を通じて、他者表象の事例を学び、それを英語で表現することを目指す。	オムニバス方式
	International Law	国際法とは、国際社会/国際共同体の法であり、国家間・国家と国際機関との間の法的関係、国家・国際機関と個人との法的関係を規律している。21世紀は、グローバル化の影響を受け、アジア諸国が欧米先進国に追いつき、あるいは、特に経済面では欧米先進国を追い越しつつある。このような国際社会・国際共同体の変化に伴い、国際法の性格や機能が20世紀の世界とは大きく異なる可能性がある。この講義では、国際法の歴史、基本的な考え方、ルール等に焦点をあて、国際法の基本的な構造を紹介される。この講義を通じて、よりグローバルな視点から国際法を検討することで、21世紀の国際社会における地球規模の課題を担当教員・他の学生とともに考えながら、国際法の基本的な知識を学ぶ。なお、授業では内容理解の補助手段として、関連する映像資料や図表等が必要に応じて提示される。	隔年
	Japanese Culture	この講義では日本の文化について英語で説明する。年中行事、風俗習慣、食文化、文学、伝統的な演劇、能、狂言、歌舞伎、大衆芸能、伝統芸術、工芸、建築、住居など様々な分野を取り上げる。日本は2000年余りの歴史の中で、欧米、中国をはじめとする海外の文化を吸収しつつも、独自の文化を築き上げてきた。このような歴史的背景から多彩な要素を持つに至った日本文化の特徴を考察していく。また明治維新後に来日した外国人が日本文化をどう評価していたかについては、彼らの残した自伝や旅行記を用いて探究する。更に日本文化が海外の文化に与えた影響については受講生とともに考えを深めていく。	隔年
	Language and Culture Studies	このコースの目的は、グローバル化時代における多様な価値観、文化、考え方を認識し、それらを受け入れ、共存できるように、グローバル時代における言語と文化の捉え方と言語と文化がもつパワーについて具体例を取り上げながら、言語と文化に関わる基本的な学術理論、概念を学ぶ。また、英語で授業を受講することにより、英語の専門知識を獲得し、英語で学術的内容を理解し、実践的英語コミュニケーション力を向上させることが期待される。	隔年
	International Relations	本講義では、複雑な国際政治や国際関係を認識し働きかけるための道具として、これまで培われてきた理論的視座を提供するとともに、そのような視座と関連の深い現象について取り上げ検討する。国際関係に関する多様な視点や論理を学び、また我々の日々の生活にも大きな影響を及ぼしかねない現象について認識を深めることを通じて、国際情勢についての単に情勢認識を行うことができるようになるだけでなく、自分の頭で国際政治・国際関係について考察し、個人や市民の立場からグローバルに考え、かつ自分の活動する場(ローカル)から働きかけるための知識を身につける。原則として指定した教科書に沿って講義を行う。	隔年

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
英語展開科目	Economic History	<p>(概要) 世界経済史の基本的な内容について英語で講義する。16世紀以降のグローバル化がどのようなはじまり、どのように波及を遂げてきたのかについて、地球規模の交流や相互依存関係に注目しながら検討する。特に17世紀の産業革命以降、豊かな国と貧しい国の格差が拡大してきた理由を考えるのが目的である。日本を含む各地域の工業化や経済発展のあり方を理解し、現在生じている経済問題を歴史的な視野から洗い出し、グローバル化する経済が今後どこへ向かうのかという思考力を養う。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>(1 陳來幸/7回) 銀の流通と船舶技術の発展によって世界経済が密接に繋がった16世紀以降から戦後超大国の出現までの時期を Global Economic History: A Very Short Introduction, (2011, Oxford)に沿って講義する。第1回から第3回は、銀の流通が促した、近世アジアの商業の時代の到来を学び、第4回と第5回はボメラントの二分岐論となぜイギリスで産業革命が始まったかを学び、第6回と第7回はアヘン戦争による西洋のアジア進出と第二次産業革命による超大国アメリカの誕生を講義する。</p> <p>(① 工藤裕子/8回) 産業革命期以降に世界各地で生じた経済変容とその影響を、工業化や植民地化、グローバル化、国際貿易体制の視点から学び、現在生じている格差や貧困問題についての思索を深める。第8回から第11回は、繊維物工業の世界的な再編の事例や、植民地化によるアジア域内貿易の変化、19世紀以降の人の移動、アメリカやアフリカを事例とした格差や貧困の要因について学ぶ。第12回から第14回は、近代以降の日本経済を世界的な流れのなかで位置づけ、その特徴を考える。第15回は総括として、今後のグローバル化の行方についてディスカッションを行う。</p>	オムニバス方式 隔年
	Okayama Studies	<p>本授業では、「英語で学ぶ岡山」をテーマとして、グローバル社会の一端としての地域づくりにつながる学際的な地域文化研究に取り組む。また、語学力(主に英語)や異文化理解力を高め、グローバル化する地域社会に資する豊かな教養力も養う。具体的には、豊富な観光資源を有する岡山県内の観光資源調査と英語で案内(観光アテンド)する際に役立つ観光英語コミュニケーション(岡山に関する英語表現)を日本の文化的特性をふまえながら学ぶ。さらに、それらを海外からのインバウンド観光客にSNS等を通じて魅力的に伝える発信力も磨く。なお、受講にあたり、岡山県内出身、県外出身は問いませんが、基本的に【岡山】を研究対象とする。</p>	
専攻科目 実践外国語科目	Practical English	<p>コミュニケーション能力の育成に重点を置きながら、4技能(リスニング、リーディング、ライティング、スピーキング)を育成する授業である。到達目標は以下のとおりである。</p> <p>様々なジャンルや話題の英語を聞いて読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。</p> <p>様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと[やり取り・発表]ができる。</p> <p>様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。</p> <p>複数の領域を統合した言語活動を遂行することができること。</p>	
	English Presentation	<p>様々な場面に合ったプレゼンテーションを行うために必要なコミュニケーションスキルを紹介する。特に英語での発表の進め方と主流の方法を説明する。</p> <p>学生は、教科書のトピックについて短いプレゼンテーションを準備し、実施します。内容と伝え方に注意が払われる。</p> <p>また、学生たちはグループディスカッションに参加し、自分の意見を述べたり、支持したり、質問したり、答えたりすることが期待されます。相互フィードバックを生かしながらコミュニケーションがスムーズに進むために必要な自信を身につけていく。</p>	
	Project Based English	<p>この講義では、グローバル企業や留学生が抱える課題等、学生が興味をもつ時事的な問題についてグループごとに調査を行い、解決策をグループで検討し、その結果を英語でプレゼンテーションを行う。これらの課程を通して、自分の興味を発見、課題を掘り下げることで自分なりの視点を持つことが期待される。また、交代でリーダーを務めることによりリーダーシップを養うとともに、英語でのコミュニケーション能力や課題や背景等のリサーチ能力の涵養も期待できる。</p>	
	英語学概説	<p>「英語」の輪郭をつかむためのコースである。英語という言葉が持つ様々な言語現象について探求し、基礎的な知識を身につけることが目的である。そのため、音声学・音韻論、語用論、統語論、形態論、意味論、英語史、英語コーパスに関する専門用語など幅広く取り扱う。幅広い角度から言語現象を理解するためには、英語や日本語以外の言語に触れることが理想的であるが、本コースでは、必要に応じて英語と対立的な面を多くもつ日本語を対照言語として扱う。</p>	
	総合インドネシア語 I	<p>初めてインドネシア語を学ぶ学生を対象に、簡単な単語を使って、あいさつや自己紹介、現地での生活に必要なインドネシア語の日常会話の練習を行う。毎回の授業では、生活に関する会話文を用いて、日常よく使用する単語や文章の型を覚え、初歩的な表現ができることを目標とする。同時に基礎的な文法を理解し、短い文章の読解や作文をできるようにする。加えて、インドネシア語の成り立ちや特徴を理解し、インドネシアの文化や習慣についての知識を深める。</p>	演習15時間 講義15時間
	総合インドネシア語 II	<p>インドネシア語 I を履修した学生を対象に、さらに実践的な会話の能力を高める。基本的な語彙や文法知識を学び、表現力の幅を広げ、相手の言っていることの意味や、自分の意見を述べる力を養う。動詞の諸形や、接頭辞、接尾辞、共接辞の用法を理解し、一つの単語からさまざまな意味が派生することを学び、語幹から辞書を使い、短い文章を読解できるようにする。また、実践的な手紙やメール、日記などを書き、表現する練習も行う。</p>	演習15時間 講義15時間
	総合スワヒリ語 I	<p>スワヒリ語はアフリカ大陸東海岸部の広い地域で使われる言語である。アフリカ大陸東海岸地域では古くからインドや中東との海洋交易が発達し、その結果アフリカの言語(バントゥ系言語)にアラブ、ペルシャ、インドなどの言語的要素が加わってスワヒリ語が成立した。ケニア、タンザニアではスワヒリ語が公用語となっている。本科目ではスワヒリ語の基礎的な発音、文法、表現を学び、簡単な自己紹介と日常会話(買い物、交通機関での移動など)レベルの語学力を身につける。また、言語表現とともにスワヒリ語が話される東アフリカの文化を学び、総合的なスワヒリ語コミュニケーション能力を身につける。</p>	演習15時間 講義15時間

授業科目の概要				
(国際文化学部国際文化学科)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専攻科目 実践外国語科目	総合スワヒリ語Ⅱ	スワヒリ語の初級文法がほぼ理解でき、受動形や使役形などの派生形や、関係節などの複文が含まれた文章を読み、作文や会話ができるようになる。具体的な目標として、辞書を用いることなく会話や作文ができること、初級テキストを読み、意味を理解し、説明できるようになることを挙げる。また、スワヒリ語が話されているタンザニアや東アフリカの文化についての理解をさらに深めるとともに、スワヒリ語が属するバントゥ諸語の分布やその歴史についての基礎知識を身につける。	演習15時間 講義15時間	
	総合ベトナム語Ⅰ	ベトナム語の初学者を対象に、言語学習を通して文化や暮らしの一端を学ぶ。学期の初めにまず耳慣れない発音の基礎に触れ、そのあと会話のテキストを使い、簡単なあいさつや日常よく使われる表現を学びながら時間をかけて正確な発音を身につけていく。聞き取りについては随時練習するが、自主練習も必要となる。語彙や文法的な知識の積み上げも同時に進めながら簡単な和文訳ができるようになることも目指す。ベトナム語の発音や文法はこれまでの外国語学習でほとんど触れたことのない類型のものであるので、疑問に思ったことはすぐに講師に質問するなどして解消し、知識の積み残しを作らないことが肝要である。	演習15時間 講義15時間	
	総合ベトナム語Ⅱ	総合ベトナム語Ⅰを履修した学生を対象に、さらに語彙や文法的な知識の積み上げと理解を進め、発話力や作文力を身につけていく。テキストで覚えた語彙のほかにも辞書などを積極的に利用して語彙力を補いながら表現の幅を広げ、簡単な読解にもチャレンジし、総合的な能力の向上を目指す。読解においては語と語の切れ目を見分け、それらの品詞が何かを見極める力が求められる。これには語彙力のほかに文法的な知識が必須であるので、前学期・総合ベトナム語Ⅰに引き続き疑問点を持ち越さないように努めることが望まれる。	演習15時間 講義15時間	
	総合ポルトガル語Ⅰ	ブラジルのポルトガル語の基礎文法を学び、コミュニケーションに必要な表現を身につけていく。ポルトガル語の正しい発音と挨拶、現在形・過去形の動詞の活用を学習し、日常会話の表現や基本的な文の作り方を習得する。世界のポルトガル語圏で話されるポルトガル語と比較したブラジルのポルトガル語の特徴や、ブラジルの文化・習慣についても理解を深めながら、異文化を背景とする人々とのコミュニケーション能力を養う。中国地方には多くのブラジル人が住んでいるので、ポルトガル語は身近な言語でもある。異文化への関心を高め、将来的に簡単なポルトガル語会話が実践できるようにする。	演習15時間 講義15時間	
	総合ポルトガル語Ⅱ	総合ポルトガル語Ⅰに引き続き、ブラジルのポルトガル語の基礎文法、コミュニケーションの表現を学んでいく。総合ポルトガル語Ⅱではより豊かな過去・未来の動詞の活用や使い分け、感嘆文や比較の表現を学習する。文法の知識を高め、語彙を増やしながら自分の意思をよりよく伝えられる文の作り方を習得する。ブラジルのポルトガル語の特徴や、ブラジルの文化・習慣についても理解を深めながら、異文化を背景とする人々とのコミュニケーション能力を養う。中国地方には多くのブラジル人が住んでいるので、ポルトガル語は身近な言語でもある。異文化への関心を高め、将来的に簡単なポルトガル語会話が実践できるようにする。	演習15時間 講義15時間	
	実践中国語Ⅰ	全学共通科目の中国語を履修済み、あるいは既に中国語の基礎を習得している学生を対象とし、中国語でコミュニケーションがとれるようになることを目的とする。授業では、教科書を中心に、中級程度の文法や会話表現を学び、リスニング力・スピーキング力・ライティング力を総合的に育むことで、実践的な語学知識を身につける。また、語学の習得と同時に、中国の社会や文化についても学ぶことで、国際的な視野を有する人物の涵養を目指す。	演習15時間 講義15時間	
	実践中国語Ⅱ	「実践中国語Ⅰ」からの継続で、より高度な中国語コミュニケーションがとれるようになることを目的とする。中級程度の文法や会話表現を学び、より高度なリスニング力・スピーキング力・ライティング力を育むことで、実践的な語学知識を身につける。授業では、教科書だけでなく、中国語の新聞や専門雑誌の記事などもテキストとして使用し、これらを実際に読み進め、議論を行うことで、異文化交流・調査研究の助けとし、国際的な視野を有する人物の涵養を目指す。	演習15時間 講義15時間	
	卒業研究関連科目	研究演習Ⅰ	本授業は、指導教員の研究領域（特定専門地域・理論）の内容について演習形式（参加型・ディスカッション）によって学生と問題意識を共有する。授業内容は教員によって異なるが、フィールドに特化するゼミ、学術論文の精読を重点的に進めるゼミ、原典の資料精読に重きを置くゼミ、外部との交流を多く取り入れるなど、実際の研究とはどういふものなのかを教員や仲間と一緒に体験する。教員は学生が蓄積してきた本学での学びの履歴を把握し、学修後半期の学びに指針を与えることが重要となる。	
		研究演習Ⅱ	本授業は、学習の総まとめのための肉付けとしての指導を行い、次の「卒業研究」での卒業論文作成に向けた準備を行う。今まで培った知識・技能・思考力・分析力を活用し、課題の設定、関連情報の収集・分析、既存研究のまとめまでの進捗を目指す。演習形式の本授業ではその長所を存分に活かすために、意見発表や意見交流の場を設ける。そして卒業論文の基本構成の決定や、論文作成に必要な情報収集、既存研究のレビューなどを指導教員の助言をもとに行う。	
		卒業研究	本授業は、学習の総まとめとしての卒業論文作成に向けた指導を行う。今まで培った知識・技能・思考力・分析力に加え、研究演習ⅠⅡで積み上げた知能・技能を活用し、課題の設定、既存研究のレビューからさらに高度な関連情報の収集、理論に基づいた考察、立論を行い、説得的な論文を構築する。クリティカルな考え方を身につけるだけでなく、ゼミ生の意見に耳を傾け、実践に結びつけることも重要である。1月に口頭試問を行う。口頭試問は、原則として指導教員が主査、その他の教員が副査を務める。提出された論文の内容を総合的に評価する。	
社会情報系科目	情報数学Ⅱ	本講義では、情報システム設計やデータ分析で利用する数学的記法について説明と道具として運用できるようになることを目指す。情報数学Ⅰの離散数学に対して連続数学と呼ばれる。対象の記法としては、集合、数列、行列、ベクトル、確率である。数学の記法を、ものを「簡潔に表現するための」記法という観点から、これらの対象の具体例を実際に簡潔に表現した例を見て、逆に実際に書いてみるなどの練習を通じて運用できるようになる。授業時間外でも授業支援システムを通じて課題を提示し自主学習を行う。		

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学 科 科 目 専 攻 科 目 社 会 情 報 系 科 目	情報数学Ⅲ	本講義では、情報システム設計やデータ分析で利用する数学的記法について、説明と道具として運用できるようになることを目指す。情報数学Ⅰの離散数学に対して連続数学と呼ばれる。対象の記法としては、関数、微分、積分、多変数関数、偏微分である。数学の記法を、ものごとを「簡潔に表現するための」記法という観点から、これらの対象の具体例を実際に簡潔に表現した例を見て、逆に実際に書いてみるなどの練習を通じて運用できるようになる。授業時間外でも授業支援システムを通じて課題を提示し自主学習を行う。	
	プログラミング入門Ⅰ	道具としてコンピュータを使いこなすためにはプログラミングは必要不可欠であり、プログラミングの修得はデジタル社会で活躍するための重要な基本技術となる。文字のみで構成されるプログラミング言語を用いた場合、プログラミング未経験者にとって、エラーを生じやすくさせるため、理解を妨げるものになりやすい。本授業では、プログラミング未経験者でも容易に扱える一種の図形プログラミング言語を使ってプログラミングの構成方法を学ぶ。具体的には、プログラムの各処理が順次処理、分岐処理、反復処理で構成されること、また処理の途中結果を保存する変数の使い方を学ぶ。	共同
	プログラミング入門Ⅱ	道具としてコンピュータを使いこなすためにはプログラミングは必要不可欠であり、プログラミングの修得はデジタル社会で活躍するための重要な基礎となる。本授業では、プログラミング初学者でも容易に扱えるビジュアルデザインのためのプログラミング言語を使用したコンピュータグラフィックス (CG) の制作を通じて、プログラミングの基本的な考え方や文法などの基礎的な内容を学ぶ。この学びを通じてデザイン分野やデータ分析分野等における道具としてのプログラミングの可能性を正しく理解することを目指す。	共同
	プログラミング演習	アプリケーションプログラムやデータ解析などで、現在利用が広がっているプログラミング言語であるPythonの初歩を演習する。範囲は変数とデータ型、if文、while文などの制御構造とそのもとなる条件判定の仕方、配列、リスト、タプル、辞書などPythonで多用されるデータ構造、関数の作成方法と関数呼び出しまでである。目標として基本情報処理技術者Pythonプログラミングのうちオブジェクト指向を除く範囲をカバーする。	共同
	統計学Ⅱ	本講義では、統計学Ⅰで学習したことをより深掘りし、統計学の基礎力と応用に関する知識を獲得することを目指す。この知識とは数理統計についてさらなる理解を深めること、および各分野への統計の応用を学習理解するための必須条件となるものである。本授業では、統計学の基礎である確率についての理解を重視し、その応用として統計的推定、検定、回帰モデルの学習を進める。必然的に、統計学Ⅰと比較して、数式を扱う割合が多くなるが、授業中での説明および授業後の課題によって理解を深める。	
	地理情報システム	グーグルマップや各種ハザードマップのような、様々な情報を地理空間上の位置や形の情報と結びつけて可視化する地理情報システム (GIS) の原理と技術を習得する。地球上の位置を示すための測地系と座標系、位置や形を表現するためのデータモデル、位置や形と各種情報を結びつけるためのデータフォーマットといった基礎の知識を理解し、各種オープンデータとアプリケーションを用いて実際に可視化、解析等を行う能力を身につける。	
	データハンドリング	データ分析を行うにあたって必要となる前処理——(1) 収集した各種データを整理し、処理しやすい構造 (整然データ) にする、(2) 必要な変数を抽出し、必要な加工を行う、(3) 要約統計量の計算や可視化 (グラフ化) を行ってデータの特徴をつかむ (探索的データ解析) ——の過程で用いられる抽出、変換、可視化などのデータハンドリングの方法をRを用いた演習を通して学び、R (tidyverse) とデータハンドリングの基礎技術を身につける。	
	ミクロ経済学	ミクロ経済学とは、個々の家計や企業など個別 (ミクロ) の経済主体の行動分析から始めて、市場全体の需要と供給の分析に積み上げて経済を説明しようとする学問であり、家計であれば予算制約のもとで「効用」 (満足感) を最大化するように行動すると考え、企業であれば、生産制約のもとで「利潤」を最大化するように行動すると考え、さらにこれらの市場における相互作用により均衡価格が決定されると考える。この授業では経済の主要な主体、すなわち家計、企業及び政府の経済的相互依存関係がもたらす効用・効果や、需要と供給の作用、公共政策の効果、市場の失敗を理解する事を目的とする。	
	企業データ論	企業における情報戦略ではこれまで、「どのような情報システムを開発するか」に主眼が置かれていた。しかし近年は「どのようなデータを収集し、それをどのように活用するか」こそが戦略立案の中心へと移り変わっている。この授業では、製造業や小売業、サービス業といった企業を対象として、データがどのように活用されているか、また今後どのように活用されるべきかを学ぶ。さらには、データにまつわる基本的な知識や、近年の技術動向についても取り扱う。授業で扱ったテーマ、トピックに関するレポートの提出を複数回求める。	
	マーケティング概論	マーケティング論は比較的新しい学問だが、現代社会においては企業活動にとどまらず、公共団体・非営利組織などを含め、幅広いシーンで活用されている。本コースではマーケティングの歴史から、マーケティング戦略の構成要素 (製品戦略・価格戦略・プロモーション戦略・チャネル戦略) について理解し、また時代に合わせて生み出されてきた新しいマーケティング理論について学ぶ。企業分析・実例分析を主とするレポートの提出を複数回求める。	
計量経済分析	計量経済学の中心的な手法であり、経済学以外の分野でも広く用いられている回帰分析の原理と技術を習得する。回帰分析は何を目的に、何をどういう方法で求めているのか、その方法を使うにあたって満たされるべき条件は何なのかを認識し、そして重回帰、パネル回帰、ロジット・プロビット回帰、および近年重視される因果推論のための回帰について、それぞれの用いられる理由と具体的方法・条件を理解して、目的に応じ適切に選択・利用できる能力を身につける。		

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
キリスト教文化研究所開講科目	キリスト教思想特講Ⅰ	キリスト教は、イエスという人物を核とした宗教運動として、ローマ帝国支配下においてユダヤ教内部から生まれた。つまりキリスト教は、ユダヤ教やヘレニズム・ローマ社会の思想的な影響を強く受け、形成されたのである。さらに、宗教改革・大航海時代から植民地・帝国主義時代、そして世界大戦を経るなかで、キリスト教はそれぞれの時代、文化、文脈に応答しながら、さまざまな変革・刷新を経験してきた。本科目では、いわゆる「世界宗教」となったキリスト教の教典である「聖書」を読み解くために必要な知識を身につけ、キリスト教の本質とアイデンティティを考察していく。この授業では、イエスの思想と行動の原理について、当時の宗教、文化、社会状況とあわせて検討していく。	
	キリスト教思想特講Ⅱ	キリスト教は、イエスという人物を核とした宗教運動として、ローマ帝国支配下においてユダヤ教内部から生まれた。つまりキリスト教は、ユダヤ教やヘレニズム・ローマ社会の思想的な影響を強く受け、形成されたのである。さらに、宗教改革・大航海時代から植民地・帝国主義時代、そして世界大戦を経るなかで、キリスト教はそれぞれの時代、文化、文脈に応答しながら、さまざまな変革・刷新を経験してきた。本科目では、いわゆる「世界宗教」となったキリスト教の教典である「聖書」を読み解くために必要な知識を身につけ、キリスト教の本質とアイデンティティを考察していく。この授業では「キリスト教思想特講Ⅰ」に続くものとして、イエスの死と彼の弟子たちの復活体験から生まれたイエス運動がキリスト教として成立・発展してきた、今日にいたる過程をカトリック教会を中心として概観していく。	
	キリスト教文化特講Ⅰ	キリスト教は世界最大の信者数を擁する宗教だといわれる。しかし、一口に「キリスト教」といっても、カトリック教会、プロテスタント教会、東方正教会に大別されるうえに、形成された背景、組織としてのあり方、信者が置かれてきた状況などはさまざまである。さらに、世界各地に広まっていくなかで、キリスト教は宣教地に影響を与えるだけでなく、自らもその土地の文化的要素を取り入れ、地域・国によって異なる発展を遂げてきた。本科目のねらいは、「東南アジア」および「東アジア」と呼ばれる地域におけるキリスト教（特にカトリック教会）の歩みと現在のありようを、それぞれの土地の宗教、社会、文化との関係から検討することにある。特講Ⅰは「東南アジア」に、特講Ⅱでは「東アジア」に注目する。	

授業科目の概要

(国際文化学部国際文化学科)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
キリスト教文化研究所開講科目	キリスト教文化特講Ⅱ	キリスト教は世界最大の信者数を擁する宗教だといわれる。しかし、一口に「キリスト教」といっても、カトリック教会、プロテスタント教会、東方正教会に大別されるうえに、形成された背景、組織としてのあり方、信者が置かれてきた状況などはさまざまである。さらに、世界各地に広まっていくなかで、キリスト教は宣教地に影響を与えるだけでなく、自らもその土地の文化的要素を取り入れ、国・地域によって異なる発展を遂げてきた。本科目のねらいは、「東南アジア」および「東アジア」と呼ばれる地域におけるキリスト教（特にカトリック教会）の歩みと現在のありようを、それぞれの土地の宗教、社会、文化との関係から検討することにある。2期では、1期の「キリスト教文化特講Ⅰ」に続くものとして「東アジア」に注目する。その際、講師が専門とする台湾に比重を置き、また日本については受講者数に応じて受講者によるプレゼンテーションを交え、主体的な学びを深めていく。	
	キリスト教文学特講Ⅰ	日本文学者のなかでキリスト教と深く関わった作家として芥川龍之介を取り上げ、作家の生涯を追いながら、キリスト教や聖書と関わる作品を取り上げ、エゴイズムと愛、神と悪魔、アガペーとエロス、父性的神と母性的神、罪と罰、愛と許し、人間存在の根源的渴望、同伴者イエス等のキリスト教的テーマに注目して作品を読み解くことを目的とする。そうした作品分析を学ぶことで、分析の方法と論文へのまとめ方の技術を習得する。	
	キリスト教文学特講Ⅱ	日本文学者のなかで生涯にわたり、キリスト教と深く関わり、それをテーマにした作品を書き続けた作家の代表として、この授業では遠藤周作を取り上げる。それらの作家の生涯をたどりながら、そこから生まれたキリスト教的テーマをもつ作品を年代順に読み解くことで、神と悪魔、エゴイズムと愛、アガペーとエロス、父性的神と母性的神、罪と罰、愛と許し、同伴者イエス、人間存在の根源的渴望、人間と人間を超えたものとの関係と相克などのキリスト教的テーマを探究する。	
	キリスト教文学演習Ⅰ	近代・現代の日本文学において、芥川龍之介、太宰治、遠藤周作、三浦綾子、宮沢賢治などをはじめとしてキリスト教と関わりのある文学作品を書いた作家は実に多い。また、外国のキリスト教と関わる文学作品からも多大な影響を日本の文学者は受けている。そうした文学作品を取り上げ、そこにこめられたキリスト教的主題（神・信仰・愛・罪・赦し…）や聖書的表現などを分析、読解する方法、およびそれらの作品の先行研究を踏まえての研究発表の方法を学び、各自発表し、併せて論文作成の手順と技術について学ぶ。	
	キリスト教文学演習Ⅱ	キリスト教文学演習Ⅰに引き続き、次の内容をより深めて学ぶ。近代・現代の日本文学において、芥川龍之介、太宰治、遠藤周作、三浦綾子、宮沢賢治などをはじめとしてキリスト教と関わりのある文学作品を書いた作家は実に多い。また、外国のキリスト教と関わる文学作品からも多大な影響を日本の文学者は受けている。そうした文学作品を取り上げ、そこにこめられたキリスト教的主題（神・信仰・愛・罪・赦し…）や聖書的表現などを分析、読解する方法、およびそれらの作品の先行研究を踏まえての研究発表の方法を学び、各自発表し、併せて論文作成の手順と技術について学ぶ。	
	教職基礎	教育職員免許法施行規則に定められた教職専門科目「教職の意義等に関する科目」である当該科目は、入学後の早い時期に「職業として教職を選択するということはどういうことか」を理解し、人生設計の最初の段階の意思決定を行うことを目的としている。従って、教師としての在り方・生き方を学ぶための教職への志向と一体感の形成に資する科目として位置づけ、教職の基礎に関する講義を中心とするが、優れた実践例を通した主体的な学びも重視する。	
教職に関する科目	教育原理	人間生活の向上・発展を目指した教育の本質と目的とを考察する。青少年を取り巻く環境の変化の激しい今日、青少年の各発達段階での課題を正しく把握したうえで、教育の普遍的な価値観とは何かを問うことは重要である。と同時に、教育の営みを歴史的観点から振り返りかえり、それによって得た知見を今日の教育の諸問題の分析に役立てることも求められている。さらに、教育の場としての家庭、学校、社会のそれぞれの役割と相互関連について理解し、望ましい教育環境とは何かを考察する。そして、グローバル化の時代に求められる教育の特質を吟味し、現代の日本の青少年の教育には何が求められているかを考察する。	
	教育心理学	教育心理学では、教育の対象をより深く理解し、効果的な教育活動を行うために必要な心理学的知識を習得する。基本領域である、発達、学習、測定と評価、集団、適応（教育相談と発達障害）に関連する主題を学ぶ。特に発達に関しては、胎児期・乳幼児期から、幼児期、児童期、思春期、青年期、成人期、高齢期にわたる生涯発達の視点を獲得する。また、学習に関しては、学習の基礎理論、動機づけ、記憶、思考など、学校教育において必要な視点を学ぶ。	
	発達心理学	人間の健やかな成長・発達を生命の誕生から老年期にいたるまでの長いスパンで紐解いていく。子の育ち、また、親の育ちを冒頭で述べ、親子の絆の在り方について考えた後、幼少期の人の成長を言語・社会性・自己意識・遊びの観点から考察する。その後、成長に伴う発達課題を概観していきながら、人がより良く生きるための成長の姿を考える。	
	学校経営論	新しい時代の学校経営の基本について研究するとともに、その現代的意義や課題について考える。講義だけでなくとどまらず、討論や特別講義等も取り入れながら、学校経営を取り巻く諸問題について多角的に捉えて解決への道筋を探る。教職課程コアカリキュラムに示された「教育に関する社会的・制度的又は経営的事項」に関する事項を、その全体目標及び下位項目として設定されている五つに区分された項目のそれぞれの一般目標を達成する授業とする。	
	特別支援教育基礎論	特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒の学習上又は生活上の困難を理解し、そのための指導・支援を行うための基礎的知識を扱う。主たる障害についての特性を理解すると共に、それらを踏まえての実際の指導についての基礎的事項を理解することを目標とする。2007年に学校教育法の一部改正により実施された特別支援教育にかかわる基礎的事項は、すべての教員にとって不可欠なものである。本授業では、特別な支援を必要とする幼児、児童及び生徒の有する困難性、障害特性やその対応について、及び特別支援の視点を取り入れた保育、教育の現状や基礎的事項からインクルーシブ教育の今後についての解説を行う。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職に関する科目	教育課程論	教育基本法に定める教育の目的と目標の達成を目指すために必要な教育の在り方を具体化する教育課程の基礎的な内容を理解することを目的とする。授業では、学習指導要領・総則編を基に、小学校・中学校・高等学校における教育課程の意義及び編成の方法を理解し、教育課程を理論的・実践的な面から検討、考察する。また、カリキュラム・マネジメントの意義と評価の在り方、教育技術としてのICT活用法と留意事項、及び効果的な教育活動の展開について理解する。	
	英語科教育法A	小・中・高等学校の学習指導要領、本授業のテキスト及び英語の検定教科書を含む各種資料の講義を踏まえ、ディスカッションやプレゼンテーションを中心としたアクティブ・ラーニング型の授業を行う。授業を通じて中学校及び高等学校における英語の学習・指導に関する諸理論の理解を深めるとともに、授業実践に必要な言語の諸要素や文化的側面、生徒理解に基づく指導・評価の技術など、英語教員に必要とされる知識と技能の獲得を目指す。	
	英語科教育法B	小・中・高等学校の学習指導要領、本授業のテキスト及び音声や電子媒体を含む英語教材の事前学習を踏まえ、ディスカッションやプレゼンテーションを中心としたアクティブ・ラーニング型の授業を行う。授業を通じて中学校及び高等学校における英語の学習と第二言語習得理論との関連について理解を深めるとともに、授業内・授業外において英語習得を促進するための指導法・評価法の技術など、英語教員に必要とされる知識と技能の獲得を目指す。	
	英語科指導法演習A	小・中・高等学校の学習指導要領、本授業のテキスト及び検定英語教科書、音声や電子媒体を含む英語教材の事前学習を踏まえ、ディスカッションやプレゼンテーションを中心としたアクティブ・ラーニング型の授業を行う。授業を通じて中学校及び高等学校における授業内・授業外の英語指導法について理解を深めるとともに、授業者として生徒の英語のコミュニケーション能力を高める工夫や授業運営のアイデアを実践に活かす技能を身につける。	
	英語科指導法演習B	小・中・高等学校の学習指導要領、本授業のテキスト及び検定英語教科書、音声や電子媒体を含む英語教材の事前学習を踏まえ、ディスカッションやプレゼンテーション、模擬授業を中心としたアクティブ・ラーニング型の授業を行う。授業を通じて中学校及び高等学校における英語指導法について理解を深めるとともに、学習指導案を準備し、生徒を動機付け、英語のコミュニケーション能力を高める工夫やアイデアを盛り込んだ授業実践の技能を身につける。	
	道徳教育の理論と方法	道徳の本質、道徳教育の今日的な意義と役割、歴史と現状、道徳科の目標と内容、さらに、道徳教育の指導方法や内容等を学ぶ。また、多様な授業例の検討、教材研究、学習指導案の作成、模擬授業を通して実践的な指導力を身につけると共に、今後の道徳教育の在り方を主体的に考えていく。また、道徳教育における教員の在り方についても受講者とともに検討を行う。	講義22時間 演習8時間
	総合的な学習の時間及び特別活動の指導法	(概要) 総合的な学習(探究)の時間及び特別活動について、それぞれの意義や目標、課題、内容、指導方法、指導計画、評価方法などを理解し、教科横断的な学習であることを念頭に置いて指導計画を作成する。また、実践方法を考えるための、基礎的な知識や技能を身につけることをめざす。そのために、学習指導要領の内容や関連する実践事例を踏まえて議論、検討する。さらに、中学校・高等学校における実践事例を研究し、改善の方向を議論、検討する。 (オムニバス方式/全15回) (41 森 泰三/8回) 総合的な学習(探究)の時間については、各教科等で育成される見方・考え方を総合的に活用して、広範な事象を多種多様な視点から探究する学びができるように、指導、実践、評価の各方法を修得する。 (61 家入博徳/7回) 特別活動については、学校における多種多様な集団での活動、課題の発見や解決などから、よりよい集団づくりや学校生活をめざすことができるように、指導、実践、評価の各方法を修得する。	オムニバス方式
	教育方法論(情報通信技術を活用した教育の理論及び方法を含む。)	授業は次代を担う子どもたちに必要な資質能力を育む重要な場である。この講義では、学習指導場面における教育の方法と技術ならびにICTを活用した教育の方法について、その理論的な背景も含めて理解する。欧米の教授学の歴史や日本の授業実践史を学ぶとともに、現代的教育課題も視野に収めつつ理論と実践を架橋する。具体的には、学習指導の技法とその背後にある思想、我が国の教育課程を支える学習指導要領の変遷と内容、学習指導案作成や授業づくりの基礎基本(教材研究、指示・発問・評価言、指導方略、学習形態、教育評価)、教育方法の今日的課題(「主体的・対話的で深い学び」、「特別なニーズへの対応」、「個別最適な学びと協働的な学び」等)、授業とICT活用及び情報活用能力の育成といった内容に取り組む。講義形式を中心とするが、実践事例の検討やケーススタディ等に関しては、協同学習の手法を取り入れ、演習的に行う場合もある。	講義22時間 演習8時間
	生徒指導及び進路指導・キャリア教育の理論と方法	本授業では、社会的な存在として現在及び将来における自己実現を図っていくことができるよう指導する生徒指導と、社会的・職業的自立に必要な資質・能力を身に付け、主体的に進路を選択することができるよう指導する進路指導及びキャリア教育の実践課題について、生徒指導実践理論を踏まえ、学校教育における具体的な指導事例を取り上げて考察し、組織的に生徒指導、進路指導及びキャリア教育を実践していくための指導原理と方法を学ぶ。	講義28時間 演習2時間
	教育相談	問題行動・逸脱行動、あるいは大きな悩みや苦痛を抱えた児童生徒を前にしたとき、教師は、彼らがどのような気持ちを抱きながら困っているのかという心理的メカニズムを理解することが重要である。またそのようなときには保護者が抱える困難感についての心理的理解も同時に必要である。学校現場にて教育相談を進める際には、子どもの個々の心理的特質や教育課題を適切に捉え、カウンセリングマインドに基づいた受容・傾聴、共感的理解等の姿勢と技法が必要になる。その基本について学び、理解する。さらには、教育相談における組織的な取り組みや連携の必要性を理解し、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの多職種を有効に活用しながら、教師が児童生徒と保護者の支援を行っていく道筋を具体例を通して学んでいく。	講義28時間 演習2時間

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
教職に関する科目	中等教育実習事前事後指導	事前指導では教育実習生として学校の教育活動に参画する意識を高め、事後指導では教育実習を経て得られた成果と課題等を省察するとともに、教員免許取得までに習得すべき知識や技能等について理解する。これらを通して教育実習の意義を理解する。	講義12時間 演習3時間
	中等教育実習Ⅰ	本授業（教育実習）は、中学校または高等学校で3週間実施する。教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。	
	中等教育実習Ⅱ	本授業（学外実習）は、高等学校で2週間実施する。教育実習は、観察・参加・実習という方法で教育実践に関わることを通して、教育者としての愛情と使命感を深め、将来教員になるうえでの能力や適性を考えるとともに課題を自覚する機会である。一定の実践的指導力を有する指導教員のもとで体験を積み、学校教育の実際を体験的・総合的に理解し、教育実践ならびに教育実践研究の基礎的な能力と態度を身に付ける。	
	教職実践演習（中・高）	教職課程履修の総括として4年間の学びをふまえ、教員免許取得までにさらに習得すべき知識や技能等を明確にし、教育者としての愛情と使命感を深め、学校教育において必要とされる教育実践及び教育実践研究の基礎的な能力を身に付ける。そのために、学校現場での学びを含む幅広い内容で授業を構成し、現地調査、事例研究、グループ討議等、演習形式で授業を行う。	
	介護等体験の理論	特別支援学校や社会福祉施設で行う介護等体験と教師に求められる力量や資質との関係、体験の留意事項について理解することを目的とする。障害等に関する基本的理解を深めるために、特別支援学校や社会福祉施設の現状や課題について考察する。グループワーク、ディスカッション、疑似体験、発表などを通して、体験開始までに解決すべき各自の課題を明確にするとともに、課題解決の具体的方策を様々な視点から検討する。	講義11時間 演習4時間
	介護等体験の実践	本授業を通して、個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めるとともに、ノーマライゼーションの視点から一人一人のありのままの姿を正しく見るという教職としての基本的な姿勢を身に付けることを目的とする。体験後は、グループディスカッションを通して体験を省察し、自己の成長と課題を明らかにする。特別支援学校及び社会福祉施設において、障害者や高齢者等に対する介護、介助、交流等の体験を合計7日間行うとともに、必要な事前指導及び事後指導を行う。	実習35時間 講義4時間
	教職特講Ⅰ	本授業では、将来教職に就くために必要な資質や、総合的な人間力を身につけることを目的とする。授業では、青少年期にある生徒の心身の発達を踏まえた学校現場の様々な具体的事例や課題を扱った演習、グループワーク、ディスカッション等を行う。人権感覚を重視した視点でのコミュニケーション能力や表現力、対応力を養い、教育実習に備える。また、基礎的な教職教養や一般教養を身につけ、面接試験や模擬授業、模擬指導等の対策を行い教員採用試験に備える。	講義22時間 演習8時間
	教職特講Ⅱ	本授業では、専門職としての教員に必要な資質を養い、総合的な人間力を高めながら、教育実習及び教員採用試験に必要な基礎的な知識や技能を身につけることを目的とする。授業では、学校現場の様々な具体的事例や課題を扱いながら、演習、グループワーク、ディスカッション等で、受講生同士の学び合いを深め、豊かなコミュニケーション能力と人権感覚を身につけ、教育実習に備える。さらに、教育実習後は、学んだことを礎に、教育実践力を磨いていく。また、教職教養全般及び面接試験や模擬授業、場面指導等の対策を行い教員採用試験に備える。	講義25時間 演習5時間
	教職特講Ⅲ	本授業では、専門職である教師として総合的な教育実践力及び総合的な人間力を、高め磨いていくことを目的とする。授業では、来年度より学校現場で教職に就くことを想定して、学級担任としての学級経営力を身につけることができるよう、テーマ別の模擬授業や模擬指導を行い、人権感覚を重視した視点で検討し合うことで実践力を養い、学校現場の実態に応じた学習指導力、生徒指導力、コミュニケーション能力、危機管理能力を身につける。本年度教員採用試験受験者を対象とする。	講義20時間 演習10時間
	学校経営と学校図書館	学校教育における学校図書館の意義や役割、経営のあり方、司書教諭の任務と役割等、学校図書館全般についての基本的な事柄について講義する。そのうえで、「どんな学校図書館を目指すのか」をテーマに、グループワーク等を通して考察し発表し合う。その際、実際に司書教諭や司書に話を聞く機会をつくり、現在の学校図書館の現状を捉えやすくする。最終的には、「学校図書館基本計画」を作成し、それぞれがよりよい学校図書館運営について考えをもつ。	
学校図書館司書教諭に関する科目	学校図書館メディアの構成	「学習情報センター」としての役割が重視されている学校図書館の多様なメディアの特性を知り、児童・生徒が主体的な学びを進め、教職員の学校図書館のメディアを活用した取り組みを支援できる知識や技術を学ぶ。学校図書館メディアの特性と機能を理解し、メディアと利用者をつなぐための情報メディアの組織化（資料の収集法・目録技術・分類技法・メディアの配置等）のスキルを身に付けることを目的とする。講義だけでなく、目録・分類についても学び、様々なメディアを組織化していく技術などを通して学校図書館のコレクションの構築について総合的に学んでいく。	講義25時間 演習5時間
	学習指導と学校図書館	本授業では、これからの時代に求められる資質・能力の育成を目指した主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が重要な課題となっている現在の学習指導において、重要な学びの場となる学校図書館の読書センターとしての機能、学習センターとしての機能、情報センターとしての機能を理解し、情報活用能力等の育成を目指して、各教科・領域の学習指導の様々な場面で学校図書館を効果的に活用するための司書教諭としての役割を学ぶ。	
	読書と豊かな人間性	子どもの読書の状況と読書の意義を踏まえつつ、学校図書館での実際の読書活動を促すための方法論として「ブックコミュニケーション」と「童話創作」の二つの技能を体得できるようにする。ブックコミュニケーションについては、図書館を毎週活用し、コミュニケーションのきっかけともなるような新しい本との出会いを準備する。これらの体験を踏まえ、さらに読書を推進する学校図書館や関連施設の役割と問題について概説する。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
学校図書館司書教諭に関する科目	情報メディアの活用	学校図書館における多様な情報メディアについて学びその特性と活用方法の理解を図り、情報機器、情報メディアの多様化に対応した教育・学習環境の整備について考察する。高度情報化社会での学校教育の場におけるメディアリテラシーについても理解を深め、学校図書館と司書教諭の意義、役割を理解する。またコンピュータを活用した情報検索や情報発信、データベースやインターネットの利活用、情報倫理や著作権制度についての学びを深める。グループディスカッションなどを通して、教育現場における情報メディアの活用や表現法を学ぶ。	講義20時間 演習10時間
	図書館概論	図書館の歴史と理念、基本的な機能、関係法規や公共、大学、学校その他の図書館の種類、外国の図書館や図書館の自由、図書館専門職員の役割など司書課程で学ぶ領域を俯瞰し、民主的な社会において図書館がもつ社会的意義、人々の生活や暮らしの中で果たしている役割や機能等の基本的な事柄について幅広い視野から考える中で、図書館について学ぶ基本的な視点の獲得と意義についての理解をすすめ、主体的に図書館に興味と関心を持てるよう概説する。	
図書館に関する科目	図書館制度・経営論	図書館に関する制度や組織のありかた、関係する法制度、国や自治体の図書館政策、さらに図書館の経営に関わる評価のあり方、社会状況の変化による市民要求や情報化・機械化、専門的職員の現状と課題、管理運営の多様化、危機管理のあり方など図書館の運営や経営に関わる具体的な諸問題について概説するとともに、図書館経営をめぐる実際の事例について考える視点を理解するとともに、図書館が市民に親しまれ役立つ施設となるために求められる経営のあり方を考える。	
	図書館情報技術論	図書館業務に必要な基礎的なICT（情報通信技術）について学ぶ。コンピュータ等の基礎、図書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、コンピュータシステムやセキュリティに関わることなどについての知識や理解を図り、それらを活用して利用者サービスに活かすことができるスキルを修得する。図書館システムや様々な電子情報資源（メディア）に関する理解を深め、知識情報基盤としての図書館の意義、役割について考察する。	講義20時間 演習10時間
	図書館サービス概論	公立図書館で実施される具体的な図書館サービス活動を中心に、基本となる資料・情報サービス（貸出、読書相談、予約、相互貸借とレファレンスサービス、図書館間の協力と連携）、著作権制度や様々な図書館資料のあり方、利用に障害のある人々へのサービスや県立図書館の役割と図書館ネットワークなどの内容や、これらを支える図書館サービスの基本的な機能や構造、図書館の自由問題などの理念、近年の公立図書館のサービス活動の発展の経過や専門職員のあり方など、現在の図書館サービスの歩みと具体的なあり方や課題について概説する。	
	情報サービス論	図書館における「情報サービス」とはどのようなサービスであるのかをについて、その意義、役割、内容、方法について学ぶ。図書館では様々な利用者向けのサービスが展開されている。そうした様々なサービスにおいて活用される参考図書や情報検索、課題探索などについての理解を深め、「情報サービス演習」でも活用できる資料や技術についての知識の獲得を目指す。また今日の情報化社会におけるデジタル環境下での情報サービスの在り方についても考察し、理解を深めていく。	
	児童サービス論	児童サービス論は児童を対象とした図書館論で、前提となるのは子どもと児童資料の理解である。「子どもを知り、子どもの本を知り、子どもと本を結びつける技を探ること」を講義の基本とし、子どもと資料を結びつけるための考え方や方法・技術を概説する。また、乳幼児からヤングアダルトまでのサービスの現状と課題を概説するとともに、図書館における児童サービスの重要性と必要性を考える。さらに、絵本や児童文学、知識の本等の児童資料に幅広く触れながら、その特性をとらえた上で、図書館にできるサービス、また、学校や地域との協力等についても概説する。	
	情報サービス演習Ⅰ	図書館では紙の資料による調査、研究が様々なレファレンスツールや参考図書を用いて行われている。また現在の情報技術の進展により、情報サービス活動におけるデジタルデータの活用は欠かせないものとなり、図書館員に求められる情報技術的能力も高度なものとなってきている。利用者ニーズを知り、的確な資料・情報を提供できるように各テーマの特性、情報源の利点と課題を理解し、演習問題を通じてレファレンスサービスと情報検索サービスの能力を養っていく。	
	情報サービス演習Ⅱ	図書館において利用者からの様々な質問に対して、数多くの所蔵資料の中から適切なレファレンスツールや参考図書を用いた情報サービス活動を行えるための知識や技術の修得を目指す。また図書館サービスを広報するための情報発信について考察を行い、パスファインダー作成を通して広報活動の意義や役割等への学びも深めていく。利用者のニーズを的確に掴み、正確な資料と情報を提供できるよう、レファレンスサービスと情報検索サービスの能力を養うとともに、積極的な発信型情報サービスの展開を図れる力を学んでいく。	
	図書館情報資源概論	図書館が扱う資料について、文字と記録メディアの成り立ちを最初に、図書、雑誌、新聞、電子資料等、その種類と特質、成立過程、生産・流通、選択・収集、受入、保存・除籍等の基礎知識を解説する。また図書館で扱う資料の中心をなす図書について、その予約と複本収集のおよぼす出版界との関わりについて考察する。さらに図書館が所蔵する資料のほかに、ネットワーク上に存在する資料についても、図書館が検索し提供するという立場から解説を加える。	
	情報資源組織論	図書館における収集した情報源の活用のために、一定の基準にしたがって体系的に整理することを「情報源の組織化」という。この組織化の過程が組織化である。組織化することでより効率的に資料を活用し、円滑的な図書館サービスへとつなげていく。情報資源を客観的に記述する「目録法」と、内容（主題）により資料を体系的に配列する「分類法」の歴史や意義について概説することで、組織化とその背景にある歴史や社会的つながりについても理解を深めていく。	
	情報資源組織演習Ⅰ	図書館資料の体系的な配置の理論とその技術を学ぶ。資源組織化のツールであるNDC（日本十進分類法）及びBSH（基本件名標目表）を用いながらその仕組みや使用方法について理解していく。図書館で利用されている分類番号の意味を理解し、演習において番号の付与を行うことで、分類作業の技術を身につけていく。また件名付与の演習も行うことで件名の意義や役割も理解する。情報資源組織業務についての基本的な知識と能力を養うことを目的としている。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
図書館に関する科目	情報資源組織演習Ⅱ	図書館における目録の仕組みについてNCR(日本目録規則)を用いて学んでいく。演習を通してNCRの使用法や目録作成について学び、理解を深めていくことを目的とする。多様な情報資源に関する書誌データの作成、メタデータについて学んでいくことで、図書館における目録の実際を考察する。また、今日の図書館で利用されているOPACを通してコンピュータ目録についての考察を深め、図書館システムにおける目録の意義、役割、活用について体験的に学ぶ。	
	図書館サービス特論	図書館サービス概論で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から図書館のサービスについて考えていく。特に今日の多様な社会の中での図書館サービスについて、社会的弱者への視点を捉え、図書館サービスの利用に困難をもつ人への在り方を考察していく。図書館における障害サービスとはどのようなサービスであるのかを理解するよう学びをすすめ、情報提供のあり方や図書館の役割、図書館サービスの意味、図書館員の意識と責任について解説する。	講義26時間 演習4時間
	図書・図書館史	古代から現在に至るまでにおいてさまざまな文字や記録メディアの誕生がみられる。それらの変遷を概観し、各種のメディアの保存や収集を行ってきた図書館の意義や役割について考察を行う。今日の図書館は過去の歴史の積み重ねの存在であり、その歴史的・社会的背景の変化とともに、各時代における図書館の在り方や社会的意義を捉えていくことで、これからの図書館の未来を考察する。図書及び図書館の歴史を通じて、図書館の基本的機能と社会的役割についての理解を深めていく。	
	図書館施設論	図書館施設は資料情報の提供という図書館サービスの本質的機能を効果的に実現できるよう建設される必要がある。図書館は多くの市民が気軽に資料や情報に出会い入手できる場所であり、また、地域にあって長く利用される基本的な社会教育施設である。地域の誰にとっても利用しやすく、また、職員が働きやすいといった基本的な観点や、施設を建設するときに検討すべき基本計画から、構成要素や平面計画・レイアウト、家具や備品の選択に至るまで、図書館施設全般について具体的事例も参考にしながら解説する。	
	生涯学習概論	生涯学習及び社会教育の本質と意義を理解し、生涯学習に関する制度・行政・施策、家庭教育・学校教育・社会教育等との関連、専門的職員の役割、学習活動への支援等についての理解に関する基礎的能力を養う。授業では、我が国及び諸外国における生涯学習の発展と特質を理解し、生涯学習社会の意義とその構築、生涯学習の内容・方法・形態等について学ぶ。また、学習への支援のあり方についても議論し、学習成果の評価と活用についても検討を行う。	
博物館に関する科目	博物館概論	博物館・美術館の歴史をたどり、博物館の目的と機能や関係法規に関する基礎的知識を習得することを目的とする。さらに博物館がこれまでどのように機能してきたか、その誕生から今日にいたるまでの課題、ひいては博物館の未来像を博物館倫理も踏まえながら探求する。また、個々の学芸員がどのような倫理(モラル)とモチベーションを持ちながら博物館活動をおこなっているかを、具体例を示しながら、改めて「学芸員」とは何か?について考察する。	
	博物館経営論	昨今の博物館における職員・施設・設備について具体例を示すことによって、博物館を「経営」するとはいかなる事かについて考察する。また、生涯学習の場や研究機関、文化財保護施設等、多岐にわたる博物館の在り方について概観する。また、博物館における情報にはどのようなものがあるかを習得する。そして博物館の機能を、運営と情報発信の立場から概説する。研究と展示そのほかの活動とが、完全に一体として運営される方式が今日、求められている事を理解する。	
	博物館資料論	博物館の資料とは、博物館活動の基礎をなす、必要不可欠なものである。資料無くしては、研究も展示も教育も成り立たない。資料に関する法律や倫理規定、収集活動や収蔵品化のための法的手続き、また次世代に引き継ぐための保存・管理、調査研究の成果を公開するにあたっての理念や方法について概説する。また博物館資料とは何か、資料の収集や登録・整理保管に関する理論や方法を実例に即して把握し、資料を取り扱う上での基礎的な知識を身につける。	
	博物館資料保存論	文化財の公開・活用と維持・保存とを両立させることは、博物館にとって重要な課題であり、担当学芸員には十分な知識の習得と、的確な対応、そして日々の努力が必要とされる。科学的見地から資料の材質と劣化要因を知り、各材料・各資料に適切な保存環境及び環境制御の方法に関する基礎的知識を学ぶ。あわせて博物館における危機管理や、資料の活用と保存について検討する。授業では、講義だけでなく、各授業において担当を決め、テーマに沿って事前の下調べとグループワークを行い、レジュメを作成し、プレゼンテーションを行っていただく。その後全員でディスカッションを行いながら授業内容を深めていただく。評価は授業でのプレゼンテーション及びディスカッション、2回のレポート提出をあわせて総合的に行う。	
	博物館展示論	展示・展覧会は、博物館・美術館に訪れるほとんどの人々にとって、来館の第一の目的とあってよいであろう。したがって、博物館・美術館にとっても、最も時間、労力、費用を投入すべき事業である。来館者は、展示室に作品が陳列された、完成状態しか見る機会はないが、そこに至るには、様々な調査研究や、作業、調整、熟慮がある。本講義では、展示・展覧会を製作する工程を通じ、展示・展覧会の存在意義を考える。	
	博物館教育論	教育機関としての博物館・美術館の役割を理解する。博物館・美術館は地域社会とどう連携するかを理解する。博物館教育論には大きく二つ①子供向けカリキュラム②大人向けのカルチャーセンター的役割がある。市民が博物館を日常的に活用できるような工夫が重要である。そのためには義務教育制度として博物館を学校教育に位置づけていく事、大人の博物館ボランティアを社会制度として位置づけていく事が望まれる。	
	博物館情報・メディア論	博物館そのものがメディアであることを考えるマクロな視点と、そうした視点を元に、情報機器やデジタルメディアが博物館の収集・保存・展示活動をいかにして形作っているのかをふまえたミクロな視点の双方について考え、両者を有機的につなげていくことを目指す授業である。博物館は、常に「モノ」とそれを取り巻く「情報」を扱い、それによって私達の社会の様々な「意味」を媒介させているメディアである。授業では、このプロセスについて、博物館の具体的な活動を通してひとつずつみてゆく。とりわけ、メディア・リテラシーの重要性、オーディエンスの存在、アクセシビリティの概念、アーカイブの意義と方法、デジタルメディアの活用については、メディア論的な視点からしっかりと考えた。これらを通じて、デジタルメディア時代を迎えた博物館が、その活動をどのように再定義しうるのかを検討する。	

授業科目の概要			
(国際文化学部国際文化学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
博物館に関する科目	博物館実習	博物館資料はどれだけのことを語りえるのか。博物館や学芸員は文化財と来館者とをつなぐパイプ役として、どのような文化的な役割と社会的な責任を負っているのか。本授業では、これらについて考えながら、多岐にわたる学芸員の実務を学ぶ。また、「モノ」を見る・扱う・保存する技術の養成、さらにはこれまでに各講義を受けた集大成として館園実習に向かい、より実務に即した学びを通して博物館や美術館での応用力・適応力を身に付けることを目的とする。	共同 実習102時間 講義24時間
	日本語教授法 I A	日本語を教えるとはどういうことか、何を、どうやって教えるのかを考える。学習者や日本語教育機関の状況など日本語教育をとりまく現状について知り、日本語教育と国語教育との違いを理解する。また音声・語彙・文法面から見た日本語を整理し、今までに学習した知識を日本語教育ではどう扱うのかを知る。特に、初級前半において日本語学習者が困難を覚える事項について確認し、どのように授業を組み立て、実践すればよいのかを考える。	講義24時間 演習6時間
日本語教員養成課程に関する科目	日本語教授法 I B	日本語を教えるとはどういうことか、何を、どうやって教えるのかを考える。日本語教授法 I Aでの学習を踏まえ、より詳細な文法事項についての理解を深め、初級教科書ではどのように扱われているのか、教える場合の注意点は何かを考える。そして、実践への手がかりとして、外国語教授法の変遷や初級の教科書の分析を行い、コースデザインについての方法や授業を組み立てるための全体の流れをつかみ、教案の書き方や教具等の扱い方を知る。1度実際に模擬授業を行い、日本語教授法 2への足掛かりとする。	講義24時間 演習6時間
	日本語教授法 II A	「日本語教授法 I」の内容を踏まえ、実際に自分で授業を作り、実践できる力を養う。『みんなの日本語初級 I』においてどのような項目が扱われ、どのように積み上げられているのかを理解し、そこで扱われている文法項目などについての分析が自分できるようにする。そして、実際に授業を組み立て、模擬授業を行うことを繰り返しながら、初級前半部分における効果的な導入や練習方法、適切な時間配分と理解しやすい提出順序などに着目したよりよい授業を作り、実践できるようにする。	講義7時間 演習23時間
	日本語教授法 II B	「日本語教授法 2-A」に引き続き、実際に自分で授業を作り、実践できる力を養う。『みんなの日本語初級 I』においてどのような項目が扱われ、どのように積み上げられているのかを理解し、そこで扱われている文法項目などについての分析が自分できるようにする。そして、実際に授業を組み立て、模擬授業を行うことを繰り返しながら、初級前半部分における効果的な導入や練習方法、適切な時間配分と理解しやすい提出順序などに着目したよりよい授業を作り、実践できるようにする。	講義7時間 演習23時間
	日本語教育実習事前事後指導 I	11月上旬ないしは中旬に実施を予定する「日本語教育実習」の教案(指導案)を作成する。実習内容の検討・確定から開始し、それを実現するための教案・パワーポイントの作成を進めるとともに、後半からはそれにもとづく模擬授業を行う。改善すべき点を履修者全員で検討し、よりよい教案をめざす。教壇に立つことに慣れるために、6月中旬頃に関連する授業を行う可能性もある。履修者は、日本語教育実習のための教案を作成するとともに、模擬授業においてそれを実践する力を修得する。	
	日本語教育実習事前事後指導 II	11月上旬ないしは中旬に実施を予定する「日本語教育実習」の教案(指導案)およびパワーポイント資料の完成度を高め、それにもとづく模擬授業を行う。留学生が本学に留学している場合は、留学生たちに学習者役になってもらう回を設け、実習本番に近い状況でトレーニングする。改善すべき点を履修者全員で検討し、よりよい教案をめざす。履修者は、日本語教育実習のための教案を作成するとともに、模擬授業においてそれを実践する力を修得する。	
	日本語教育実習	「日本語教授法 I・II・III」ほか日本語教員養成課程での学びをふまえ、実際に日本語を学んでいる日本語学習者を対象に、大学等の教室において日本語を教える実習を行なう。履修者は、実際の日本語学習者を対象に授業を実践する力を修得する。実習は、本学と学術交流協定を締結している輔仁大学(台湾)で行なっているが(実習期間は11月上旬のおよそ一週間)、近年の新型コロナウイルス感染拡大に伴い出国が困難な場合は、岡山市内にある岡山ビジネスカレッジ日本語学科において、日本語を学んでいる留学生を対象に実習を行なっている(実習期間は2~3日)。	